
翼を抱く者 - 紅炎のソレンティア -

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼を抱く者 - 紅炎のソレンティア -

【Zコード】

Z0965M

【作者名】

海士龍

【あらすじ】

かえで
楓は修学旅行先の京都駅構内のトイレで、光を放つ不思議な封筒
を見付けた。

驚いたことに、その封筒の宛名には楓の名前が！？
わけも分からず、始まりの言葉を口にしてしまった楓は、自身の意
思とは関係なく、異世界への扉を開いてしまったのだった。

紅炎のソレンティアの一二次創作小説です。

1・始まりの言葉（前書き）

この小説は、SNG「紅炎のソレンティア」（<http://soloentia.jp/>）の一次創作小説です。

1・始まりの言葉

君は自由だ。
どこへでも行くがいい。

君の道は君が選び、君の責任によつて創られるべきもの。

君は自由だ。

君を縛るものは何もない。

君を定めるものは、君だけである。

君は他人の指図を求めてはならない。
君は何事にも囚われてはならない。

君は孤独だ。

だが、その孤独から逃げてはならない。

さあ、選びたまえ。

翼を抱く者、飛び立つがいい。

「なんで、私がーっ！」

これが叫ばずにいられようか。

目前の塔は、天を貫くかと思つほど巨大で、見渡して目に映る景色は、まるで夢。

とてもとも信じがたい！

私は手にしていた荷物を地面に落として、両手で頭を抱えた。

順を追つて、話そりじやないの。

私、秋野楓アキノカエは、東京都内に住む、ごくごく普通の女子高校生だ。

そして、現在、修学旅行中。

行き先は、京都と奈良。

ほらね。‘じべじべ普通でしょ’？

むしろ普通過ぎて、不平不満はてんこ盛り。

京都と奈良なんて、中学校の修学旅行でも行つたし！
なんでまた京都と奈良ー？

でも、そつは何だかんだ言つても、みんなで出かけるといつこの状況は楽しい。

新幹線の中。

持参してきたお菓子やトランプを広げながら、友人たちと和気藹々やつていると、あつという間に、京都駅に到着しちゃつたの。

近代的な京都駅。

まず目に飛び込んで来たのは、恥ずかしながら、おみやげコーナー。

だって、本当にたくさんの店がずらりと並んでいるんだもん。目を引かないわけがない。

もう、おみやげ？

たつた今着いたばかりだつーの、という自主ツッコミを入れながらも、目を奪われてしまい、友人の袖を引いた。

「ヤバイ。あれ、欲しい！」

「バカ。今買つても荷物になるだけだよ」

「じゃあ、後で買つから、覚えておいて！」

「え？ なんで私が？ 自分で覚えておきなよ」

そんなやり取りをしながら駅を突つ切り、学校が用意したバスに向かう。

修学旅行生用のバスが停まっている隣で、担任がトイレに行くよ
う声を張り上げている。

これから長時間のバス移動が始まるのだといふ。

「行つてこようかな

それほどしたいという気分ではなかつた。

けれど、長時間いけないのだと聞くと、行つておきたくなる。
そんな感じ。

「なら、荷物、持つていてあげようか?」

「うーん

3日分の着替えやら何やらが入つた旅行鞄。

普段なら頼んでいたと思う。

だけど、この時私は、何となく、その友人の申し出を断つてしま
つた。

重い荷物を抱えてトイレに向かう。

この時は断つたことを若干悔いた。

だけど、この何気ない選択は、後になつてみると、正しかつたと
思わずにはいられない。

同じ学校の子や他の学校の修学旅行生。

その他の旅行者が並ぶトイレの列の最後尾に私も並ぶ。

想像に易いと思うんだけど、そちらの美味しいラーメン屋よりも、かなり長い行列になつてゐる。

しばらくしてようやく私の番になつた。

個室に入つて、用を足そうと思つたその時。ふと、ある物に気が付いた。

(何これ?)

正面の壁に白い封筒が、金色の画鋲で貼り付けられている。

(なんで、こんなところ?)

一見すると、なにやら怪奇的だ。
いつたいどこの誰の仕業だらうか。
どう考へてもイタズラである。

私の前にこの個室に入った人たちは、これを見て何も思わなかつたのだろうか?

気味が悪いと田を逸らし、用を足そうとした。

だけど、その封筒がどうも光を放っているように見えて仕方がない。

もう！ 気になつて、気になつて！
用を足すどこのではない！！！

よく見ると、封筒の縁は、金糸で細工されていて、不潔さはない。
それどころか、蠅を溶かして封をされているあたりは、何やらア
ンティークっぽい。

私は画鋲を抜き、封筒を手に取つてみた。

固い。

カードのような物が中に入っているようだ。

裏返して見る。

あっ、と私は声を上げた。

驚いたことに、封筒の宛名に私の名前が書いてあった。

(なんで?)

偶々自分と同姓同名の宛名が書かれてあつたといふことなのかも
しれない。

けれど、偶然にしてはすいぶんと偶然すぎる。

どうしようかと悩む。

「のまま放つておけば、この先ずっと悩み続けることになつそうだ。
だ。

私は恐る恐る封筒の封を切った。

封筒の中には、やはりカードが入つていて、二つ折りのそれを、
私はそつと開いた。

『 貴君をここに招待する。

扉に立ち、始まりの言葉を唱えよ。

エクス・ニヒロー・ニヒル・フイ

ソレンティアの門は君を歓迎するだろ?。』

銀色に輝く文字を読んで、私は首を傾げた。

さっぱり意味が分からなかつた。

(招待するところとは、招待状なんだらうけど。始まりの言葉を唱えよつて、この次に書いてある呪文みたいな変な言葉のことなんかあ)

ひらひらと、カードを裏にしてみたり、表にしてみたり、はたまた透かしてみたりした。

封筒の中にはカード以外のものは入つていないようだ。

楓は再びカードの文章に目を落とした。

「えーっと、何々? エクス……ニヒロー、ニヒル……フイト……?
」

唱えよ、と言われたので、口にしてみた。

そんな感じだ。

素直に従つてみただけのこと。

だけど、次の瞬間、田の前が真っ白になつた。

白。

というか、眩しい。

蛍光灯を目の前に突き付けられたような感じだ。

眩しさに、目を開けていられなくなる。

ぱんっ。

勢いよく扉が開く音が聞こえた。
けれど、私がいるのはトイレの個室の中だ。
気のせいだったのかもしれない。

ふつと眩しさが和らいだのを感じて、瞼を開いた。

「うわっー。」

目の前の生き物に思わず声を上げた。
てんとう虫である。

だけど、なぜか、スーツを身に纏っている。
シルクハットまで被っている。

てんとう虫は片手を自分の胸の前に持つていくと、優雅にお辞儀
をした。

「カエデ・アキノ様でござりますね。私めは、チーロ・バルトロン
メーイオと申します。AIN・ソフ・アルより貴女様をお迎えに上
がりました次第にござります。さあ、お時間がござりません。急ぎ、
出発いたしましょ！」

「はあ？」

意味が分からぬ。
さつぱり不明である。
きっとこれは夢か何かなのだろ？

そもそもトイレの壁に封筒が貼り付いていたところから、おかし
かった。
あんなところに自分宛の封筒が貼り付いているわけがない！

（やうだ。きっと私、夢を見ているんだ！　まだ新幹線に乗つてい
て、寝ているんだ。そうに違ひない！）

なるほど、夢の中ならば、
てんとう虫も人間の言葉を話すかもしれない。

私はてんとう虫をまじまじと見つめた。

じつに紳士らしくてんとう虫である。
襟元には赤いタイを締め、手には白い手袋をはめてくる。

(あははは。あり得ないー！)

まつたくもつてあり得ない話である。

私はてんとう虫を指差して、ケラケラと笑った。

「あのひ。申し訳ござりませんが、私めもいろいろとお亡の身でござつたまし。あまりにひのんびりしてこる時間はござつません」

早く早くと、てんとう虫は走り。

ビーナスアーティストのドアを開いて外に出るといつたりじつ。

私にしてもトイレの個室で長々と居続けるつもつはない。
外に出るに出て興議はないのだが…。

(まだ用足していないんだけどね)

もともとそれほどしたくて来たわけでもない。
まあいいや、ドアに手を伸ばした。

ガチャリ、ドアを開く。

とたん、再び大量の光の波が押し寄せてきた。

いや、先程とは比べものにならない光だ。

暴力的にまで強烈で、圧倒的。

堪りず、さすと瞼を開いた。

風。

涼やかに駆け抜けていく。

私はゆっくりと瞼を開いた。

白く霞んだ視界が徐々に色づいていく。

そして、目の前には、

天を貫くばかりの巨大な塔がそびえ立っていたのである。

2・魔法の塔

圧倒されて言葉もない。

田の前に見える白い塔は、『田大』という域さえも越えて、でかでかとそびえている。

そう。あまりにも大きすぎて、『塔』である」とさえ疑いたくな

るほどだ。

といつのも、塔の真下に近付いた私の田には、真っ白い壁にしか見えないからだ。

その壁は緩く彎曲しながら、左右の地平線まで続いている。

だが、再び遠く離れて天を仰ぐと、やはりそれは塔で、その白い塔の先端は白い雲を貫いている。

直径も計り知れなれば、高さも計り知れない。
実に奇怪な塔である。

(でも、まあ。夢だし……)

これは新幹線の座席で眠っている自分が見ている夢なのだ。
夢であれば、わりと何でも“有り”なのだろう。

そう心に言い聞かせ、私は正面に視線を戻した。

門がある。

これもなかなか巨大だ。

横幅は10メートルほどで、向かつて右側だけが開かれている。

門の左右には同じ制服を着た門兵が2人立つていて、長い槍を手にしている。

「あの門がソレンティアの入り口だ」わざいます

チーロが説明をした。

(ソレンティア？ なんだつけ？)

首を傾げた後で、そう言えば、と思い出す。
トイレの壁に貼り付けられていたカードに『ソレンティア』と書かれてあつた気がする。

「そう。この門の先がソレンティアなのね」

「そして、この塔はアイン・ソフ・アウルと申しまして、ルティアのみが塔の中に入ることができるのです」

「ルティア？」

「“資格を持つ者”といふ意味です。さあ、門の中へ」

標準サイズよりやや大きくてんとう虫に促されて、私は門へと歩み寄つた。

門を潜る時、ちらりと門兵の顔を盗み見る。

門兵のガラス玉のような青い瞳がキラリと光を放つた。
どきりとした。

何やら無機的で、ロボットのようだと思つた。

「ねえ、今の人たち。ちょっと変じゃなかつた?」

「変……ですか?」

「何だかロボットみたいだつた」

ああ、と言つてチー口は頷いた。

「彼らはヴェーダです。機精人。機精界に住む人工生命体です」

「は?」

初めて耳にする単語に理解が追いつかない。

(キセイジンひつて、キセイカイつて、何ですか？)

じうにもへんてこな夢だ。

無駄に設定が細かい。

だが、しょせん夢は夢。
覚めてしまえば終わってしまつ夢なのだからと、私は理解するこ
とを放棄した。

「へえ、ヴェーダね」

適当な相づちを打つた。

「つまり、普通の人間じゃないってことよね？」

「アキノ様のおっしゃる“普通”的定義が分かりかねますので、返
答に困ります」

「普通の定義？」

「ソレンティアでは、人間を“普通”とは申しません。まあ、
追々と身に染みて分かつていくことでしうが

チー口は言葉を濁した後で、楽しげな笑みを浮かべた。

門の内側の壁には、細かいレリーフが施されている。

植物だろうか。

薦のような模様もあれば、抽象的な図形模様もあった。

乳白色の中を進む。

霧のような、霞のような、もやに辺りは覆われている。

数歩先も見通すことができないので、チーゴの羽音だけを頼りに足を進めていると、やがて門の終わりが近付いてきた。

突然、もやが晴れ、視界が色付いた。

目の前に白く輝く道が真っ直ぐに伸びている。

道の先は、壮大な玄関^{エントランス}を構えた石造りの校舎だ。

道を進みながら左右を見渡せば、青々とした芝生が広がっており、その両脇を美しい並木が縁取っている。

あれ？ と思い、私は空を仰いだ。

そして、チーゴに振り返る。

「いいって、塔の中だよね？」

「はい。ソレンティアです」

「塔の中に更に建物があるって、どうこいつらへ、 究まである」

「ルルはアイン・ソフ・アウルの内部ですから」

さつぱり答えになつていない。

私は、ぶーんと羽音を立てて飛んでいるチーロに、じりっと視線を向けた。

(でも、まあ、しょせん夢だし)

矛盾は夢の十八番おはなだ。

いちいち気にしていたら、

老後を待たずに頭はツルツルピカピカになつてしまつ。

(気にしない。気にしない)

疑問も不思議もすべて投げ捨てて、鼻歌交じりに道を進んだ。

不意に視野が陰つたように思う。

あともう少しでエントランスに上がるという時だ。

私は腹に衝撃を受けて後ろにひっくり返った。

「ぐええー」

鶏を絞めたような悲惨な悲鳴が響く。

名譽のために言つたが、その悲鳴は楓が上げたものではない。

主は、つい先程まで楓の顔の前をぶんぶん飛び回っていた虫だ。

「死ぬー。死ぬー」

哀れな虫は白皿を剥いてジタバタしている。

「ここの虫ー。やっと捕まえたぞー。リングドを元の世界に帰せー。」

チーロを捕らえた人物は、チーロの入った両手に口を押し当てる怒鳴り声を張り上げた。

「リングドの言ひことを聞かないで、ここのまま握りつぶしてやるからなー！」

「ひー。お助けをー！」

悲痛な声を聞きながら、私は地面にぶつけた尻をさすりながら、ゆっくりと立ち上がった。

並んで立つてみれば、怒鳴り声の主は小さな子どもだ。

私の胸の高さもない。

浅黒い肌。

黒髪は肩に着くか着かないかの長さで、
湖のよつなあお蒼い瞳を大きく輝かせている。

(あれ? うの子……)

髪から横に飛び出した耳の先が三角にとんがつていて、世の中にはあつとあらゆる個性があるとは言ひが、たすがこの耳は個性の域を超えている。

なんとアリか、絵本に出でてくる妖精のようだ。

顔も可愛らしい。

怒つてこるので、本当に怒つているのか疑いたくなるよつな愛らしさだ。

甲高い声をあやんあやん言わせて、

両手の中を睨んでこるので、ますます可愛い。

しかし、だ。

実際に口にしている言葉は何とも物騒。

私をここまで案内してくれたてんとう虫を、握りつぶして殺すと齧しているのだから。

「えーっと……」

義理とこゝろのものではないが、一応チーコに対して思ひこと
があり、
彼を握つづぶやつとしてこの子の氣を逸らやつし、私は声を
発してみた。

(だけど、何を言つたらこゝのやう…)

すきすきと痛む腹を抑えた。
そうだ！この子に膝蹴りを喰らつていた。
とにかく謝つて貰おう。

「あのう。お腹、痛いんですけど……？」

ちらり、と蒼い瞳が私を映した。

「お前、誰？」

明らかに、この子の方が私よりも年下である。
なのに、何という尊大な言い方だらうか。
私はムツとして名乗つた。

「秋野楓。^{あきののかえで} 16歳！」

年齢まで告げてやる。

これで少しばは態度を改めて欲しい。

ところが、『 そうは問屋は降ろさない 』といつもつである。

ふーん、と鼻を軽く鳴らされただけだった。

「ふーんって。それだけ？ あなたが私のお腹を踏み台にしてチー
ロに飛び掛かつたんでしょう！」

「やつだ。虫は飛んでいた。リングは背が高い。だが、ジャンプ力
には自信がある。飛び台さえあればな」

胸を反らして、実に偉そつである。

(「このクソガキ！」)

全身をわなわなさせて、
私は子どもを上から見下ろした。

「あなた、リングってこのの？」

「響き谷のフリューゲルの姪、翼ある者だ。^{リングブルム} …お前は人間だな。新
人生か？ リングも昨日この虫に騙されてここに連れて来られた

が、リンドは帰るー 入学するつもりなんてないんだー。」

そして再び先の行動に戻る。

リンドブルムは両手に向かつて怒鳴り声をぶつけた。

「リンドを元の世界に帰せーーー！」

ですから、と振り絞つたような哀れな声が響いた。

「コンドブルム様の世界へと続く扉は閉ざされてしましました。帰ることは不可能です。何度もそう申し上げていますでしょ？」「

「騙された！」

「いいえ。扉を開かれたのはリンドブルム様の血ぬです、

「コンドはこんなことになるとは知らなかつたー。」

「そのようにおっしゃつても。私の役目は塔に選ばれた方々をソレンティアに案内差し上げること。送り返すことではござませ

ん」

「じゃあ、リンドはビルすれば帰れるんだー。」

だからですね、と呆れ声。

「何度も申し上げています通り、それなりの許可を取る手続きをな
れり……」

「ダメって言われた」

「それでは正統な理由だと認められなかつたのでしょうか。残念です」

チーロはすまし顔で言つてのけた。

わざと齧やめたのは幼い子どもの方だ。ぼやつと呟く。

「……握り潰してやる」

「ひーー！」

ぶーんと響いたチーロの羽音がいかにも悲しげだ。
私は思わず、リングブルムの腕を押さえた。

「待つてー！」

「なんだよ！」

「可哀想じゃないの。それに、たとえ夢の中の出来事だとしても殺
生は見たくないわ。てんとう虫だけど、しゃべるてんとう虫だもの。

田覚めが悪いじゃなの」

やつはつと、チーコを掴んだままリンクドブルムの頭が、
じりん、と傾げられた。

「私は気持ち良くて田覚めたいのよ。これから修学旅行だし。だから、
ね？ チーコを離してあげて」

「お前の言つてこる」と、よく分からな

「分からなきや分からなくていいわよ。びつせ夢だし。理由はもち
ろん、まともに会話ができるとは思ひたくないんだから。とにかく、
あなたは両手を広げればいいのー。」

「むー」

リンクドブルムは眉間に皺を寄せて俯いた。
納得できない」という表情だ。

「お前は好きでここに来たのかもしれないが、リンクドは来たくここ
に来たわけじゃない。リンクドは響き谷に帰りたいんだ」

「あら。私だって好きでここに来たわけじゃないわ。けれど、夢は
選べないもの」

「夢、夢つて、やつからお前の言つてこると分からない。夢つ

て何だー。」

「夢は夢でしょ、ひへ。」

(なんだか変な話になってしまった。なぜ夢の中で、これは夢なのだと説明しなければならないのだらうか)

「私だつてね、わつわと四見めたいわよ。修学旅行中なんだか」

「ふーん、と羽音が響いて、すみませんが、と申し訳なさそうな弱々しい声が聞こえていた。

「アキノ様は、やけに勘違いをなすつてことあります。これは夢ではじまいません。そう思いたいけど、ソレンティアが不思議な場所であることは確かでござりますが、ソレンティアは現実なのでござれこまわ」

「はー。」

リングブルムの両手の中でブンブン言つてこの虫に向かって、私は思いつゝきついでかい疑問符を返した。

「ばか言つちやいけない。
どう考へても夢でないはずがないのだ。」

(だつて、てんとう虫が人間の言葉をしゃべっているのよ。巨大な塔があつて、その中には空があつて……。そんなはぢやめぢやなことが現実であるはずがない！)

私は拳を振り下ろした。

「いいんや！ これは夢よ！」

言い張る楓にチー口は羽音で答え、リンドブルムは再び首を傾げて答えた。

沈黙が流れ、それじゃあ、と最初に口を開いたのはリンドブルムだった。

小さな唇を大きく開いて、きらきらと瞳を輝かせた。

「夢か現実か確かめてみたらどうだ？」

「どうやって？」

「ハリヤッテ」

バコンッ！

(-? -)

「痛い！ 何するのよー。」

私は殴られた頬を抑えて声を荒げた。
すると、リングブルムはこうりと笑みを浮かべた。

「痛いか。おめでとうー。この世界は現実だ」

「ちつともおめでたくないわーー。」

「どうがめでたいのか説明して貰いたい。

頬は痛いし、このへんテ「な事態は夢ではないと照明されてしまつた。
むしろ状況は悪化したくらいいだ。

「嘘でしょ？ 本当に夢じゃないの？」

だつて、てんとう虫が話してる！

子どもの耳はとんがってるし、塔は巨大だ。

私は両手を地面に着いて、がくりと頭をもたげた。

3・魔法使いの学園

もう何が何だか分からない。

夢だと思っていたからこそ、すべてを受け流してしまった。なのに、これが本当に現実として起きていることだとすれば、ちつとも受け流せない。

とんでもない事態だ！

私は両手を地面に着いた“打ちひしがれている”格好のまま、ぼそりと地面に向かつて言葉を吐いた。

「…虫に騙された」

「な、何をおっしゃいますか、アキノ様！」

いつの間にリンドブルムの手から抜け出したチーコは、私の顔の前をブンブン飛んで、甲高い声を上げた。

「騙したなど、とんでもない！」

「だつて、夢だと思つてたのこー！」

「それはアキノ様の勝手でござります」

「勝手?」

「はい。第一、扉を開かれたのはアキノ様自身です。これはアキノ様ご自身の選択の結果です」

「選択の結果ですって？ 私がいつ選択したのよ。だいたい私はトイレの個室にいたのよ！」

「普通ドア開けるよね？ それがどんな状況であれ、開けるよね？ トイレの中にずっといたくはないもの。これを“選択”って言うわけ？ 不可抗力よ！」

「それでも、アキノ様は……」

扉を開かれた、とチーロは続けようとしたに違いない。
けれど、今の私にチーロの言葉を最後まで聞いてやる義理はなかった。

「あなたはここに私を連れてくる前に、ここがどういう場所なのか、私はいつたいどうなつてしまふのか、ちゃんと説明した？
しなかつたでしょ？ それどころか、早く早くつて、私を急かしたじゃないの。あの時あなたがちゃんと説明してくれていたら、私はこんなところには来なかつた！」

「騙された！」と再び大声を張り上げると、チーロは高く高く飛び上がつた。

そして、まるみゅうひ元祖ほどの大きさになる。

「それでは私は、アキノ様をソレンティアまで案内するといつ、お役目を果たしましたので、これにて失礼いたします」

「ちょっとー」

「ああ、急がないと。トンボ俳句の会に遅れてしまつ

「ふ～ん、と羽音が遠ざかっていく。

その音が何とも虚しく聞こえてきて、私は途方に暮れた。

(どうしよう。これから……)

突然見知らぬ場所に連れてこられ、
しかも、リンドブルムが大騒ぎしてこる通りに帰る術はないのだ
といつ。

何やら無性に悲しくなつてきた。

そんな時だ。

空氣を読めない子どもが私に向かって荒げた声をぶつけってきた。

「どうしてくれるんだ。お前のせいで虫に逃げられたー！」

むかっ、としたのは私の方。

こつちほこつちで忙しい身なのだ。

放つておいて欲しいし、ガキの苦情に付き合つてやる余裕はない。

けれど、売られた喧嘩は買わないと氣が済まなくって、私も声を荒げて言い返した。

「何それ、私のせい？ 私だって最悪なのよ。だいたい“トンボの俳句の会”って何なのよ。今、五月だから、季節的にトンボの活動時期じゃないし、そもそもトンボは俳句なんてしないつーのー。もう。なんでよ！ なんで、私がここに連れてこられなきゃならないの？ 私がここにいる意味がサッパリ分からぬ。私、どうしたらいいのよつー！」

一気に捲し立てる、なんら解決にもなっていないのだけど、一通りスッキリとした気分になる。

肩で息をしながら、私はじろりとコンドを見やつた。

すると、悲しいかな。

正気に返つてしまつた。

喧嘩相手としてコンドブルムは、あまりにも幼すぎた。

10歳？

いや、12歳くらいだろうか。

とにかく小学生といつ感じである。

高校生の自分が小学生相手に本氣で怒るなんて、なんて大人げない！

気恥ずかしくなつて私は、リンドブルムから目を逸らした。すると、リンドブルムは拍子抜けしたようだ。眉間に皺を寄せた。

「怒つたり、落ち込んだり、大変なやつだな」

「……誰のせいよ」

「コンドのせいじゃないのは確かだ」

じりじりと、リンドブルムに眼をくれる。それから、ふと思いつ出して、頬に右手を、腹に左手を添えた。

（“コンドのせいじゃない”で思い出したわ。“コンドのせい”なものもあるじゃなー）

まずはそれを片付けておきたい。

（せうよ。問題は一つ一つ片付けていければいいのよ。せうすれば、次に何をすればいいのか見えてくるかも）

田の前にあるもの。それは、あれだ！
私はリンドブルムを真っ直ぐに見据えて、人差し指を幼い顔に突
き付けた。

「リンド。一つあなたに要求するわ」

「何だ？」

リンドブルムは、じてん、と頭を傾げた。

「謝つて欲しいの。あなた私のお腹を蹴つたでしょ？　そして、
そのあと頬を殴つたわ」

「でも、それは虫を捕まえようとしてやつたことだ。そして、お前
のためにやつたことだ」

「理由はどうでもいいの。あなたが私に暴力を振るつた事実は変わ
らないでしょ？　暴力は良くないわ。謝りなさい！」

「むう……」

「むう、じゃないわ。謝るのー。」

「うー」

リンダブルムの眉間に皺が寄る。

抵抗しているというよりも、本氣で困っている様子だ。
私は、仕方がないなあ、と両手を腰にあてた。

「さん、ハイー。『めんなさーい。』ほら、言つて。さん、ハイー！」

「……」

ため息を付いた時だ。

リンダブルムを呼ぶ声が聞こえて、

私は弾かれたよつに後ろを振り返つた。

校舎の中から滑るように駆けてくる2人組。

エントランスから出てきたその姿を見て、私はドキリとなつた。

美形。

これぞ本物の“美形”である。

テレビで“イケメン”なんて言われて

大量生産されていいるアイドルとは格が違う。

“美しい”という単語そのものの姿をした少年たち。

「げ

駆け寄つてくる美しい少年たちに対し、不適切な言葉を発した

のはリングドブルムだ。

心の底から嫌そうな表情を浮かべて、彼らの到着を待つた。

先に到着したのは、黄金色の髪をキラキラと輝かした青年の方で、もう一人よりもこちらの青年の方が年上らしい。すらりと高い身長は、私よりも頭2つ高い。

彼はスッと腰を曲げて、小さなリングドブルムを見下ろした。

「やつと見付けたぞ。ものすくなく探したんだからな。ものすく心配したしー。」

「ブルー」

リングドブルムは苦々しそうな顔をして、ブルーと呼んだ青年から目を逸らした。

そこにもう一人も到着した。

美形であることには違いないが、先の青年がハツと眼を奪われる美しさならば、こちらの少年はじわりじわりと心惹かれてしまう美しさだ。

銀糸のような髪をサラサラと揺らして、リングドブルムの正面に立つと、ゆったりとした仕草で腰を降ろした。

幼い子と視線を同じくすると、穏やかな声を口にする。

「昨日ソレンティアに着いたはずだよね？ 私たちは君を探して君

の部屋に行つたのだけれど、君の姿を見付けることができなかつた

「うそ。コンドは昨日に来て、それからずっとここにいたんだ」

「あらへー。」

銀髪の奥にあるアイスブルーの瞳が驚きを含んで大きく開かれた。コンドブルムは、こぐん、と傾いてから胸を張つた。

「コンドは帰る気もんまだ！」

ため息が一つ。

彼らはお互いの顔を見合せると、再びコンドブルムの顔を覗き込んだ。

「帰れないんだぞ、コンド！」

「そうだよ、もう帰れないよ。コンドの入学手続きは済んでしまつているからね。寮の部屋も決まつている」

「そんなの嫌だ。コンドは帰るー。」

ふいり、とそっぽを向いたコンドブルムに、青年たちは更にため息を重ねる。

「そんなんに帰りたきや、ソレンティアでしつかり学んで、一刻も早く卒業すればいい」

「卒業？　どのくらい勉強すれば卒業できる？　1時間？　2時間？　もしかして、3時間？」

「リンドー……」

青年は肩を竦めて、空を仰いだ。

一方、もう一人は一ヶ口と微笑んで、リンドブルムに告げた。

「リンドーが一生懸命頑張れば一年くらいで卒業できるかもしないね」

「一年！　そんなんじゃダメだ。リンドーは響き谷に帰らないと」

「帰つてどうするの？　何かしたいことがあるの？」

「したこと……？」

リンドブルムは眼を瞬かせた。

そして、こくん、と咽を鳴らした。

「嘆き谷に行きたい。行きたいって、フリューゲルにも言つたんだ。そしたら、フリューゲルが招待状をリンドーに手渡して、中を開いて声を出して読んでみろって」

「父上がそんなことを？ それじゃあ、まるで騙し討ちだ」

「やつなんだ。フリューゲルはひどい…」

「…カジね、リング。きっと父上はリングで、嘆き谷に行く前にソレンティアで学んで欲しいと思つていらっしゃるんだよ。…ね？ そつだとは思わない？」

「……」

少年の柔らかい口調にリングブルムは顔を俯かせた。

さてと、と青年が私を振り返った。

すっかり蚊帳の外になつていた私は、不意打ちを食らつたかのようにビッククリして、青年の瞳とともに田を合わせてしまつた。

かあつと顔が赤らんだ。

(「う、こんな美形と田を合わせたことなんて、未だかつてないよ！…）

焦りに焦つてしまつて、居たたまれない気分になる。

そんな私の様子など察するところなく、彼はニコッと笑みを浮かべて尋ねた。

「えーっと、君は？ 見かけない子だけど、新入生？ もしかして、うちの可愛い子が何か迷惑を掛けたりしたかな？」

可愛い子。

確かにリンドブルムは可愛いが、それは見かけだけの話だ。

(迷惑ね。迷惑と言えば、迷惑を掛けられたのかも)

腹と頬の痛みを思い出した。

けれど、それをこの美形に訴える気にはなれなかった。

それよりも、幼いリンドブルムやてんとう虫では話にならなかつたことをあれこれ聞ける絶好のチャンスかもしれないし、私は思い付く限りの疑問を彼らにぶつけることにした。

「あのう。私、秋野楓といいます。ここはどこなんでしょうか？
私、何も知らずにチーロとかいうてんとう虫に連れてこられたんです。私はここで何をすればいいんでしょうか？」

一思いに言い過ぎたのか、二人は顔を見合せた。
そうして、苦笑を浮かべて私に向き直る。

「四つの世界がある。人間が支配する人間界、獣人セリアンが支配する獣人界、妖精エルフが支配する妖精界。

そして、魔法力によって偽りの命を宿した精霊たちの世界……」

機精界だ」

「この四つの世界の狭間に建つ巨大な塔がAIN・ソフ・アウル。ここです。そして、ソレンティアは、その塔の内部に存在する魔法使いの卵たちが集う学園です」

「ええっと、それはつまり…。ソレンティアって、魔法使いの学校だったの!?!?」

そう言えば、チーロが、ルティアがどうの、資格がどうの、と言つていたような気がする。

ルティア。

つまり、資格を持つ者というのが“魔法使いの卵”という意味だとしたら?

それは、魔法使いになる素質のある者という意味なわけで、楓は魔法使いになるかもしれないここに連れてこられたということになる。

「魔法使い? 私が?」

あまりのことに言葉もない。

そんな私に銀髪の少年が柔らかく微笑んだ。

「おそらく貴女の入学手続きもすでに済ませているはずですよ。寮の部屋も決まっているはずです。どこの寮か、学生課に聞きに行ってみましょう」

一緒に来てくれるという一人に、いいんですか、と申し訳なさげに聞き返した。

すると、明るく答えたのは金髪の青年の方だった。

「構わないさ。うちの可愛い子が世話になつた礼、もしくは、迷惑を掛けた詫びさ。ところで、俺たちは君に名前を告げてなかつたな。俺は響き谷の領主フリューゲルの子、イデアフル暁だ」

「私は弟のタ星ハルシオンです。ちなみに、私たちはリンドの従兄にあたります。リンドの母親が僕らの父上の妹なんです」

「へえ、と頷いた私は、彼らの耳がリンドブルムと同様に尖つていることに気が付いた。

「もしかして、あなたたちは人間ではないのか？」

人間を普通とは言わない。

そう言つたチーロの言葉を思い出して、私はおずおずと尋ねた。

私のいた世界を人間界と呼び、他にも三つの世界があるのでしたら、確かに、人間だけを指して“普通”とは言わないだろう。

私の問いに、イデアブルーはカラカラと笑い、ハルシオンは微笑

みを浮かべながら頷いた。

「はい、私たちは人間ではありません。

エルフです」

4・種族の違い

(エルフ?)

私はイデアブルー、ハルシオン、そして、リンドブルムの顔を順繰りに見やつた。

自分たち人間と、どこが違うのだろうか。
目立つて違うと言えば、先がとんがった耳だ。
左右の横髪から、によつきり突き出ている。
あとは、すっと伸びた手足だろうか。

幼いリンドブルムは置いておいて、イデアブルーとハルシオンはどうやらも背が高い。
いや、背がと言うよりも足が長いのだ。
腰の位置が欧米人のように高い。

そう、欧米人っぽい！

色の白い肌。

すっと通つた鼻筋。

碧い瞳。

さしづめ、北方系ゲルマン人という感じだ。

けれど、やはりどこか違う。

人間と比較するには、彼らエルフは美しすぎる気がする。

とするが、この美しさこそエルフの一番の特徴なのかもしれない。

「エルフは珍しい？」

凝視していた顔が一瞬と笑みをつくりて尋ねてきた。
ドキリとして、私は大慌てで首を縦に振った。

（珍しいといふもんじゃない。初めて見たのだから）

「…でも、人間とそう変わらないように見えます」

「やうかな？」

聞き返したようだが、答えを求めているわけではないらしい。
イデアブルーは私の言葉に満足したようで、楽しげな笑みを浮かべた。

よし、と短く掛け声を放つ。

「学生課に行こうか。リンクもだぞ。学科の選択がまだだろ？」

「学科って、どういったものがあるんですか？」

すかさず尋ねると、穏やかな声が答えてくれる。

「学科は4つあります。戦闘魔法科、魔法史研究科、治癒幻惑魔法科、総合魔法科です。そして、各学科は更にいくつかのコースに分かれています」

「ソレンティアには、進級といつ概念がない。つまり、一年生、二年生といった括りがないんだ。だから、学生は学科を選ぶとそれが専攻するゼミに所属して、学ぶんだよ」

「ゼミにもいろいろありますし、教師が開講しているもの、学生が自主的に行っているものがあります」

「教師の話を聞いているだけの授業を受けるのもいいけど、気の合う仲間同士で開いたゼミっていうのも、けっこう勉強になるんだ」

さてと、と言ひついでアブルーはリングブルムを見下ろした。すつと両手をリングブルムの両脇に差し入れると、よつ、とこう掛け声でリングブルムを、まるで荷物を扱うかのように、肩に担ぎ上げてしまった。

「うわっ。何するんだ！ 降ろせ、ブルー！」

「何を言つているんだ。楽ちんだる？ 優しい兄上様がリングのことを運んできているんだよ」

「絶対それは違う！ ブルーは優しくない！」

「どうが？ 優しいじゃないか。ほら、高い高い！」

言つてイデアブルーは、リングブルムを高く持ち上げたり、ぐるぐると振り回した。

「ブルー！」

罵声が飛んだのも最初のうちだけ、その後、ぐーとも言わなくなつてリングブルムはイデアブルーの首に両腕を回して大人しくなつた。

くすくすと、ハルシオンの口から笑い声が漏らされる。

「ブルーはね、リング。また君を捜してあひこち駆け回らな」といふくなることを危惧しているんだよ。なんせ、私たちは昨日からずっと君を捜していたんだからね」

「リングが入学していくと、父上から手紙があつたのに、まったくお前の姿が見えない。俺たちは本氣で心配したんだぞ」

「…そんなこと、頼んでない」

「ぶつくせと、ちつとも可愛くないリングブルムを一人は、可愛い、可愛い、と言つて頭をくしゃくしゃに撫で回した。

ふと、私の大荷物に気が付いて、ハルシオンがすっと腕を伸ばしてきた。

「持ちましょ」

「いえ。重いので」

一泊三日の修学旅行のために準備した荷物だ。
着替えや日用品だけではなく、遊び道具まで入っていて、それなりに重い。

とんでもないと断ると、ハルシオンはくすりと微笑んだ。

「だから、持つのでしょうか？」

さつと荷物を奪われてしまった。

(ひい――。こんな美形に荷物を持たせるなんて、私ってば…!)

申し訳ない気持ちいっぱいになりながら、私は彼らの後ろに続いて校舎の中へと移動した。

一面のガラス張りのホールは、豪奢な4本の支柱によつて支えられている。

見上げると、遙か多角に天井が見えた。

下を見れば、黒光りする石タイルが一面に敷かれている。ぴかぴかに磨かれており、上を歩くものの影を鏡のように映した。

「この建物は、中央校舎と呼ばれています。エントランスに入つて、右手には学生課がありますが、左手の廊下を進むと、塔の上部へ上がるエレベーターホールがあります」

「寮に行くときは、エレベーターを使うんだ」

ハルシオンの言葉を続いだのは、リンドブルムを抱いているイデ・アブルー。

彼らは私に説明するついでに、リンドブルムにも言い聞かせているのだが、当のリンドブルムはイデ・アブルーの首元に顔を押し付けて、聞いているか、いないか、いまいち分からぬ態度だ。

「この低層階には各学科の教室もありますから、学科が決まつたら、よく確認すると良いですよ。図書館や学食、運動場といった施設もここにあります」

「寮の食事は無料だが、学食は有料だ。けれど、学食の方が品数が多くて、面白いメニューがたくさんある」

「今度、一緒にしようね」

コツン、コツン、と足音がホールに反響する。
その広いスペースの右手に受け付けカウンターがいくつも設けられてある。

おそらく、これが学生課の窓口なのだろう。

窓口の一つに、長い黒髪を三つ編みにした事務員らしい少女が座っている。

イデアブルーとハルシオンはその少女に向かって歩み寄ると、リズ、と彼女を呼んだ。

彼女はゆっくりとした動作で顔を上げた。

大きな眼鏡の奥で、ワイン色の瞳が瞬かれる。

私は、ハッとした。

彼女の首元に奇妙な継ぎ目を見つけたのだ。

「継ぎ目…」

思わず大声を上げていた。
ワイン色が向けられる。
気まづくなつて、私は彼女から目を逸らした。

ああ、と相づちを打つたのはイデアブルーだ。

「彼女はリズ・レアード。……ナノス・ヴェーダだ」

「ナノス・ヴェーダ？」

「フォウス・ヴェーダによつて造られた労働階級のヴェーダのことです。見た目はフォウス・ヴェーダと同じですが、その体は無機物でできいて、完全な鋼鉄のアンドロイドです。顔と首の継ぎ目に縫い目のようなものがあるのが特徴なんです」

「フォウス・ヴェーダって？」

「高い知性を持つ支配階級の機精人^{ガトーダ}のことです。体は有機物でできていますが、心臓はなく、代わりに魔法の力を動力源とした“核”が体の中心に埋め込まれています。彼らの顔には刺青^{いれずみ}のような痣がありますから、一目で分かると思いますよ」

機精人^{ガトーダ}ということは、人間界や妖精界とはまた異なつた世界……機精界の住人だということだ。

私はリズの顔を見つめて小首を傾げる。

(見た目は人間と変わりないのに……)

不意にリズが、バチン、と音の出せつな瞬きをした。はつとして私は名乗つた。

「秋野楓です」

「本日入学してきた方ですね。『ご入学おめでとう』ります。私は本部事務組織総務課付事務員、リズ・レアードと申します。これヨリソレンティアの生活に関しまして簡単なご説明をいたします」

台本をそのまま読み上げているといった雰囲気だ。

そして、もし本当に台本が用意されているのだとしたら、“この大根役者”と言つてやりたい感じの口調で、リズは説明を始めた。

「まず服装についてです。新入生には制服一式が支給されますが、基本的に服装は学生らしい範囲内で自由となつております。着替えの購入を希望される場合は、タウン・エスペランサの衣料店『ブティック“アルマ・フロマ”』にて行ってください。次に、寮個室についてです。ソレンティアの学生には各寮に個室が与えられます。必要最低限な家具はすでに用意されていますが、他にご入用の場合は、タウン・エスペランサの『モーダス・ショップ』にてご購入下さい」

それから、ヒリズはおもむろに冊子を取り出した。

「その他詳細は、この冊子に書かれてある通りですので、よく読

んで下さい。以上、説明を終わります。アキノさんの所属寮は、ネツァク寮です。

入寮手続きはすでに完了していますので、このまま向かっていた
だいて構いません」

「ネツァク寮？」

「おい、良かつたな。リンク、お前の寮もネツァク寮なんだぞ」

リンクブルムの頭をぽんぽん叩いてイデアブルーが言つて、リンクはまことにイデアブルーの腕から滑り降りた。

「リンク、ネツァク寮か？」

「やうだよ。よかつたね、さつそく寮の知り合いができる。…カエテさん、リンクのことをくれぐれも頼みます。いたずらが過ぎたら、ビシバシ叱つて下さつて構いませんので」

「こりと頭を下げるハルシオン。

イデアブルーもリンクブルムの肩に手を置いて言つた。

「うちの可愛子の」とを頼むよ」

「へん、と頭を悩ませたのは、私だけ。

自分の方こそ誰かに頼み込みたい気分なのだ。

未だに右も左も分からない。

不安でんこ盛り。

一寸先は闇な自分に、頼まれても困る…。

私が曖昧な笑みを返すと、それで、トイデアブルーはリンクドブルムの顔を上から覗き込んだ。

「学科はどうするんだ？」

「んーっと」

リンクドブルムは精一杯背伸びをしてカウンターに顎を乗せている。その眉間に皺が寄つた顔の下敷きになつているのは、各学科の説明が記載された学科申請用紙。

4つの学科から所属する学科を選べといつのだ。

私もリズから用紙を受け取つて、リンクドブルム同様に眉を顰めた。

（戦闘魔法科、魔法史研究科、治癒幻想魔法科、総合魔法科。…何が何やらサッパリだわ）

戦う自分の姿を思い浮かべてみる。
どうぞのテレビゲームの魔法使いキャラみたいにローブを着て、杖を構える。

(ダメだ。ピンとこない…)

同様に、僧侶キャラも思い浮かべてみるが、やはりダメ。

魔法史研究科は何やら小難しそうだし。

そうなると、一番無難そうな総合魔法科だろうか。

そう思つた時、リンドブルムがペラリと紙音を鳴らしてリズに申請用紙を提出した。

「リンドとカエデは戦闘魔法科だ」

「は？」

嫌な予感がして自分の手元を見やる。

(ない…)

さつきまで田の前のカウンターに置いてあつたはずの学科申請用紙がない！

あれ? とか、リンドブルムは楓の申請用紙にも記入して、

リズに隠出してしまったのだ。

5・ネツァク寮へ

「な、何でことすこのよー。」

「喜べ。リンダが決めてやつたわ。カエテの悩みを一つ解決してやつたのだー。」

胸を反らす子供もは、実際に誇らしげである。

(「のクソガキー。）

私は顔を赤らめて声を荒げた。

「なんでようにもよつて戦闘魔法科？　私は総合魔法科にしようとして思つていたのにー。」

「リングが戦闘魔法科に決めたからだ。カエテはリングと一緒に一緒に楽しいぞ」

「楽しいかもしないけど……。いや、違うー。そういう問題じやないーーー。」

私は慌ててリズに振り向いた。

「今私の申請用紙、間違いだから返して!」

「それはできません。すでに受理されました」

「なんでよー。今、あなたも見ていたじゃない。あれは私が書いたものじゃなくて、リンクが書いたものなの」

「しかし、アキノ様のお名前で提出されました。アキノ様は戦闘科の所属となります。すでに手続きは完了いたしました」

「なつー!」

早すぎはしないか。

いや、そんな疑問よりも、どう考へてもおかしい。だつて、リズは見ていたはずなのだ。

リンクブルムが私の紙に書くところをー

「だいたいなんで本人以外から受け取っちゃうのー。どう考へてもおかしいわよ」

リズは黙り込んだ。

すまし顔で、手続きはすべて完了したと言っている。

そして、さつさと寮に行け、と言いたい顔だ。

「カエデ、こうなつてしまつては仕方ないよ。ナノス・ヴェーダは融通が利かないから」

「すみません」

仕方がないと言つたのはイデアブルーで、
ペニリと頭を下げたのはハルシオンだ。

当のリンドブルムは素知らぬ顔。

自分がいつたい何をしでかしたのか分かつていないと、いう態度だ。

私は両手を腰にあてて、リンドブルムの前に立つて立つた。

「私の書類をひりしてリンドが勝手に書くのよ。ちよつとひりすぐれない？」

「リンドはカエデのためにやつた」

「どじがよー もう！謝りなさいよー あなたは私に対してひどいことをしたの。謝つて！」

リンドブルムの眉間に皺が寄る。
うー、と低く唸つて、困り顔だ。

「えーっと、カエデ。本当に申し訳ない。こには俺が代わりに謝る

から、いつの可憐に手の上とせいか許して欲しい」

「私も謝ります。本当にすみませんでした」

どうしてリングブルムが謝らず、彼らが頭を下げるのか。
深々と頭を下げるイデアブルーと一緒に田の謝罪をするハルシオン
に、私はますます腹が立つた。

（今、謝るくらいなら、リングブルムが私の紙に書いている時に、どうして止めてくれなかつたのよ！）

けれど、いつまでも頭を下げ続けている彼らのために、もういい、
と言わざるを得なかつた。

ふいっと横を向くと、投げやりに言葉を吐いた。

「もうここです。頭を上げて下さ」

「本当になんてお詫びしたらいいか」

「お詫びなんて……」

彼らにどれだけ詫びられても、当のリングブルムの態度がああで
ある限り、まったくもって無意味なのだ。

寮まで案内を買って出てくれた彼らに従つて、私は学生課のカウ
ンターから離れた。

豪奢なエントランスを左手に眺めながら廊下を真っ直ぐに進むと、じちゃんととしたホールに行き着く。

エレベーターホールである。

両脇の壁に3つずつ扉が並んでいて、ハルシオンは一番手前の扉の前に立った。

扉の脇に三角ボタンがある。

長く細い指がそれを押すと、ランプが点いた。

しばらくあつて、エレベーターの到着を告げるベルが軽く響き渡つた。

ランプが点滅して扉が開く。

ハルシオンは振り返つて、私に中に入るよう促した。

リングブルムを抱えたイデアブルーが入り、最後にハルシオンも中にはいると、扉は自然に閉まつた。

エレベーターが上昇を始める。

その微かな振動を感じながら、不思議なことに気が付いた。

「ボタンは？」

周囲を探してみるが、行き先指定ボタンが見あたらない。扉の上を見ると、階数表示もなかつた。

ああ、トイデアブルーは頷く。

「このHレベーターは乗った者を、勝手に目的の階まで運んでくれるんだ。だから、ボタンはいらないんだよ」

「まさか」

そんなわけがない！

…と、本日何度そう思つたことだうつか。

いい加減に疲れてきたので、

そういうこともあるかもしけない、と適当に相づちを打つた。

やがて上昇速度が減速して、がん、とこう小さな振動と共にHレベーターが停止した。

扉が開いた。

すると、なんとそこは森の中だった。

(は？ なんで森？)

木々の中に細い小道が通っている。

足を踏み出すと、さくりさくりと土が鳴り、その地面には、繁る緑の天井の隙間から漏れてきた陽の光が模様を作っていた。模様は木々が風に揺れる度に大きく変化する。まるで万華鏡だ。

どこからか小鳥のさえずりが聞こえてくる。

(じじって、塔の中だったよね?)

つい数秒前にエレベーターから出でてきたことをも忘れそうになつた。

(これも“そんなわけがない!”の一つなんだわ。ホントあり得ないんだから)

塔にバカにされていいようすで、ムッとした表情をつくりながら、私は小道を進んだ。

「この道を真っ直ぐ行つた先がネツァク寮だ」

それは木造の建物だった。

一昔前のお金持ちが住んでいたような洋館で、石造りの塀を周囲にめぐらせている。

入り口は黒い鉄製の門。

その門の前に人影が見えた。

歩み寄っていくと、同じくらいの年頃の女の子だといふことが分かつた。

私たちの姿に気付き、寄りかかっていた門から背中を離して、につこり笑みを浮かべた。

「あなたがカエテ・アキノさん？」

駆け寄ってきて、楓の前に立つた。

「私、黒瀬彩。寮長に頼まれてあなたを案内することになつているの。ほら、私も日本人でしょ。年も同じくらいみたいだし。適役つて感じなの」

まるで以前からの友人に話しかけるように、明るい声と大きな身振りで話しかけてきた。

「私のことは、『彩ちゃん』でいいから。私も『楓ちゃん』でいい？……ところで、なんでお供がいるの？」

エルフたちに気が付いて、彩は首を傾げた。

どうやら彼女は、右も左も変わらない私が心臓をドキドキさせて寮の門までやつてくると想像していたらしい。

ところがどうこう。

イデアブルーとハルシオン、そして、ちつせんオマケまで引き連れている。

「つていうか！ その小さい子、もしかして、リンドブルムつて子じゃない？」

彩はリンドブルムを人差し指で指して声を張り上げた。
眉を顰めたのはエルフたち。そりやあそうだ。
人を指差してはいけません。

「なんで寮長じゃなくって私が案内するかつていうと、うちの寮長が機嫌を損ねて部屋に引き籠もっちゃったからなの。その機嫌を損ねた理由つていうのが、リンドブルムのせいなのよ」
「なんでコンペのせいなんだ？」

身に覚えのないリンドブルムは眉間に皺を寄せた。

リンドブルムは昨日ソレンティアに着いたとはいって、チーロを捕まえようと、ずっと門のところにいたのだ。

当然、ネック寮に足を踏み入れたことはないし、その寮長とやら

らにも会つたことはない。

機嫌を損ねるようなことはしていなければずだ。
といふが…。

「うちの寮長はね、入寮してくるあなたを案内しようとあなたのことを待っていたのよ。響き谷の領主の姪だつて聞いていたし。寮長もエルフだから、それなりに敬意を払つて接しないとね、つて言つていたのよ」

それなのに、と彩は顔を顰めた。

リンドブルムはイデアブルーの腕から飛び降りると、頬を膨らませた。

「リンドは案内してくれなんて頼んでない」

「それでもそれが寮長の仕事なのよ。すっかり『機嫌を損ねた寮長は今朝から一步も部屋を出ようとしないの。困っちゃう』

彩は、やれやれと、首を左右に振ると、私を寮の門の中へと促した。

続いて中に入ろうとしたリンドブルムの小さな肩をイデアブルーの手が抑える。

「リンド、案内をしてくれる人がいるみたいだから、俺たちはこれで帰るな？ いいか？ 僕はティファレト寮に所属している。ハル

はケセド寮だ。何かあつたらすぐに俺かハルのところに来るんだぞ
?」

「ブルーがティファレト寮で、ハルがケセド寮だな」

リンドブルムはイデアブルーとハルシオンの顔を順に見やつて、
こくん、と頷いた。

それから、トイデアブルーは大まじめな顔をリンドブルムに向け
た。

「ピンチの時は大声で俺を呼ぶんだぞ。“兄上様たすけてー”って
な」

「……」

心の底から、大まじめである。

リンドブルムは嫌そうな顔でイデアブルーを見上げた。

「ピンチって、トイレの紙がないとか? それでブルーを呼べば、
何か解決するのか? ティファレト寮からトイレットペーパーを持
つて駆けて来るつもりか?」

「リング、それじゃあ俺はただの便利屋じゃないか。だいたい、お
前のピンチは、トイレに紙がない時のことを言つのか?」

「ブルーはね、リング。君のヒーローになりたいんだよ」

くすくす笑つてハルシオンが助け船を出した。

リンドブルムの黒髪を撫でると、私に柔らげな視線を向けてきた。
私の荷物を差し出しながら、にこりと微笑む。

「カエデさん、リンドのことお願いします。アヤさんもどうぞよろしく」

リンドブルムが門を通ると、一人は置いて行かれたような表情を浮かべてその場に立ち尽くし、リンドブルムの小さな背を見送つていた。

私は何度も彼らを振り返り、ここまで送つてくれた礼を告げたが、リンドブルムは一度も振り返ることなく、寮の中へと入つていった。

6・寮案内

やや古めかしく洒落た印象のある焦げ茶色の扉を、両手で押すようにして、彩は開いた。

そして、ぴょこんと跳ねて楓を振り返る。

「ようこそ。我らが翠玉の寮、ネツァク寮へ」

言つて両腕を広げると、入つて入つて、と大きくて招いた。

Hントラソスの床には、深緑色の絨毯が敷かれている。踏みしめると、靴が浅く沈み、音をすべて呑み込んだ。

「まず、ここ、Hントラソスは男女共有なの。そっちの廊下を進むと、男子寮があるよ。女子寮はこっち」

彩は廊下を左に曲がった。

白い壁に視線を向けながら、私も続く。

ふと見やつた窓の外は森だ。

寮はぐるりと木々に囲まれているらしい。

けれど、暗い印象はない。

むしろ大きな窓から、さんさんと陽射しが差し込んできて、とて

も明るかつた。

足下の色濃い影に目を落として、私はふと氣が付いた。バッと、後ろを振り返る。

「なんで、リンドまでこちあつていてくれるの？　男子寮はあつちだつて、彩が説明したじゃなーの」

「なんで、つて？」

リンドブルムの頭が、こてん、と傾げられる。

「リンドは、男子寮なんかに用はないぞ？」

「用はないつて……。だつて、リンドは」

（男の子じゃないのー）

そう言つと、リンドブルムは頬を膨らませた。ダン、ダン、ダン、と、フローリングの床にブーツの踵を叩き付け、小さな口を大きく開いた。

「リンドは、男の子じゃないー。」

「ええつ」

驚いたのは私だ。

リンンドブルムの幼い体を上から下へ、下から上へと見回した。

ぺったんこの胸。

幼さを考えると、これは判断材料にはならない。

黒髪は肩に着くか着かないか。

男の子にしては少し長めで、女の子にしては短いといつ長さだ。

むしろ、イデアブルーやハルシオンの方が長く、特にハルシオンは銀髪を腰まで真っ直ぐに伸ばしていた。

エルフの髪の長さも、性別の判断材料にはならないみたいだ。

半袖から突き出た腕は枝のよつで、短パンから伸びている脚も折れそつなぐくらいに細い。

小作りな鼻。細く長い眉。

瞳は深い湖の蒼あおで、大きく輝かせている。

(そつか…。そつ言われてみれば、女の子なのかもしけない)

それにリンンドブルムは、自己紹介してくれた時に、誰々の姪とか言っていたような気がする。

それなのに、どうして男の子だと思つたのだらうか。

女の子だと分かつたとたん、男の子だと思っていたことの方が不思議になる。

(あ、そつか…)

腹蹴りだ、と納得する。

リンダブルムは、女子だと判断するには、わんぱく過ぎるのだ。

「もうとお淑やかで、可愛らしかつたら間違えなかつたのに……」

恨めしげに叫び、リンダブルムは眉を寄せた。
けれど、無言で瞳を瞬かせただけ。
だって、と言つたのは、彩だった。

「私、言つたよ。リンダちゃんは昨日の寮長を待つひつけにしてたんだつて。うちの寮長。つまり、ネツァク女子寮のオーデリーを、
ね」

オーデリー・Hブーラル。

歩く西洋人形と呼ばれる美少女で、年は14歳。

ソレンティアに名の知れた我が儘娘なのだと、彩は説明した。

我が儘。

なるほど、通りで、リンダブルムに受けつけを食らつたくらいで機嫌を損ねてしまつわけだ。

機嫌一つで寮長の仕事を放棄してしまつなんて、普通、責任ある立場にいる者のすることではない。

けれど、12歳から26歳までの学生が集まる中で、14歳で寮

長に選ばれるくらいなのだから、あつとオーデリーはよほど成績優秀な学生なのだろう。

「だからね、リングヂゅーちゃんは女の子なんだよね」

「リングヂゅーちゃん？」

リングブルムは、嫌そうな顔をして彩を見上げた。
けれど、何？ と笑顔を返してきた彩に毒氣を抜かれて、“ちゅ
ん”付けの訂正を諦めたようだ。
ふいっ、とそっぽを向いた。

やがて深緑色の絨毯が終わり、若草色に変わった。
再び彩が、ぴょこんと跳ねて楓を振り返った。

「ここから先が女子寮だよ。楓ちゃんとコンヂゅーちゃんの部屋は二階
だから、この階段を上るんだよ。
階段はこの廊下の先にあるからね。じゅーちが南階段で、あつち
にある階段は北階段って、呼ばれているよ。おーけー？」

一人に確認すると、彩は女子寮の入り口すぐにある階段に足を掛けた。

黄金色に輝く手摺りに手を触れさせながら、私とリングブルムも
彩の後に続く。

踊り場に肖像画が飾られている。

貴婦人が花を手に、椅子に腰掛けている絵だ。

(え)

驚いたのは、その貴婦人の耳が普通ではなかつたからである。普通…。

人間であるのならば顔の左右に耳がついている。

エルフも同じらしく、形は異なるけれど、頬の横に耳がある。だが、その貴婦人の耳は頭のてっぺん。まるで三角リボンを着けているかのように、ネコ耳がついているのだ。

「…ギャグ?」

心の底から思った。

ごく真面目なタッチで描かれた絵画だ。すまし顔の貴婦人もとても美しく描かれている。それなのに、なぜかネコ耳。

これは作者の冗句か、誰かのいたずらとしか思えなかつた。

目を大きくして肖像画を凝視していると、その背後を何者かがスッと通つた。

(は?)

ちらりと視界に入ったその何者かの頭に、これは何かの錯覚なのか、ネコ耳が生えていたように見えた。

慌てて振り返る。

制服を着た女の子が鼻歌交じりにエントランスの方へと歩いていく姿が目に映つた。

「ごく普通の女の子だ。

だが、その頭にはネコ耳が生えていた！

「な、なんで！？」

視線を落とすと、スカートから尻尾が出ている。
ちょうどお尻の部分に穴があいているらしく、そこから蛇のよう
に右へ左へと揺れている。

「何あれ！ コスプレ？」

田を白黒させながら大声を出すと、ああ、と彩はすぐに頷いた。

「レフューシアンの女の子だよ。レフューシアンっていうのは、獣人界に住む獣人セリアンの種族の一つで、あの子みたいにネコ耳やネコの尻尾が生えているのが特徴なの」

「ネコ耳、モエ……」

レフューションとやらの女の子の後ろ姿を見送りながら、ぼそりと呟いた。

あのネコ耳がどうこう風に生えているのかは、大いなる謎である。

顔のつくりは人間と変わらないようだから、頭部の骨は人間と同じつくりなのだろう。

そうだとすると、ますますあの位置に耳があることに疑問が大きくなる。

横髪で隠されていて確認できなかつたが、本来耳があるべきところがどうなつてているのか、じつくり観察してみたいものだ。

…とはいえ、ネコ耳は萌もえである。

彩は私が漏らした呟きを聞き逃さなかつたようだ。

あはは、と軽く笑つて言つた。

「モエよね。…でも“モエ”なんて言葉。人間の、しかも日本人にしか通じないからね。モエモエ言つ時は、どうぞ私の前で」

彩がおどけたように言つので、私は、恐れ入ります、と丁寧に頭を下げる。

そして、二人は顔を見合せ、声を立てて笑つた。

「やっぱり日本人って少ないの？」

「どうかなあ。多くはないとと思うんだけど、そもそもソレンティアにどのくらいの学生がいるのか分からぬよな。とにかく大勢いるみたいなんだけど」

「へえ」

階段を上り終えて一階に着くと、彩は廊下の左右に並んだ扉のうち左列の扉を手で追いながら廊下を進んだ。

一つ。

一つ。

三つ、と扉を数える。

八つ目の扉の前まで来ると、彩は楓を振り返って、にこりと笑みを浮かべた。

「ここが楓ちゃんの部屋だよ。どうぞ、中に入つて」

ガチャリ、と扉が開く。

中はハ畳ほどの広さがある部屋だった。

奥にベッドが置かれ、壁際にはタンス。

そして、机と椅子が一つずつ置いてある。

学生課のリズが言つて いた通り、荷物を収納でき、勉強ができる、夜寝られるだけの家具は用意されているようだ。

私が持つてきた荷物をピンク色のタイルの上に置いたのを見て、彩は苦笑した。

「ぶつちやけで言つたとこど、この部屋、趣味悪いから」

「うん。思つ」

私は即答した。

基本的な家具はある。
だから、文句を言えた立場にはないが、一面ピンクのタイルは頂けない。

頭の中までピンクワールドになってしまいそうだ。

「リズも言つていたと思うけど、家具を買い揃えるのなら、タウン・エスペランサの『モーダス・ショップ』だよ。今度案内してあげる。とりあえず今日はこの部屋で我慢して。次はリンドちゃんを部屋に案内するね」

実はね、と笑顔を作った彩は、私の部屋から廊下に出ると、楽しそうに数歩大股で歩いた。

「はい。」彩がリンドブルムの部屋へ。

「と、隣ー？」

驚いたのは私だ。

思わず大声を上げてしまった。

そうそう、と言つて、彩は部屋の扉を開いた。

中はやはりハ畳ほどの部屋で、基本的な家具が置かれている。ピンクスタイルも健在だ。

「偶然というか、必然というか。そりやあ、一日遅いで入学してきたんだもの、同じ寮に入ったのなら、隣の部屋にもなるわよねえ」

一理ありそうな説明だ。

「そういうわけで、二人とも仲良くな。じゃあ次のところを案内するよ。…って！ リンドちゃん、荷物は？」

彩はリンドブルムが手ぶらで入寮してきたことに今更ながら気が付いた。

リンドブルムは彩の視線を受けて、胸を大きく反らした。

「荷物なんてない！ リンドは身軽だ！」

うーん。

それは偉ぶれるところなのだろうか。
些か疑問というか、むしろ意味不明だ。

彩も目を大きくして聞き返した。

「手ぶらで入学してきたの？ ホントに何も荷物ないの？ えー。
すー」「ーい」

「すごい」と言られて、リンドブルムの胸は更に反らされたが、たぶん今の“すごい”は眞実“すごい”という意味ではないと思う。
どちらかといつと、 “あり得ない” の意味に近いと思う私だ。

廊下を進みながら、彩は人差し指を立てた。

「トイレは共有だよ。各階」とにあつて、さつきの階段の脇にもあるけれど、廊下のちょうど真ん中あたりにもあるし、向こうの端、つまり北階段の脇にあるんだよ。……ほらね？」

直線廊下の行き止まつまで来ると、彩の言ひとおり、共有トイレがあつた。

その脇に階段。3人は一階に下りた。

「そつちに行くと食堂だけビ、まずは「」に来て。バスルームが
ここにあるから」

言われて覗いてみると、赤いのれんが下がった入り口がある。
のれんをくぐると、大広場のようになつていて、細長いロッカー
がずらりと並んでいた。

「「」のお風呂、ちょっとす」「」んだよ。広いのは当たり前！ サ
ウナやジャグジーもついているの！」

ただし、と彩は続けた。

「洗面用品やタオルは、各自持参だよ」

じゃあ次、と言つて、彩はバスルームを出て、先程の階段の下ま
で戻った。食堂へと向かう。

レリーフの凝つたアンティーク調の扉を押し開くと、天井の高い
空間が現れた。

広々とした部屋に縦三列に並べられた長机。

ちらほらと、学生たちが食事を取っている姿も見える。

「朝食は7時から8時半。昼食は11時半から13時。夕食は18
時半から20時だよ。でも、授業がある平日は、みんな昼食はキャ

ンパスで食べるんじゃないかなあ。私もそつするし

アヤ、と呼ばれて彩は声の方に振り返った。
背中から白い翼の生えた女の子が彩に向かって手を振っている。

「今、新入生に案内してるのー！」

彩は大声を張り上げて手を振り返した。
そして、私に向き直る。

「今の友達」

「背中から翼が生えていたように見えたけど？」

「あの子も獣人だからね。ルーメペンナリアンっていう種族だよ。
あとで紹介してあげる」

「うん。 ありがとう」

「えーっと、じゃあ、最後はこっちね」

食堂を突っ切って、入ってきたのとは別の扉から出る。
入ってきた扉は西側の扉だが、こちらは南側の扉だ。
すると、その扉は、落ち着いた雰囲気のある部屋に続いていた。

7・ウサギの耳

大きなソファが置かれ、中央にはローテーブルが置かれている。そして、壁にはなんと暖炉があつた。

茶色とオレンジ色の煉瓦が交互に積み重ねられた暖炉は絵本の挿絵そのもので、私は、わあ、と歓声を上げて暖炉に駆け寄った。

「ここの暖炉、本物？ 火つけてもいいの？」

「冬はね」

「初めて見た！」

「私もここに来て初めて見たよ。寒い国から来た子につけかたを教えて貰つたんだ。ここはね、サロンだよ。男女共有スペース。自由に使えるからね」

本を読んだり、おしゃべりを楽しんだり、宿題をしたりするのだ

という。

そして、と彩は更に先にある扉を指差した。

「あの扉の向こはエントランス。つまり、入ってきたところね。ぐるりと回つて来たわけなんだけど、分かる？」

「うん。だいだい」

とりあえず自分の部屋の場所とバスルーム、食堂の位置関係は頭に入れたと答えると、彩は肩を竦めて、それしか案内した覚えないよ、と笑った。

「じゃあ、あとは寮則の説明ね。一つ、門限は基本21時。それを過ぎるのは原則寮長に罰金を出す決まりである。一つ、食堂の利用は……」

まるで条文を読み上げているようだな、と思つたら、サロンの壁に『寮則』が掲げられていた。
彩は本当にそれを丸読みしていたのだ。

「一つ、消灯時間は、特に設けられていない。一つ、ペットの飼育は特に禁じられていないが、近隣迷惑になるものは原則不可。一つ、男女の寮の行き来は、原則不可とする。……って、こんな感じだよ」

「うん。分かった」

彩の声に合わせて文字を田で追つていた私は、額縁に収められた寮則を見つめたまま頷いた。

リンドちゃんは？ と彩がリンドブルムの顔を覗き込むと、リンドブルムも、こくりと頭を動かした。

「それじゃあ、これで私からの説明は終わりね」

「案内してくれてありがとう」

「困ったことが起きたら、いつでも言ってね。もし私がいなかつたら、そこらにいる人を捕まえていいからね。同じネツァク寮で生活しているんだから、みんな家族みたいなものだよ」

「仲が良いんだね」

「うん！」

大きく頷いてから、彩は楓に顔を近付けて囁く。

「本当のことを言つと、そうでもない人もいるけどね。でも！ そういう人つていつのはじかべるだから、安心して」

分かつた、と語つと、彩はにっこりと微笑んだ。
そして、そう言えば、と首を傾げる。

「2人は学科どにしたの？」

「戦闘魔法科だ」

「戦闘魔法科？」

リンドブルムが答えると、彩は瞳を大きくした。
そりやあ驚くだろ？

見るからに元気っ子なリンドブルムはともかく、私は「ぐぐぐ」普通の女の子だ。

学校の勉強も運動も人並み程度にしかできない。
特に、体育で目立つた覚えがない。

走つても、ビリにはならないがトップにもなれず、球技でも、群れをなしてワーワー騒ぐだけのその他大勢だ。

“戦闘”なんて物騒な言葉とは縁遠い生き方をしてきた。
なのに！なぜ！

戦闘魔法科に所属することになってしまったのだろう……！

ジトリとリンドブルムを見やつた。
そして、なんで、と疑問を口にしようとした彩を、片手を振つて制した。

「聞かないで。いろいろあったの。ものすごくいろいろ……」

「わ、わかった……」

力一杯拒絶すると、彩は勢いに押されて深々と何度も頷いた。
話題を変えてくれる。

「時間割を決めないといけないんだけど、私は総合魔法科なんだ。

だから、戦闘魔法科の授業のアドバイスはできないの。『めんね。あとで私の知つている戦闘魔法科の子に頼んであげる。あと一時間もすれば、授業が終わつてみんな寮に戻つてくれると思つから』

「じゃあ、それまで荷物を片付けていようかな」

「うん、そうして。それで、一時間経つたら、ここで戻つてきてね。たぶん、ウサギの耳が生えた男の子が来ると思つから」

「ウサギの耳？ ウサギって、あのウサウサした世間一般的に“可愛い”って言われている生き物？」

「うん、それ。その子も獣人なの。格好いいよ」

私は、ウサギの耳が生えている男の子をイメージしようとしたが、どう頑張っても、バニー・ガール衣装を着たオカマになってしまい、思いつきり顔を顰めた。

しかも、その“ウサギの耳が生えた男の子”とやらは、“格好いい”らしい。

たちまち脳内で、格好いいを目指したウサギがボクシングをやり始めたから、大変だ。

赤いグローブを両手にはめて、キラリと歯を光らせる。

(「ダメだー。無理！」)

ぐつたりとした思いで、私は想像力を膨らませることを断念した。

ありがとう、と改めて彩にお礼を言い、荷物を片付けるためにリンドブルムと連れだって自室に向かった。

部屋の前でリンドブルムと別れて、私は自分の部屋に入った。

ピンクタイルにがっくりした気持ちになる。
早いところ、自分の空間にしてしまいたい。
この部屋とはどのくらい長い付き合いになるのか知れないのだから。

ひんやりと冷たいタイルに腰を降ろすと、旅行鞄を引き寄せた。
修学旅行のために用意した荷物を中から取り出すと、不意に胸が締め付けられた。

トイレに行つたきり戻つてこなかつた自分を、友人たちや先生はどう思つただろうか。
先生は青ざめたに違いない。

もしも先生が、私のようにソレンティアの存在を知らなかつたら、自分の生徒が突然消えた事実にパニックになつて、修学旅行どころ

ではなくなつたかもしぬない。

何も言わずに去つた私を、友人たちはヒドイと言つてゐるかもしない。

次にいつ再会できるとも知れないのに、さよならも言えなかつたのだから。

(お母さん、どう思つつかな。お父さんも)

京都と奈良に行く予定だつた娘が、突然ソレンティアに行つてしまつたのだ。
驚くだらうことは間違いない。

(もう連絡がいつたかな)

担任の先生が顔を真つ青にさせて母親に電話をしてゐる光景が目に浮かんだ。

『娘さんが京都駅で姿が見えなくなりました。はぐれたようです』
申しわけございません、と電話なのに頭を下げてゐる姿を想像しながら、私は洋服を掴んで立ち上がつた。

洋服ダンスの前に立つと、開き戸を開いた。

薄茶色のタンスは下の方は引き出しになつてゐる。

下着は引き出しにしまい、上着はハンガーに掛けて上に仕舞つた。

遊び道具や貴重品もタンスの中にしまつ。

他にしまうところがないからだ。

財布は下着と下着の間に隠した。

最後に旅行鞄をタンスの上に投げ乗せれば、片付けは終了だ。

感覚的にはすぐに終わってしまった気がするのだが、廊下の外に顔を出し、廊下の壁に掛けられた時計を見れば、30分も経つていた。

(リンドは片付いたかなあ)

不意に心配になつてリンドブルムの部屋の方に視線を向けた時だつた。

信じられない物を見付けて、驚愕する。

タンスがズタボロになつて廊下に転がっていたのだ！

「何あれ！？」

駆け寄ると、タンスだけではない。
机と椅子も無惨な姿となつていた。
机なんて、もはや机ではない。板と棒だ。

「どうしたの、コンドー？」

リングブルムの部屋の扉を叩くと、すぐ『リングブルムが顔を出した。

「うと笑つて、嬉し顔だ。

「カエデ、リングの部屋に遊びに来たのか？」

「遊びに来たんじゃなくつて、これはどうこういとなのか聞きたってきたのよ」

これ、と黙つて家具の残骸を指差した。

リングブルムは、ああ、と黙つて私を部屋の中に入れた。

「いらないから捨てただけだ

「いらっしゃ……」

リングブルムの部屋を見渡して、眞葉に詰まる。
部屋のど真ん中にベッドが置いてある。

そして、それだけ……。

他にはこいつさい物がないのだ。

「よく考えた？　本当にいらないの？　後々必要になるかもよ？」

「いらない。響き谷のコンドの部屋だって、こんな感じに何もないぞ。本当はベッドもいらなく。リンクは床の上で寝たり、木の上で寝たり、寒い時はブルーやハルのベッドで寝ていたからな。けど、ここではブルーやハルにベッドに入れて貰えないから、冬に備えてベッドだけは残しておいた」

リンク偉い、と言いたげな顔でリンク、ブルムは胸を反らした。

(いやいや。偉くないから、ちっともー)

第一、木の上で寝てたって、どんな野生児だ。
これら家具も殴つたり蹴つたりしてぶつ壊したのだろう。
呆れてものが言えなくなる。

大きなため息をついてから、私は、それで? と続けた。

「どうするのよ、あの残骸。壊しちゃったら、もう誰も使えないじやないの。寮の備品なのよ?」

「あ、そつか。リンクがいらなくつても、他の誰かが必要かもしけなかつたな」

「やあ

「リンクは燃やそうと思つたんだ。燃やしちゃすことつこうとやくしたんだ。小さければ運ぶのもラクだ

「なるほどね。けど、リンドは物を大切にすることを覚えなさい。とは言え、ああなつちや仕方ないわ。リンドの考え方通り、燃やすしかないわね」

私は廊下にしゃがみこんで、木片を集めた。長さを揃えてまとめる。

リンドブルムも真似するよつて、隣にしゃがみ込んで木片を集め始めた。

集めたものを紐で括りながら、リンドブルムを見やる。

突拍子もないが、根は素直なのだろう。

ちゃんと聞いてやれば、なるほどリンドブルムにはリンドブルムの考え方があるようだ。

それが正しいか否かは別に、言つてこぬこととやつてていることが直結していく、なかなか筋が通っている。

(誰かがちゃんと教えてあげれば、もつひょつとじつにかかるの)(元の)

やつて良い」と、やつてはいけない」とが、まるで分かっていない。

よほど甘やかされて育つたのだろう。

私は力を込めて、ぎゅっと、固く紐を結んだ。

火をおこして良い場所はないかと、彩に聞きに行くと、事情すべて把握した彼女は、寮の裏手にある「//」捨て場に捨てればいいと教えてくれた。

「リングブルムと『ミミ捨て場』に行き、廊下を綺麗に掃除して、時計を見上げると、ちょうど一時間が過ぎていた。

慌てて一階に下りてサロンに向かうと、彩の言っていた通り、ウサギの耳が生えた男の子が私とリングブルムを待っていた。

そう来たか、と思う。

彩の言っていた通り、格好いい。

すらりと背が高く、渋谷を歩いていそつ感じの男の子だ。

だが、しかーし。

ふわふわした柔らかそうな黒髪からまつすぐ上に伸びるモノ。

（なんだ、あれ。可愛い……）

じつと見つめていると、可愛いそれはぴくぴくと動いた。

（あー、本当に生えてるんだ。神経繫がってるー！）

感動しながら、私は“ウサギの耳が生えた男の子”に軽く会釈した。

「秋野楓です」

「俺はラック。ラック＝ロット＝ブリックテイル。年は一九歳」

「うそ！ 見えない！」

「よく言われる」

あはは、と笑い、ラックは氣を悪くした様子もなく、私とリンクブルムにソファに座るよう促した。
大きなソファの隅に腰を降ろして、ようやく私はその人物に気が付いた。

「こちらはウサギの耳ではなく、ネコの耳が生えた男の子だ。

「レフューション？」

やや吊り目がちな瞳を向けられる。
その瞳のせいか、少し怒っているように見えた。
けれど、顔の作り一つ一つは可愛い。
ちつちつやい鼻に、ちつちつやい口。

年は同じくらいだるうか。

まだ幼さの残つた顔は女の子みたいだ。

「オレは、まるで。そつちの小さいのは？」

「リンクよ」

「響き谷の領主フリューゲルの姪、翼ある者だ」
「フルム

「ソンドブルムが私の隣に腰掛けると、ラックはほのきの隣に腰を降ろした。

「田口紹介も済んだことだし、さっそく時間割の組み方について説明させて貰つよ。…と、その前に、お腹すいてない?」

「さう言つて、ラックは鞄からトマトを一つ取り出した。

「これでも食べながら話をじよつか

（え。トマトを…？）

手渡された赤くて丸いものを見下しながら、私は騒然とした。
まごとにトマトである。ある。ある。
一步譲つて、切つて皿に盛つてあるのな!“有り”だと呟つ。
だけど、これは…。

(もしかして、丸囁きを要求されてる…)

丸囁りが嫌だというわけではないが、初対面の相手を前にしてするようなことではないと思つてこむ。汁が飛び散つたり、口から垂れたりしたら、みつともないからだ。

けれど、よく考えてみれば、

朝早く家を出て以来食事といつものをしていない。

朝食は取つた。

けれど、急いでいたから、おにぎり一つだ。そのあと、ソレンティアに連れてこられてしまひ、そのごとごたの中、昼食を取るのを忘れた。今は夕方である。

空腹を思はずに、じくじくと唇を鳴らした。

手の中には赤く熟れたトマトが一つ。さつと、かぶりついたら、じゅわっと甘酸っぱい汁が出てくる元違ひない。

それをじゅるじゅる吸いながら、

水っぽく柔らかい果肉を舌で味わいながら食べるのだ。

そつとトマトを手のひらでこすつた。

張りのある皮が、あわあわと音を立てた。

(ま、いいか)

みつともないと言つてゐる場合ではない。

お腹の皮と背中の皮がくつつきそうだ。

私は、めゅうと鎧を閉ざして、トマトに歯を押し当した。

「…甘い」

瞬時に広がった甘さは予想した以上で、口を大きく開いてトマトを見下ろした。

(おこしー)

続けてもう一口。一口。

無言で食べ続け、あつといつ間に食べ終えてしまつた。

とたんに口が寂しくなる。

物足りないと思つくらいに美味しいくて、もつと食べくなつてしまつた。

視線を感じて顔を上げると、ラックの穂やかな顔と目があつた。思ひが通じたらしく、どうぞ、とラックはもう一つトマトを差し出した。

「ありがとう。すゞく美味しい」

「それは良かった」

「リンドももう一つー。」

隣で上がった声に振り返ると、
リンドブルムがトマトの果肉にまみれた手をラックに突き出して
いた。

「うわー、リンドー。」

口周囲もぐしょぐしょだ。

あまりの食い汚さに驚いて、思わず身を引いた。

まさに楓が危惧した、

丸かじりをした結果の、みつともない”がそこについたのだ。
一の句が継げなくて、私は口をぱくぱくさせ、リンドブルムを
凝視した。

(…というか、トマトのベタは?
どこにも見あたらないんだけど、食べちゃったわけ?)

私が仰天している隙に、ラックは鞄からハンドタオルを取り出し、
リンドブルムの手を取った。

ローテーブル越しにリンドブルムの手をタオルで綺麗に拭つ

顔も優しく拭いてやると、田を細めて微笑んだ。

「慌てて食べなくつたって、いっぱい持つてるよ
「うんうん。ラックの鞄は不思議だからな。
いっぱい野菜が入っているんだ」

大きく頷いたのははるきだ。

勝手にラックの鞄を開けると、その中からレタスを取り出し、
ぽいっと、リンドブルムに向かって投げ寄こした。

ビニール袋に入ったレタスは、
ガサリと音を立ててリンドブルムの両手に収まつた。
それを見下ろし、こてん、とリンドブルムは頭を傾げる。

「ラックはこれをどうやって食べるんだ？」

「普通にこりだよ」

ラックは腕を伸ばし、リンドブルムの手からレタス一枚剥がし
取ると、

そのまま口の中に入れて、むしゃむしゃと食べ出した。

「それって、味ないんじゃないの？」

「とんでもない。レタスはすごく甘いんだぞ」

「本当?」

とてもとても信じがたい。

私は訝しげな顔でレタスを食べるラックを見やつた。

確かに、レタスやトマトは生でも食べられる野菜だ。
けれど、トマトはともかくレタスは、レタスだけでは食べないだ
るづ。

まるでおせつみたににむしゃむしゃと食べ続けるラックは、
何やら本当にウサギっぽい…。

「もしかして、ラックはニンジンが好き?」

「好きだよ」

「ニンジンも生で食べたりする?」

「そういつ時もあるけど、炒める時もあるよ」

(ーーー)

そういう時もあるのか。

言葉を詰められた。

(もうぱりウサギなんだわー)

獣人と呼ばれる人たちの性質は、外見と関係があるのだらうか。
もしはどうだとしたら…。

私はラックの隣に座るはるきに視線を向けた。

はるきのネコ耳がピクリと動くのを確認して、
ローテーブルの上に人差し指を置いた。
はるきの視線が私の指先に落ちる。
私は素早く人差し指を左右に動かした。

「…カエデ。それは何のつもりだ？」

しばらくあって、はるきはジト目で見据えながら、低めた声を響かせた。

私は、あはは、と空笑いをして、指を引っ込めた。

「はるき君が、私の手をバチンってやってくれたら面白いなあ、と思つて」「オレはネコじやねえ！」

「けど、ハルキの尻尾さつきから落ち着きないぞ」「…」

おそらく無意識だったのだろうが、
左右に動かされた指に反応して、はるきの黒く長い尻尾は左右に
揺れていた。
ラックに指摘されてはるきは顔を赤らめた。

「これは違う！ 初対面な奴らを前にして緊張しているんだ！」
「緊張？ ハルキはそんなタマじやないだろ？」「…」

くくく、と笑つてラックははるきの肩に手を置いた。

落ち着け、と軽く叩く。

そして、鞄の中からプリントを取り出し、ローテーブルの上に広げた。

「ちよつど今日、学生課から新しい時間割を貰つてきたところなんだ。

これを元にして自分の時間割をつくるんだよ

それは戦闘魔法科の授業がずらりと書かれたプリントだった。左軸は日付、上軸は時間となっている。

同じ日同じ時間に開講されている授業もいくつかあって、授業名の下に教師名が記されている。

「戦闘魔法科には、物理系魔法コースと攻撃系魔法コースがある。どちらのコースにも教授が5人、助教授が7人、助手が5人、講師が25人いる。

そのそれが授業を開設しているから、かなりの量の授業数だろ?」

「うん。どれを選べばいいのかサッパリ分からない。

…ねえ、物理系魔法コースと攻撃系魔法コースって、どう違うの?

「物理系魔法コースっていうのは、

肉体強化系の魔法を専門的に取得するコースだ。

防御魔法、攻撃魔法、変身魔法を主に学ぶことになる

「肉体強化系の魔法つて？」

「物理的な攻撃に対する防御力をUPしたり、物理的な攻撃力をUPする魔法のことだ」

説明してくれるはるきの顔を見つめながら、要するに、と思ひ。

（受けたダメージを減らしてくれたり、ちょっととの力で相手に多くダメージを与えるようにしてくれる魔法つてことね）

はるきは、それから、と続けた。

「攻撃系魔法コースというのは、

攻撃系の魔法を専門的に取得するコースのことだ。

氷系攻撃魔法、炎系攻撃魔法、風系攻撃魔法、雷系攻撃魔法、

物質系攻撃魔法を学べる。

物質系攻撃魔法つていうのは、物質……たとえば

剣や弓なんかに、魔法的効果をつける魔法のことだ

「魔法的効果つていうと？」

「たとえば、剣に炎系の魔法的効果をつけたとする。

炎系攻撃魔法が使えない者でもその剣を扱えば、

炎系攻撃魔法と同等もしくはそれに準じる威力を発揮できるようになる。

また、剣自体が炎属性になつていてるから、

炎に弱い敵に大きなダメージを与えるられる

「なるほどね」

大きく頷いて見せたが、正直なところ、いまいちピンと来ない。“魔法”なんて単語、ＴＶゲームの中でしか聞いたことがなかつたのだから。

未だにここがソレンティアという魔法学園で、これから自分は魔法を学び、使うようになるのだと言われても、まだまだ実感が湧かないのだ。

とは言え、話はどんどん進んでいく。
ラックの指先が時間割の上をすうっと滑った。

「授業名の横にカッコして数字が2つ書いてあるだろ?」

言われてみてみると、カッコの中に斜線で区切られた数字が2つある。

「これは全授業数と授業回数を意味している。たとえば『(3~15)』と書かれていたら、15回あるうちの3回目の授業という意味だ。大抵、初回の授業はオリエンテーションを行つ。だから、慣れた学生は初回は出席せずに、2回目の授業から出席することが多いな。あるいは、初回に出て合わないと思って、2回目からやめてしまつたりすることもある」「同じ授業名で、同じ先生、同じ授業回数であれば、

大方、同じ内容の授業だ。

だから、無理矢理途中から参加するんじゃなくって、初回に戻るのを待つてから参加するといい

「先生たちは何度も同じ授業を繰り返しやってくれるわけ?」「まあな。

…ソレンティアは学年もなければ、入学時期も定まっていない。だから、こういつシステムになつていてるんだろうな」「なるほどね」

今度の“なるほど”は半分以上納得して口にしている。
人間界で通っていた学校とソレンティアでは
まるでシステムが違うのだと言われば、それはそうだろう、
ソレンティアは魔法学園なもの、と納得できてしまうからだ。

ふと、縦軸の異様さに気が付いて、目を見張った。

時間割の縦軸は、てっきり一ヶ月分の日付が、
1日、2日、3日……と書かれているものだと思っていた。
ところが、数字は1~4までしかない。

「この『満月の1』とか『満月の2』とかって、何?」「
今月は“満月の月”なんだ。満月の月の1日目、
満月の月の2日目……という意味で
『満月の1』『満月の2』って言うんだよ
他にも、新月の月、上弦の月、下弦の月がある。
これらは、1~4日周期で変化する
一ヶ月が1~4日しかないってこと?」

瞳を大きくすると、はるきは肩を竦めた。

「ソレンティアでは、他の世界とは異なる
独自の法則によって時間が流れているんだ」
「異なるって、まさか一日の長さまで違うとか言わないよね？」

寮の廊下に掛けられていた時計を思い出す。
たしか、12進法の時計だった。
あれが見間違いじゃない限り、ここでの1日も24時間のはずだ。
そう言つと、ラックは、その通り、と頷いた。

「ただし、ここでの24時間が
君の世界での24時間がどうかは分からないよ。
つまり、ここでは数百年の出来事でも、
君の世界では一瞬の出来事かもしれない。その逆も然りだ」
「けど、オレの感じだと、そんな大きくて変わらないっていう印象
だな」
「ううなの？ それならいいけど」

ソレンティアを卒業して人間界に戻つてみたら、
浦島太郎みたいに、
友達も両親も死んでて、家も跡形もなかつたりしたら、嫌だ。
けれど、そこまで異なった時間の流れはしていないうで、

ひとまず安心する。

私がホッと息を吐くと、ラックが、ちなみに、と話を続けた。

「授業は一週間で1回。

つまり、今週初回の授業があつたら、

2回目の授業が行われるのは次の週で、3回目は更に次の週だ。

一週間は7日間あつて、月の日、^{ディエス・ルナ}

マルスの日、^{ディエース・マルティス}

メリクリウスの日、^{ディエース・メリクリー}

コピテルの日^{ディエース・イオウイス}、

ウヌスの日、^{ディエース・ウェネリス}

サトウルヌスの日、^{ディエース・サトウルニー}

そして、太陽の日^{ディエース・ソーリス}だ。

：月の日に初回があつた授業は、2回目の授業も月の日に行われる。

マルスの日に初回があれば、2回目の授業もマルスの日だ

「太陽の日は休日だから、授業はない」

「ちなみに今日は？」

「下弦の2、ウヌスの日だ」

ラックの指先が紙の上を滑り、時間割の今日の日付のところに行き着く。

そして、ゆっくりと明日の部分に移動する。

「明日初回の授業は、これとこれとこれ。」

それから、これくらいかな

「とりあえず、それらを出られるだけ出して、改めて選んでいいばいのよね？」

「最初のうちはそれでいいと思つよ。

先生の話を聞いて、おもしろいと思ったらそのまま続けて出ればいいし、

つまらないならやめればいい

「せいやつてこるうかに、自然と時間割が決まっていくもんだよ」

9・奇妙な視線

ラックがくれると言つたので、
彼が学生課から取つてきたといつ今月分の時間割を受け取り、
明日の授業をチェックする。

「明日の1時間目にさつそく初回の授業があるみたい。
アメリカ先生っていう先生の」
「アメリカ先生は攻撃系魔法コースの先生だよ。
まだ若い先生で、たしか人間だったと思う」
「本当に?」

人間と聞いて俄然、親近感を持つてしまう。

名前から想像するに、残念ながら、日本人ではなさそうだが…。

だけど、入学してから初めて受ける授業が、

人間の年若い女の先生の授業というのは、なんもありがたい。

「じゃあ、まずこの授業に決定」
「俺も出てみようかな」
「え。ラックも?」
「教室までの案内人が必要だろ?」
「すごく助かる!」

申し訳ない気もするが、朝イチで迷子にはなりたくない。
ここはラックに甘えさせて貰おう。

「ところで、1時間いつて、何時からなの？」

「8時50分からだ。」

だから、8時半に寮のHONTAランスで待ち合わせな

「うん。ありがとうございます。」

…えっと、リングは？ ビーツするの？

隣に座るリングブルムを振り返り、肩を竦めて呆れた。
リングブルムは、すやすやと寝入っていたのだ。

(ちつとも話に入つてこないと思つたら…)

私はリングブルムの体を揺さぶった。

「起きなさいよ。」

ラックとはるきがせっかく説明してくれているのに

あはは、と笑つてラックは楓を制した。

「仕方ないさ。まだ小さだから」
「でも……」

眉を下げるラックを見、

それから、はるきの不機嫌を露わにした顔を見やつた。

私は、ごめん、と一人に頭を下げる。

そして、はた、と思う。

どうして自分がリングブルムのことで謝らなければならないのだ
らうか。

私とリングブルムは他人で、

今日、と言うか、ついさつき会つたばかりの関係だ。
むしろ、無関係と言つてもいい。

それなのに、なぜ…？

リングブルムのことで頭を下げるイデアブルーとハルシオンの姿
を思い出して、

何やら腹が立ってきた。

これではまるで、自分も彼らと同じだ。

平和そうな寝息を立てている子供にも目を向け、
ぐつたりとした気持ちになる。

もしかすると、リングブルムは

そういう力を持ち合わせているのかもしれない。

人を自分の代わりに謝らせる力。

これではどんでもない言い方なので別の言葉を探してみると、

つまり、“庇護欲をそそられる”とこ「ひじだらつか。

いや、違う。

守つてあげたいわけではない。

『「うちの可愛い子』』

イデアブルーがリングブルムに対して言っていた呼び名を思い出して、
それだ、と私は手のひらを打った。

“可愛い”という単語は置いておいて、
出会つてからわざかな時間のうちに、
私はリングブルムに対して“うちの子”といつ感覚にさせられて
しまつたのだ。

あまりにもすんなりと、リングブルムは私の中に入ってきて、
今ではすっかりそれが自然になつていて、
なんだかずつと前からの知り合いみたいだ。

あどけない寝顔を見下ろしていると、
ラットがやれやれと腰をかがませて、
リングブルムの小さな体を抱き上げた。

「部屋まで案内してくれる?」

「でも、女子寮の中には入れないんじや……」

ちらりと、壁に掲げられた寮則に視線を投げた。

『男女の寮の行き来は、原則不可とする。』
確かにそこにはそう書かれている。

そう言つと、ラックは、にっこりと笑みを浮かべて、
サロンの扉を顎で指した。

開けて、と言つのだ。

扉を開いた先はエントランス。
私はラックの後ろに続いて、サロンから出た。

「原則は原則だからね」

「つまり、例外があるってこと?」

「と言うより、あんまり守られていないってことだよ」

「先生たちにさえ見つかんなきや、まあ大丈夫だな。
けど、だからと言つて堂々と行き来するのは、
ときどき頭のかてえ奴がいて、

そいつらが先生にチクッたりするから、やめた方がいいぜ」

私が開け放しにした扉を閉めてから、はるきも後に続いた。

リンドブルムの、ベッドしかないシンプルな部屋まで一人を案内
すると、

ガチャリと軽い音が響いて、廊下に彩が顔を出した。

彩は私の隣に立つラックとはるきに一瞬驚いた表情を浮かべたが、
騒ぐことなく、彼らに向ひと笑みを投げると、

私に向かつて口を開いた。

「説明終わった？ 時間割できた？」

「だいたいね。…彩ちゃんの部屋、そこだつたの？」

「ううん。ここは友達の部屋。

それより、今から迎えに行こうと思つてたんだ。

夕食一緒にどう？」

願つてもないことだ。

まだ彩以外に女子寮の知り合いがない。

あんな広い食堂で一人で吃べるのは寂しそぎる。

あれ？ と彩は首を傾げた。

「リンドちゃん、どうかしたの？」

「それが、寝ちゃったんだ」

「そつか。疲れたんだね。

じゃあ、リンドちゃんには後でおにぎりを持っていくとして…

「リンドも…たべ…る…」

もによもによと、リンドブルクが口を開いた。

ラックの腕から滑り降りると、

ふらふらした足取りで私たちの方に歩み寄ってきた。

「起きたの？」

「お腹減った」

「そう。じゃあ、一緒に食堂に行きましょ。

…ラック、はるき、今日はありがとう」

「ああ、また明日な」

「寝坊すんなよ」

ラックとはまるきはそれぞれ言って、軽く片手を振つて去つていつた。

その背中を十分に見送つてから、私たちは食堂に向かう。
時刻は19時15分。
寮生がみんなそろつているのではないかと思つほど、食堂は賑わつていた。

私は彩に習つて、入り口でトレーを持つと、配膳カウンターに並んだ。

パン、スープ、サラダを流れ作業のように受け取り、最後に紅茶をトレーの上に乗せて、席に着く。

席は自由で、

縦三列に並べられた長机のどこに座つてもいいのだという。

とは言え、人には習慣というものがある。

何となくいつもと同じように座つてしまつたのだと、彩は笑い、真ん中の列の奥の方の席に着いた。

私も彩の隣に腰を降ろして一息付くと、奇妙な視線に気が付いた。
視線は複数。

何とも言い表しがたい感情を含んで自分たちを見つめている。

(新入生だから?)

ならば好奇な視線を送つてくるはずだ。
けれど、それはもつとずつと負の感情。

(歓迎されていない?)

リンドブルムが私の隣にトレーを置いて、
ガタン、と音を立てて椅子に腰掛けた。

はつとする。

視線はすべてリンドブルムに向けられていた。
注意深く見渡すと、何人かがサッと目を逸らした。
そして、隣の者同士でひそひそと小さな声を立てた。

「カエデ、食べないのか?」

気付いているのか、いないのか、
リンドブルムが蒼い瞳で楓の顔を下から覗き込んできた。

「食べるわよ」

「私もー。お腹ペレペレだもん。いただきまーす！」

彩の掛け声に合わせて、
リンゴブルムも大口を開いて、いただきます、と言った。
やや遅れて私も挨拶をし、スプーンを手に取った。

翌朝である。

一瞬、自分がどこで目覚めたのか分からなかつた。

見慣れぬ天井。

ぎょっとするピンクタイル。

がらんと寂しい部屋にポツンと置かれたベッドの中で、
私は瞼を開いた。

足をタイルの上に降ろすと、

冷水を掛けられたかのようにヤコヤコとして、思わず身を縮める。

一刻も早く絨毯を敷かなければ、と思つた。

支給された制服に着替えると、隣の部屋の扉を叩いた。

結局、リンドブルムも私と同じ授業に出てみることになったのだ。

寝ぼけ顔のリンドブルムを連れて食堂に向かつと、すでに彩も来ていて、昨晩と同じ席で朝食を取った。

時刻は8時20分。

そこからが戦場だつた。

1分1秒を争うように出掛ける支度をして、エントランスへと走る。

「おはようー。」

「あれ？」

ウサギの耳を見付けて、ラックのもとへ駆け寄った。

すりりと高いラックの背中に隠れるよひし、はるきが学生鞄を持っていた。

「はるきも同じ授業に出るみたいだ。」

「そうなの？」

それは心強い、と笑顔を向けると、はるきは私から顔を背けた。ラックが笑う。

「照れてるだけだから気にしなくつていいよ。それより急ごう」

寮から出て、木立の道を歩く。

やがて、森の中にエレベーターホールが現れた。

朝の通学ラッシュに混雑しているかと覚悟していたが、6つあるエレベーターはどれも優秀で、よく働くらしい。開いた扉の中には、女の子が4人だけだった。

耳の先がとんがつている。

エルフに違いない、と彼女たちをちらりと一瞥して判断した。

私たちが中に入る仕草をすると、

彼女たちは部屋の端に寄り、スペースをあけてくれた。

ひそひそ声。

まだ、と私は横目で彼女たちを見やつた。

彼女たちは私の視線に気が付いた様子もなく、お互いにお互いの耳に口を押し付けるように話していた。

チラチラ、とリンドブルムに視線を向ける。
そして、再び、ひそひそ……と。

がこん、という小さな振動と共にエレベーターが停止して、扉が開いた。

スカートを蝶の羽のようにはためかせながら、

彼女たちはエレベーターを降りて行った。

「さあ、じつちだ」

きつと彼女たちのひそひそ話に気が付いたのは私だけだったのだ
らう。

はるきは相変わらず可愛い顔をわざと怒らせたような表情をして
いるし、

ラックは明るい声をエレベーターホールに響かせて、西の方を指
差している。

当のリンドブルムは眠たそうな顔だ。

何度も何度も目元を手の甲でこすっている。
しまいには、拳が丸ごと入ってしまいそうな大きなあぐびをして、
私を呆れさせた。

(やめやめ。今、考えても仕方ないわ)

当人が気にしていないのだ。
私が心配することではない。

軽い足取りのラックを追つて、

私もエレベーターホールから出、さうに中央校舎の外へと出た。

西方へ真っ直ぐのびた道がある。

その道を進むと、

やがて右手に運動場が、左手に白い建物群が見えてきた。

運動場の奥には体育館らしき建物がいくつかあって、
さらにその右奥にもこぢんまりとした建物がいくつか建ち並んで
いる。

「こっちに行くと、運動場エリアだ。

各競技のための施設がそろっている」

運動場の手前で北に延びる道と西にのびる道に分かれた。

ラックは北にのびる道を指差して、この先はクラブ棟なのだと説明した。

なるほど、先程見たこぢんまりとした建物はクラブ棟だったのだ。

「戦闘魔法科の校舎はこっちだ」

はるきが指差したのは、道の左手の建物群。

その敷地は驚愕に値し、そこで人間界の小学校くらいの広さ
がある。

(迷う。絶対に迷うー。)

改めて、案内人を買つて出でてくれたラックとはるきに感謝する。

もしもこれが“案内なし”だったら、1時間目の授業に間に合わないどころか、

学園内で遭難していそだ！

分かれ道をさらに西へと進んで、

戦闘魔法科の校舎を眺めながら、進む。

「教室は4号館だから、あそここの建物だな」

「じゃあ、あっちから行つた方が近道じゃねえ？」

「そうだな」

はるきが近道と言つた道は、もちろん道なんかではなくつて、植木を跨ぎ、芝生の上を横断することになった。

白壁に大きく“4”と描かれた建物が近付いてきた頃には、私の息は上がつていた。

(朝イチの運動にしては、ハード過ぎるんじゃないの?)

ラックに腕時計を見せて貰うと、授業開始5分前だつた。急ぐのが嫌であるのならば、もう少し早く寮を出るべきだと、身に染みて分かつた。

建物の中は楓のよく知る学校の造りと変わらないよつて見えた。

白壁がずっと続く長い廊下。

その片側の壁にいくつも扉が並んでいる。

タイル張りの床。

天井は低くもなく、高くもない。

この4号館は講義棟だから、こう造りなのだと、ラックは言った。

「実技を行う教室は、もっとずっと天井が高くて、広いよ」

「へえ」

想像がつかなかつたので、適当に相づちを打つ。

階段を上がり、三階まで上がる。

教室は『303』、一番奥の部屋だ。

その手前まで駆けてきた4人は一度立ち止まり、呼吸を整えてから、教室の扉をガラリと開いた。

あ、とこゝ間の出来事で、止める暇もなかつた。

「虫だー！」

教室の扉を開いたとたん、そつ短く言い放ち、
リンドブルムはウサギ顔負けのジャンプ力で飛び上がつた。

そして、何かを両手に捕まえ、数メートル先で着地した。

「捕まえだぞ、カエデー！」

振り返った子どもはいかにも得意げで、
誉めてくれとでも言いたげな顔をしている。

しかし、である。

リンドブルムの両手の中から聞こえてくる悲痛な叫びは、
とてもじゃないが、誉められたものではない。

セロファンのように薄く黄色いものがその両手からはみ出ている。細い棒だと思ったそれは人の足で、ジタバタと必死に藻搔いている。

る。

「リング、いったい何を捕まえたの？」

顔を引きつらせてい聞けば、リングブルムは怪訝せつな顔で答えた。

「虫だ」

「虫つて？」

「てんといつ虫だ。リングを騙してここに連れてきた虫ー。」

(てんといつ虫?)

もしかして、チーコのことだらうか。

てんとう虫のぐせにしつかりと洋服を着込んだチーコは、入学生をソレンティアまで案内する役目を負っている。

リングブルムもチーコに案内されてソレンティアまでやつて來たのだが、入学は不本意だったらしく、チーコに騙されたと言い続けているのだ。

(チーコ? 本当に?)

はみ出した黄色いものは、蝶の羽のようだ。
響いてくる悲鳴は、チーコのものとは違う。
もつとじゅうと若い男の子のものだ。

「よく見てみて。

それ、たぶん、てんとう虫じゃない！」

リンンドブルムは、こてん、と首を傾げた。
そして、そつと自分の手のひらを開いて、見下ろす。

「うわっ。てんとう虫じゃない！」

驚いてリンンドブルムは捕まえていたモノを放り投げた。
慌ててラックが受け止める。

その手の中で、ぐつたりと黄色い羽の蝶が倒れ込んだ。
ラックは眉を下げる、心配な声を掛けた。

「大丈夫か、シャオラン」

「…だ、大丈夫じゃないアル。いつたい何事でアルか？
ヒドイ目にあつたヨ！」

「ごめんな。えーっと、紹介するよ。

昨日入学してきたカエデとリンンドブルムだ」

ラックは蝶を乗せた手を楓の方に差し出した。
蝶の大きさは13センチほど。
チーコのようにしつかりと洋服を着込んでいる。

しかも、よくよく見ると、

その洋服はソレンティアの男子用制服だった。

「僕は、蝶ロウ小狼シャオランアルヨ。」

楓は人間アルか？ 僕も人間界から来たヨ」

「え？」

私は驚いてシャオランの小さな体を見下ろした。
どう見ても人間界には生息していなそうなイキモノだ。

「僕の故郷、中国の奥地ネ。人間は入つてこられないアルヨ。
人間、僕らのこと知らないヨ」

私はあんぐりと口を開けた。
言葉を失う。

(中国の奥地恐るべし!)

世界はまだまだ広いと言つし、

未開の地つていうのも多くあるとは聞いているけれど、まさか蝶の羽の生えた小人が中国の奥地で生息しているとは…

小狼が言つには、その昔、獣人界から人間界にやつて来て、そのまま帰らずに永住してしまつた獣人がいて、その子孫が自分たちなのだといつ。

リングブルムも、教室の入り口まで戻つてくると、ラットの手の中を覗き込んだ。

「本當だ。チーロじやない。蝶だ。虫違ひした！」
「リングド、ちゃんとシャオランに謝りなさい。
いきなり飛び掛かるだなんて、ひどいわよ。
…羽、痛まなかつた？」

後半は小狼に向かつて問うと、

小狼はパタパタと羽を大きく動かして、ふわりと飛んだ。

「大丈夫アル」

「よかつた」

ホツと胸を撫で下ろした時、「んこん」と軽い音が響いた。振り返ると、教壇に女性が立っている。

教卓に肘を着き、頬杖を置いてこちらをじっと見ていた。

ふわふわと柔らかそうな亜麻色の髪は長く、
背中を隠すくらい。

小柄で、ほつそりとした肩は儂げだ。

少女のような笑みを浮かべて、
もう一度、こん、と指先で教卓を弾いた。

「授業、始めたいんだけど?」

座つて頂戴、と言つて、視線で席を指した。

どうやら彼女こそが“アメリア先生”のようだ。

教室には、正面に向かつて横に一列、
縦に六列、長机と長椅子が並んでいる。

一つの椅子に4人座れるので、一つの長机の前に並んで座つた。

ひらひら飛んでいた小狼も一番前の机の上に降り立つと、
そこに用意された玩具のような小さな椅子に腰掛けた。
もちろん、小さな机もあって、

その上には小さなノートと筆記用具が置かれてある。

(可愛い。ドールハウスの家具みたい!)

小狼を目で追っていた私は思わず笑みを漏らした。
小狼がひょいと顔を上げて、隣の席に座っている女の子に視線を

向けた。

「こちらの女の子は虫ではなく、ちゃんと人サイズで、普通サイズの長椅子に腰掛けている。」

赤栗色の髪は短く、肩にもつかない長さに調べられている。
そこから除く耳は人間のものだ。

私はラックの袖を軽く引っ張った。

「ねえ、あの子は？ 人間じゃない？」

「ああ、エルか。たしか……人間だったかなあ？」

「人間だ。名前は、ハルトエラ・ヨイシド宵里・バルザード。人間界のイタなんとかっていう国から来たらしいぜ。」

：イタなんだつたかな。ああ、思い出せない！

悪い、忘れた。イタメシみたいな感じだつたんだけどなあ」「炒めし！？」

はるきはラックよりは情報通らしいが、いまいち正確ではないみたいだ。

けれど、仕方ないのかも知れない。

私だって、獣人界や妖精界の国をぜんぶ覚えて言つてみると言われたら、

無理です、つて答えるだろう。

「イタなんとかつて、もしかして、イタリア？」
「イタリア……。ああ、そんな感じだったかも」

日本人ではないのは残念だけど、あとで話しかけてみよう。
そう思いながら、私は教室を見回した。

この教室は戦闘魔法科の校舎の中でも小さな教室らしく、
席数も少なければ、受講者も少なかつた。

私たちと小狼とハルトエラの他、あと数人しかいない。
初回だからなのかかもしれない。

初回のオリエンテーションは受けずに、
二回目の授業から参加する者が多いのだと、昨日ラックが言つて
いた。

教壇に目を戻すと、アメリカの碧い瞳とバツチリ目が合った。
につこりと微笑みを返され、恥ずかしくなる。

彼女は学生の視線が自分のもとに集まるのを待っていたのだ。

「それじゃあ、授業を始めましょうか。

知っている顔もちらほらあるみたいだけど、

初めて見る顔もあるから、自己紹介から始めさせて貰うわね。

わたしの名前は、アメリカ・ケリー。

出身は人間界のアメリカ合衆国。

年は“永遠の24歳”よ。

4年前にソレンティアを卒業して国に帰つたんだけど、

思うことがあって、ソレンティアで講師を募集していたのを機に
再びソレンティアに戻ってきたの。

講師としてはまだまだ2年目だし、

まだ“24歳”だから、先生って感じはしないかもしれないわね。
でも、だからこそわたしには、あなたたちの先輩として

教えることはあると思つてゐるわ

アメリカの声は、大きな声を出しているわけではないのに
よく通り、聞きやすかつた。

強調して“24歳”と言うあたりは胡散臭かつたけれど、
悪い人ではなさそうだ。

アメリカは横髪をふわりと搔き上げて、話を続けた。

「この授業『属性魔法の基礎その1』では、炎の属性の魔法を教えるわよ。

イグーを唱えられるようになるのが目標ね。

イグーを自在に扱えられるようになつた人は、

武器にイグーの効果を付けられるようになります。

雷系攻撃魔法や氷系攻撃魔法、風系攻撃魔法を学びたい人は
この授業では教えないから、別の授業を受けてね。分かった?

答えを待つために、アメリカは沈黙をつくつた。

炎系の攻撃魔法が得意だという彼女。

ところが、彼女の姿からはとてもそのようには見えない。
仕草もおつとりとしていて、運動が得意なようにも見えないし、
戦闘という単語とも縁遠そうだ。

(私と同じ匂いがするんだけどな)

もしかして、リンドブルムみたいな人がアメリカの周りにもいて、
私みたいに不本意ながらも

戦闘魔法科に所属することになってしまったのだろうか。

そんな私の思いを読み取ったのか、

アメリカはニヤリとイタズラっ子の笑みを浮かべた。

「なんでわたくしみたいな鈍くさそうなのが戦闘魔法科なのか、
って思っているんでしょう？」

残念ながら、こう見ても運動は得意なの。

学生時代は活発な子だったのよ。イタズラばかりしていたもの。
でも、確かにね。

戦闘魔法科の魔法は、わたしには向いてなかつたのかも。
ソレンティアで学生をしているときは、
毎日毎日学ぶのがとっても楽しかったわ。
でもね、国に帰つて、軍隊に入れつて言われた時に、
違う、って確信したのよ

アメリカの碧い瞳は真つ直ぐ私に向けられていた。

「戦闘魔法科の魔法は、相手を攻撃する事を目的とした魔法よ。
国では、普通に暮らしている限り必要とされない魔法なの。
国に帰つて、自宅の庭で午後のお茶をしていく時に、
どうしてわたくしは人を傷付ける魔法ではなく、
癒す魔法を学ばなかつたのだろうつて、ひどく後悔したわ。
だって、人を癒す魔法を使えたのなら、

いつも腰が痛いと言っている隣の家のおばあさんを治してあげることができたもの。

そして、政府からの入隊命令……

断ることはできなかつた、とアメリカは瞳を細めた。

「何のためにソレンティアで学び、卒業したのかつて言われて、返す言葉がなかつたの。

戦場に行つて、敵兵を魔法で攻撃しようと言われたわ

「攻撃したんですか？」

アメリカは答えなかつた。

ただ、悲しげな表情を浮かべた。

「わたしの魔法はこんなことのために使う魔法じゃない、って思つたわ。

それじゃあ、どうこう時に使う魔法なのか、って考えてみたんだけど、

悲しことにね、何も浮かばなかつたの。

分からぬのよ、未だにね。

それでもソレンティアでは攻撃魔法を学べる授業が開講されてい

るでしょう？

それつて、攻撃魔法を学ぶことは必要なことだつて見なされてい

るわけよね？

どうしてなかしちゃ？」

攻撃魔法を使う時とはいつたいどういう時なのだろうか。
人を傷付けてもいい時なんて本当にあるのだろうか。
答えなんていくら考えても分からぬ難問のように思つ。

私は拳を握つて、アメリカの次の言葉を待つた。

「ソレンティアで講師を募集しているって知つたのは、
そんな時だつたの。

わたしは魔法を得たことで辛い思いをしたけれど、
わたしと同じようにソレンティアを卒業しても、
そんな思いをチラリともしない人つて、結構いると思うのよね。
だからこそ、わたしには魔法使いの卵であるあなたたちに
教えられることがあるんじゃなかっしら、つて思ったのよ
「教えられる」と……？」

「痛みよ。

あなたたちが攻撃魔法をかける相手にも心があるってこと。
傷ついたら、痛いのよ。

相手の痛みを想像できたのなら、

そう容易には攻撃魔法を使えないはずだわ。

わたしはこれから授業で、あなたたちに炎系の攻撃魔法を教える
ね。

わたしの知る限りの知識を伝える。

でもね、ソレンティアを卒業して国に戻つたら、
攻撃魔法を使わないで欲しいの。

使えば使うだけ傷つくのはあなたたちなのよ。

相手の痛みはあなた自身の痛みになるの。

それに気付くか、気付かないかは、あなた自身の問題だけじ。

一生、気付かない人もいるわ。

けれど、気付いて。

気付かなくても、あなたの心は傷を負っているわ

だから攻撃魔法は使わないで、とアメリカは話を閉めた。
ガタン、と私の隣で音が鳴り響いた。
見やると、リンドブルムが席を立っていた。

「それでも、リンドは攻撃魔法を使つ
「リンド」

席に戻そと、リンドブルムの袖を引っ張るが、
小さな体はどこでも動かなかつた。

「お前の言つていることは偽善だ。
相手が傷を負うのは当然だし、
そのことで自分の心が痛んだとしても、
傷ついた相手にとつては関係ないことだ。
何の詫びにもならない。
相手の痛みを思つて魔法を使うのを躊躇すれば、
傷つくのは自分の方だ。
だから、リンドは相手を攻撃する」

誰もが息を呑んだ。

アメリカの言葉は綺麗で正しい。
だが、それは所詮、理想に過ぎないことを、
皆、心のどこかで分かつっていたのだ。

国に帰ればリンクブルムが言うように、
自分や仲間が傷を負つ前に、敵を攻撃することになるだろう。

『殺すかもしない』

相手に向かつて攻撃魔法を放つということは、
その相手を殺してしまつかもしないということだ。

まだ実感は湧かない。

けれど、理解はできる。

『自分の魔法は誰かを殺すかもしない』

けれど、殺したくないと書いて、
魔法を使わずにいられる者はおそらく、
戦闘魔法科を卒業した者の中でも少数だ。

使わずにほいられない。

戦う術すべを持つ者は、必ず戦わねばならぬ時がくる。その時に、相手を殺したくないからと言つて、自分が殺されてやることができるだらつか。できるわけがない。

偽善だ。

綺麗を並べた言葉は憧れるが、虚しい。

正しいが正しくはなく、雲のよつに実体がないものよつだ。

すっかり静まり返つてしまつた教室。

学生たちの顔を見渡して、アメリカは不敵に笑つた。

「偽善で結構ー！」

バンッ、と教卓を手のひらで打つた。

「偽善だつて言わなきゃ何にも変わらなーのよ。どうしようもないのー！」

綺麗事？ 結構じやないの。

綺麗事だつて誰かが口にして言わなきや、
いつまで経つてもドロドロしたままよ。

ひどい、つらい、苦しい。そんな言葉いくら言つたつて、
しょうがないじやないの。

どうすればいいのか、どうなつて欲しいのか言つてご覧なさいよ。
わたしは戦闘魔法なんて使わずに済む世界になつて欲しいと思つ
ているわ。

つまり、世界平和よ！

……分かつてる。

人が大勢いればどうしたつて争い事は起きるものだわ。
世界中どこにも戦争がなくつて、平和だなんて、
あり得ないことだつて分かつてる。

けど、願わざにはいられないじやないの。

平和がいい。平和になつて欲しい。平和を作りましょう、つて

アメリカの勢いに押されるかのように、
リンゴブルムは、かくんと膝を折つて席に着いた。

あお蒼い瞳を大きく見開いて、アメリカを見上げている。

「言わなきや何も始まらないのよ。

誰かが口にして、それを聞いた誰かも声に上げる。

そうして、みんなが平和を叫んだのなら、いつか本当に平和が訪
れるかもしれない。

ね？ ものすごい理想論でしょう？ でも、悪くないと思わない

？」

アメリカが口を開かずと、再び静寂が訪れた。
誰も何も言い返すことができなかつた。

しばらくあつて、リングブルムがぽつりと言葉を零した。
悪くない、と。

「言つのは皿田だ。

誰もアメリカの口を開かずことはできない。
アメリカの考えを否定することもできない。
だから、いい。悪くない

アメリカもにっこりと笑顔を浮かべて、頷いた。

「ありがと。」
でもね、リングブルム。
あなたがわたしの授業を受けるのであれば、
あなたはわたしの学生なのよ。呼び捨ては頂けないわ

指摘を受けて、リングブルムはパチパチと数度、瞼を瞬かせた。

アメリカが教室から去ると、学生たちはバラバラと席を立つた。私も席を立つと、どうするか…という視線をラックが向けてきた。

「この授業を続けて受けてみたい…と思つ」

「そつか。いいと思つよ。

アメリカ先生って、なかなかいい先生だと思つし。

リングドはひとつあるんだ?」

「リングドも

「え」

思わず、リングドルムの顔を振り返つてしまつた。
あれほどアメリカの言葉に反発していたといつて、
リングドルムは彼女の授業を受けるのだと言つたのだ。

「本気? アメリカ先生のこと、気に入らなかつたんじゃない?」

「リングドはアメリカが嫌いじゃない。

さつきのは意見の相違だ。それは悪いことじゃない。

アメリカはアメリカの考え方を持っている。

明確な意思を持っている者は、リングド嫌いじゃない

「へえ」

拍子抜けしたような、鳩が豆鉄砲を食つたような心地になる。リンドブルムは年齢のわりにしつかりとした考えを持つて、大人のようなことを言つ。

(あれ？ そう言えば、リンドっていくつなんだろう？)

自分の年齢は告げた気がするが、

リンドブルムに年齢を聞いた覚えがない。

外見の幼さから勝手に12歳くらいだらうと判断したが、もしかすると、案外もっと大人なのかも知れない。

だが、すぐに否定する。

(まさかね)

“ もつと大人 ” であるのならば、もつと大人な行動をしているはずだ。

間違つても、蝶をてんとう虫と見誤つて、飛び掛かるなんてことはしない。

ラックに時間割の書かれた紙を出すように言われ、紙を差し出すと、ラックは次の時間の授業を指差した。

「今の授業を履修するのなら、次の時間は空き時間にするといいよ。」

「人もよるけど、ぶつ通しで授業を受けると、かなりつらいぞ」

「今日はオリエンテーションだけだったから早めに終わつたけど、

本来なら授業は90分間行われる」

「90分？ 50分じゃなくつて？」

人間界で自分が通つていた学校は50分授業だつたと言つてみたが、

はるきはあっさりと頭を左右に振つた。

「90分だ。そして、その10分後に次の授業が始まる。次の教室が同じ校舎内であるのなら問題ないけど、遠い教室なら、移動するだけで休憩時間がおわっちまつ」「移動すら間に合わない時があるよ。授業を延長する先生もいるしなあ」

だから、トラックは続けた。

「1時間目を入れたら、2時間目は空きに。」

「3時間目を入れたら、4時間目は空きにするといいんだ」

ふーん、と鼻を鳴らして時間割表に目を落とした。

昨日は気付かなかつたが、よくよく見てみると、

1時間目は8時50分に始まり、10時20分に終わると記されていた。

そして、2時間目は10時30分から始まり、12時に終わる。

「3時間目が始まるのは12時50分からで、
昼休みは1~2時から50分間あるのね？」

「そう。けど、その時間に行つたんじゃあ混んでて落ち着いて食え
ねえ。

だから、2時間目が空いているヤツは早めに昼飯を食つちゃうつ
てわけ」

「なるほど」

「…というわけで、かなり早いけど、学食に行かないか？」

「早すぎだろー！」

すかさず、はるきのツッコミが入った。

それも当然で、まだ10時にもなっていない。

「（）からゆづく歩いて行けば、学食に着く頃には10時過ぎの
つて」

「それでも早い」

「じゃあ、カエデとリンクが

3時間目に受けた授業の教室の下見をしてから食堂に行こう

む、とはるきは言葉を呑んだ。

そして、私が手にしている時間割表に視線を向けた。

「3時間目の授業は？」

「えーっとね。『初級物理防衛』っていう授業を受けてみるつもつ

「実技授業用の教室だな。それなら1号館か2号館だろ?」

「2号館って書いてある」

ちつ、とはるきの舌が鳴る。

どうやら口説明では難しい場所にあるらしい。

「「めんな。俺とはるき、3時間目は自分の授業を受けなきゃならないんだ」

「ううん。今の授業と一緒に受けただけで十分だよ。ありがと」

口頭で教えてくれれば2号館の場所も何とか行けると言ったのだが、

そこは譲れないとラック。

あからさまに面倒臭そうな態度を取るはるきに構うことなく、これから案内すると言い張つた。

不意に、ラックの視線が教室の中を泳ぐ。

彼の視線を追うと、赤栗色の髪の女の子と目が合つた。
確か彼女の名前は、ハルトエラだ。

授業が終わつたら話してみたいと思つていたことを
ラックのおかげで思い出し、私は思い切つてハルトエラに声を掛けた。

「これから学食に行くんだけど、一緒に行かない？」

ハルトヒラは一瞬驚いたような表情を浮かべたが、
すぐにニッコリ笑って、歩み寄ってきた。
その左肩には黄色い羽の蝶。小狼シャオランがいる。

「いいよ。でも、もつお昼食べに行くの？ 早すぎない？」

くくく、とさるきが笑っている。

やはり、誰が考えてもお昼には早すぎるのだ。

ラックは私の隣に立つと、腰に両手をあてた。

「カエテとリンドは昨日ソレンティアにやつて来たばかりなんだ。
だから、これから2号館に案内して、それから学食に行く予定だ」
「そういうことね。……分かった。
私とシャオランも付き合つてあげる。一緒にお昼食べよ~。」
「いいの？ あつがどう

ハルトヒラと小狼に礼を言いながら、
私は教室の後ろの方でおしゃべりをしている少女たちの方へと視
線を移動させた。
色の白い肌に、金糸や銀糸のような髪。

その耳の先はリンドブルムのようにとんがっている。エルフだ。

「あの子たちも誘つてもいい?」

ラックに、はるきやハルトエラ、小狼に了承を得ようと彼らの顔を見渡した時だった。

ひそひそ声が耳に届いてきた。

歩み寄ろうとした足が固まり、身動きが取れなくなる。自分の顔が強ばっているのを感じた。

だが、それは一瞬の出来事。

エルフの少女たちは私の視線に気が付くと、ぱっと身を翻し、逃げるよつて教室を出て行った。

「行つちまつたな」

残念、とはるきが言い、ラックは肩を竦めた。

「カエデと友達になりたくないってわけじゃないと思つよ。

ただ、そうだな。初対面なんてそんなもんなのさ」

「……」

初対面だから恥ずかしいとか、そんな次元ではないと思つたのだ。

なんとなくだけど。

(私の気のせい?)

ラックもほるきも誰も何も言わない。
気になるのは自分だけなのだろうか。

(血意識過剰かしら?)

いや、違う。
彼女たちは、私ではなく、
リングドルムを視線で追いながら、ひそひそ話していたのだ。

「リングドルム……」

(あの子たちに何かした?)

言い掛けで言葉を詰まらせた。

リングドルムの蒼々とした瞳に見つめられて、
その蒼に吸い込まれそうになつたからだ。
頭を左右に振つて、何でもない、と口にした。

教室を出て、4号館から出ると、

2号館を田指して芝生の中を突き進んだ。

もちろん、その方が近道だと、はるきが言ったからで、後日ゆっくり“近道”ではない道も探そつと思つた私だ。

ツツジの植え込みを跨ぐと、

4号館よりも背の高い校舎が現れた。2号館だ。

辺りを見渡して、位置関係を確かめると、私は頷いた。

「大丈夫。覚えた」

「本当かよ」

はるきが疑わしげな声を上げた。

なかなか一度では覚え切れないものだ、と言つ。

「それじゃあ、私も一緒に受けあげようか?」

え、と声の主を振り返ると、ハルトエラが小首を傾げている。

「3時間目でしょ? 今日はあと4時間目しかないの

「そんなの悪い!」

「気にならないで。

『初級物理防衛』は、そのうち受けなきやと思つていた授業だか

ついで、ついで、とハルトエラは笑った。

正直な気持ち、見知った顔が一緒にいうのは心強い。
3時間目はラックとはるきだけではなく、
リンブルムも違う授業を受けると言っていた。

「リンンドは次、どの授業を受ける力?」

「『初級物理攻撃』だ」

シャオランの問いにリンブルムが端的に答えると、
ラックは私の手の中の時間割表を覗き込んで言つた。

「リンンドが受ける授業も2号館だから、ここだぞ。
楓が102の教室で、リンンドは101の教室だ」

「101は入つてすぐ。

102はその奥の教室。リンンド、一人で大丈夫かよ?」「お? はるきが珍しく他人の心配をしている」

「誰が! オレは別に心配なんかしてないつー オレはただ...」「はいはい。分かった分かった。

心配はしていなけど、気になるんだよな?」

「うつ」

言葉を詰まらせじ、さるきはそっぽを向いた。

「俺かはるきに自分の授業がなきや、

「リンンドと一緒に授業を受けるんだけどなあ」

「それなら、僕がリンンドと同じ授業を受けるアルヨ」

「え。シャオラン、いいの？」

「物理攻撃の授業には前々から興味あつたアル」

「それじゃあ、リンンドのことくれぐれもよろしくね」

私は小狼の手を指先で摘んだ。

握手のつもりだが、なにぶん、サイズが違いすぎる。

リンンドブルムは一人でも大丈夫だと胸を反らしているが、これまで行いを思い出したら、どう考へても大丈夫だとは思えない。

小狼の申し出は願つてもないことだった。

「絶対に田を離さないでくれる？　何をしでかすか分からぬ子だから」

「了解アル」

身に染みて承知している小狼は神妙な面持ちで深々と頷いた。

学食は中央校舎の北西。

道なりに行くのであれば、戦闘魔法科の校舎を出て、運動場エリアを眺めながら、クラブ棟に向かつて進む。突き当たりを右に曲がり、そこから最初の分かれ道を再び右に曲がれば着く。

ところがである。

案内役を買って出たのがはるきだつたため、一行が道なりに進むはずなかつた。

近道だと言つて、芝生を突つ切り、植え込みを跨ぎ、戦闘魔法科の校舎からほぼ直線的に学食に移動した。

確かに近い。

いや、かなり近かつた。

けれど、着いた頃には、障害物競争を走り終えた後のよつなボロボロな気分になつた。

私は肩で息をしながら、みんなの最後尾を歩いていた。

「力エデは体力がないな」

「戦闘魔法科は体力が基本だぞ」

ラックやはるきはもちろん、元気つ子なリンドブルムも平然とした顔をしている。

可愛らしい外見に反して体力があるらしいハルトエラの呼吸も乱れていない。

ひらひらと空を飛んでいる小狼は論外である。

彼にとつて芝生や植え込みは障害物とは言わないからだ。

自分ばかり呼吸を乱している事実に、

戦闘魔法科に引っ張り込んだリンドブルムを恨みたくなつた。

学食の入り口はガラス張りの扉。

重みのあるそれをラックは引っ張るように開いた。

「広い」

ぱつりと零した声に振り返つて、ラックは微笑む。

「広いだろ？ こんだけ広くても混む時は混むんだよなあ」「ほり、これ持てよ」

差し出されたクリーム色のトレーを受け取りながら、私は辺りを見渡した。

左手には天井まで届く大きな窓があり、中庭が見える。

中央校舎の北に広がる中庭は、その西側で学食と接しているのだ。

白や橙色の花を咲かせた木々が立ち並び、その木陰にはベンチが置かれている。

庭の中心は噴水だ。

その縁に腰掛けた話に花を咲かせている学生たちの姿も見えた。

学食は長方形の建物である。

そのため、入り口から入ると、奥に深い三列の長机がずっと端まで続いている。

右手を見ると、カウンターがあり、様々な料理が所狭しと並べられていた。

料理に歩み寄りながら、ラックは人差し指を立てた。

「セルフサービスだから、ここで好きな料理を選んで、自分で席に持っていくんだ。当然、席も自由。そして、食べ終わったら、自分で食器を片付ける。片付ける場所はあそこだ」

「何でも自分でやるのね」

育ちの良い人なら、できない、面倒臭い、誰かやって、とか言いそ�だけど、

あいにく私が育つた家庭はごく標準的な家庭。何でも自分でやることに慣れている。

加えて、普段から母親を手伝って食事準備をしているし、自分が使った食器を片付けるなんて当然のことだという考え方の持ち主だ。

ちつとも苦ではない。

むしろ、自分で料理をトレーに乗せるなんて、なんだかバイキングみたいで楽しい。

私は料理を一つ一つ覗き込んだ。

一皿で一人前とされている料理もあるが、サラダやフルーツなどは好きな物を好きな量だけ皿に盛つていいらしい。

ただし、盛った量だけ金額を払わなければならない。

「そう言えば、お金って、私が持っているものでいいのかな？」「持っているものって？ カエデは何を持っているんだ？」

私は鞄から財布を取り出ると、小銭をいくつか取り出した。

「ああ、ダメダメ。それじゃあ、ここでは使えねえよ

はるきは大きく頭を左右に振つてから、
あそこ、と、さつき入ってきたばかりの扉の方を指差した。
その脇に自動販売機みたいな箱が置いてある。

「ソレンティアではルークが使われている。あれで換金するとい
よ

「カエデの国の金がソレンティアではどのくらいの価値があるのか、見物だな」

「1コ一ロは130ルークなんだよ」

「1元は15ルークアル」

ハルトエラに続いて小狼にそう言われ、私の脳裏に嫌な予感が過ぎた。

「その流れでいくと、たぶん円はもつと低いよな…」

換金機に100円玉を入れてみる。

ぱっとモニター画面が動いて、100ルークの文字が表示された。

「やつぱり！」

なんだ、とハルキの声。

「1円1ルークかよ。

まあ、でも、計算しやすくていいんじゃねえの？」

「ありがたいけど、ありがたくないってやつだわ」

100ルーク硬貨を取り出すると、

続いて私は1000円札を換金機に入れ、1000ルーク札に換

金した。

(1000ルークくらいあれば、大抵の物が食べられるわよね)

そう考えた上でのことだつたのだが、それは杞憂に終わる。
学食の料理はどれも田を疑うほどに安値だつたからだ。
30ルークで、十分過ぎるほどの量をトレーに乗せることができ
た。

時間が早いこともあって、席はガランと空いている。

口当たりの良い席を選んで、私たちは机の上にトレーを置き、椅子に腰掛けた。

向かい合つて座つたハルトエラに私は、そう言えば、と尋ねる。

「エルつて……。
えーっと、私も“エル”って呼んでいい?
“いいよ。私も“カエデ”でいい?”
「うん。あのさ、エルつて、
ハルトエラ・^{よこせと}宵里・バルザードつていう名前なんだよね?」
「そうだよ」

ハルトエラはスプーンを咥えながら頷いた。

「イタリア人に知り合いがないから、

イタリア人の名前ってよく知らないんだけど。

それでも、宵里っていう名前は、イタリア人っぽくないようじるんだけど…？」

「私ね、おじいちゃんが日本人なの」

「そうなの！？」

大きく瞳を見開いて、ハルトエラの顔を凝視した。その顔の中から日本人らしさを見つけ出そうとする。

そう言われてみれば、低く小さな鼻は日本人っぽい。外国人独特の“濃い顔”の印象がないのだ。なるほど、と納得した。

どおりでイタリア人であるはずの彼女と言葉が通じるわけだ。おそらくハルトエラは、日本人だという祖父から日本語を習つたのだろう。

そう言つと、ハルトエラは一瞬、言われた意味が分からぬといつ表情を浮かべた。

「私、イタリア語を話しているけど？」
「え、うそ。だって、日本語を話しているじゃん」
「イタリア語だよ。さつきからずつと」「でも…」

私は口ごもる。

ハルトエラが口にしている言葉はどう聞いても日本語なのだ。

「私、イタリア語なんてぜんぜん分からないよ？」

それなのになんでエルの言っていることが分かるの？ あり得ない？」

「そう言えば、不思議だわ。

私だって、日本語なんてほとんど分からないのに、カエデちゃんの言っていることは分かる。

そりやあ、多少はおじいちゃんから日本語を習つたけど。挨拶程度だもん

「不思議だね」

「こじが魔法学園だから、自動的に翻訳されて聞こえるのだろうか。試しに、ハルトエラにイタリア語で

“そら” “あおい” “いいてんき” と言つて貰つた。

ゆつくり大きく口を動かして貰つと、確かに彼女は日本語ではない言語を口にしているらしいのだ。明らかに口の動きが違う。

「単語に対して、余計に口を動かし過ぎているって感じ」

「カエデはちゃんと口を動かしていないって感じだね。

文字が足りてないみたい」

私はちらりと小狼の方へ視線を向けた。

小狼は机の上に玩具のような机と椅子を置いて、そこで食事を取つてゐる。

小狼のような獣人をセントリアンというのだと、

戦闘魔法科の敷地から学食へ向かう途中で、ラックとはるきから説明を受けた。

本来ならば、セントリアンは獣人界のインセントルムといつ国に棲んでいるものだが、

小狼の出身地は人間界の中国だ。

となると、小狼が口にしている言葉はどういう国の言葉なのだろうか？

小狼の口調は、中国人がしゃべる下手な日本語のように聞こえる。けれど、ハルトエラのことを踏まえると、おそらく小狼が口にしているのは日本語ではない。

では、いったい何語なのだろうか。

「中国語アル」

小狼はあっさり答えた。

「ただし、僕らは長い歴史の間、人間との交流を絶つてきたね。人間が使う中国語と微妙に違うアルヨ」

「だから、たどたどしく聞こえるのかしり？」

「僕、たどたどしい力？」

「うん。ちょっとね」

言つてから、まずかつたかなと思い、私はすぐに小狼に、「ごめん」と謝った。

すると、そのまま後で、確かに、とほるものがポソリと言葉を零した。

「今まで気にしてことがなかつたけど、
言われてみれば、別の世界のヤツらと普通に話せるって、
実際あり得ないことだよなあ。

ソレンティアだからこそできるつことなんだろ?」
けど、どうせ翻訳してくれるのなら、

普通に聞きやすくしてくれればいいのさ。
実を言つと、オレもちょっとシヤオランの言葉はたどたどしく聞
こえる

「そうアルカ!?

「うーん。訛つ(なま)ている感じかな。

いや、違うな。アクセントが違うつていうか、発音が変といつか。
ああ、でも。やっぱそれも訛りつて言つのかなあ」

はるきは言い淀みながら眉間に皺を寄せた。
すると、その隣で、そつか、トラックが拳で手の平を打つた。

「訛りだ。きっと、言葉の訛りなんだよ。

俺もさ、時々、訛つていてる奴がいるなあと思つていたんだよ。
国で訛つた言葉を使つている者は、ソレンティアでも訛つて聞こ
えるんじゃないかな」

「どういう意味?」

「つまり、その国の標準語とされる言葉を使つている者は、
ソレンティアで話す時、話し相手には、
その話し相手の国の標準語とされている言葉で聞こえるってわけ

だよ

私は唇に人差し指を押し付けて考え込む。
それはどうこうじだらうか。

これは例えばの話だ。

ハルトエラがイタリアの中でも訛りのある地域の出身だったとして、ソレンティアでも訛りのある言葉で楓に話しかけてきたとする。すると、私の耳には、ハルトエラがまるで関西弁や東北弁でしゃべっているように聞こえるかもしねいとこうじではないだらうか。

その場合、おそらく、ハルトエラの訛りがイタリアに於ける訛りのどの程度なのか、それは日本に於ける訛りのどの程度なのかを比較され、翻訳されるのだと思つ。

とすると、小狼のしゃべる中国語は、中国人が聞いてもやはつたどたどしこうじにならぬ。カチャリ、と小さな音を響かせて、ラックがフォークを机の上に置いた。

「俺たちが推測できる限界はここまでだな。

もつと詳しく知りたいのなら、

世界の言語について調べている奴を探して聞いてみるとこうよ」

「うわ、まだ、」と叫んでラックは席を立つ。

氣付けば、いつの間にか食堂は人であふれていた。

2時間目の授業が終わり、昼食を取りに各学科の教室から集まつてきたのだ。

早めに昼食にして良かったと思いながら、私も席を立った。

空の食器を乗せたトレーを手に、食器返却口に向かおうとした。

視線を感じて足を止めた。

辺りを見渡す

けれど、視線は誰とも交わらなかつた。

騷音。

食器の悲鳴と、フォークとスプーンのダンス。
聞き取りきれない言葉の渦の中、ぽつりとその言葉だけが私の耳
に届いた。

『嘆きのリンドブルム』

荒てて振り反つた。

けれど、視線は背後から感じた。再び身を翻す。

次の視線は右手から。

いや、違う。

あちこちから視線を感じるのだ。

『あの子があの?』

『響き谷で育てられたらしいわ』

『彼らは変わり者だから』

『混じり者』

『しつ。聞こえちゃう』

ぞわりと悪寒が走った。

根が生えてしまったかのよつに足が動かない。

暗闇に落っこちた気分だ。

「カエデ、置いていくぞ」

呼ばれて、ハツと顔を上げた。

リンドブルムが笑う。

とたん、さつと靄が晴れたような心地になった。
ひそひそ声だけを拾うように澄ませていた耳が
すべての雑音を集めるようになり、かえって何も聞こえないよう
になつた。

(聞こえない方がいい)

嘆きのリンドブルム。

言葉の意味は分からぬが、その響きは何よりも不吉なもの

のよひに感じた。

私は緩やかに頭を横に振ると、
リングブルムたちを追つて早歩きで食器返却口へと向かつた。

(な、な、何時?)

掛け布団の中から腕を伸ばし、枕元に置いたはずの目覚まし時計を探してみるが、手は虚しく空を切るばかりで、見付けることができなかつた。

(時計がない!)

それもそのはず。
ここは私の家の自室でもなければ、人間界ですらない。
そうか、と思い出して、布団から体を引き離した。

(ここはソレンティアだ)

ベッドの上に腰掛けて、ガランとした部屋を見渡した。

隅の方に小さな机と椅子があり、壁際にぽつりとタンスが置いてある。

窓はない。

そのため昼間でも電気を点けなければ暗くて仕方がなかつた。

太陽の光が恋しいと言えば、今日は太陽の日だ。

人間界でいうと、日曜日にあたる曜日で、授業がない。

昨日は朝から『属性魔法の基礎その1』という授業を受け、午後は3時間目に『初級物理防衛』、5時間目に『初級支援魔法』という授業を受けた。

そして、5時間目が終わり、ネツァク寮に帰ってきたのは、18時過ぎ。

我ながら初日にしては頑張ったと思う。

そんな日の翌日はのんびり寝ていたいところだけど、そういうかない。

今日は彩とモーダス・ショップに行く約束をしているのだ。

どうしても絨毯が欲しいのだと云つと、彩は自分の入寮したての頃を思い出したのか、大きく頷いて、案内してあげる、と言つてくれた。

そんな優しい彩との約束を破るわけにはいなかつた。

私は気合いを入れると、ベッドから足を降ろした。

ピンクタイルがひんやりと冷たくって、眉を寄せる。

足の先だけで歩きながらタンスのところまで行くと、服を取り出した。

突然ソレンティアに来てしまったわけだが、

修学旅行用の荷物を持っていたおかげで、しばらくは着替えに困らなさそうだ。

(でも、そのつま黒い足さないとダメよね)

身支度を調べると、部屋から廊下に出た。

そう言えば、昨日の夕食の席で、

6時間目を履修する者は大変だという話を彩とした。

6時間目は17時50分から始まる。

夏でもない限り、日は暮れてしまっている時刻だ。

それなのに、そんな時間から授業をしなければならない者は大変だと私が言つと、

彩は、6時間目を履修する者はめったにいないのだ、と言つて笑つた。

「時々いるんだけどね。

どうしても陽射しが苦手だから日が落ちてから授業を受けるんだって人が。

けど、大抵の人は、4時間目までの授業で終わりにして、部活動や同好会活動、グループ活動を楽しんでるんだよ

なるほど、と頷くと、彩はお薦めのグループをいくつか紹介してくれた。

もう少し学園生活に慣れたら、グループに参加することも考えてみようと思つた。

サロンで待ち合わせをしていたので、階段を下り、サロンへ向か

う。

扉を開けると、彩は待ちわびた顔を上げて微笑んだ。

「おはよっ。よく眠れた？」

「眠り過ぎちゃったみたい。待たせてごめんね」

「大丈夫。さやかちゃんと話していたから」

「さやかちゃん？」

言われて彩の隣を見やると、

同じくらいの年頃の女の子がちよこんとソファに座っていた。ふわっとした黒髪は短く切り揃えられていて、大きなピンク色のリボンで結ばれている。

「ケセド寮の日野原さやかちゃん。

同じ日本人だから楓ちゃんに紹介したら喜ぶかなあと思つて、来て貰つたの」

「そうなの？ ありがとう。すごく嬉しい。

彩ちゃん以外の日本人つて、本当にいるんだね」

「いりつて言つたじやん」

彩は苦笑しながら私とさやかの間に立つと。

「秋野楓ちゃん。一昨日入学して來たばかりだよ」
「おはよっ！ やります、楓さん。日野原さやかです。今日はこれからモーダス・ショップに行かれるそうですね？ もし宜しかつたら一緒に一緒させてください。私も気になる物がある

のです「

「え、あ、うん。いいけど……」

さやかの口からスラスラ出てきた丁寧口調に度肝を抜かれて、私は救いを求める眼を彩に向けた。彩は片手を顔の前で左右に振った。

「ああ、さやかちゃんの丁寧語はどうしようもないから。もう誰にも直せないの。誰が相手でも丁寧に話すから、気にしないでいいよ。

そうそう。この前なんてね、さやかちゃんつてば、犬に向かつて丁寧語で話しかけてたよ。しかも、真顔で」

あれはさすがにビックリしたと言つて彩は笑つ。

サロンを出て、エントランスを抜けると、寮の外へと出た。ここソレンティアでは、ビルへ行くにもまずエレベーターに乗らなくてはならない。

エレベーターホールに向かつて、木立の道を進んだ。

「そう言えば、リンゴちゃんは？」

「行かないって。買い物とか好きじゃないみたい」

「えー。楽しいのに？」

「私なら、人様の買い物でも楽しいよ。見て回るだけでもいいって感じ」

「分かる。小物とか見るの楽しいよね。」

あと、いい店を発掘して歩くのも好きだよ

「さやかちゃんは？」

彩が話を振ると、さやかはこいつと微笑んで、私も好きです、
と答えた。

「…けど、すぐに人に酔つてしまふんです。

私の実家はとても田舎なので、人が少ないんです。
隣の家に行くためにも山を越えなければいけないくらいで。
なので、人が多い場所は苦手です」

そつか、と私。

相づちを打ちながらエレベーターのボタンを押した。
ランプが灯り、扉の奥でエレベーターが動く音が小さく響き始めた。

けど、と言つて、さやかは言葉を続ける。

「ソレンティアに入学して、タウン・エスペランサに初めて行つた時、

見る物すべてがキラキラしているように見えたのです。

人の多さを気にする余裕なんてありませんでした。

おしゃれな洋服、綺麗な指輪、可愛いコップに、たくさんの中。
それらを見ているだけで胸がいっぱいになつたんです。
わくわくして、楽しくつて。

たとえそれを手に入れることができなくつても、いつか買いたい、
必ず買おう、と思うだけで幸せになれるんです」

「うんうん。分かる。分かる」

彩が大きく頷いた時、軽い音が鳴つて扉が開いた。
エレベーターに乗つていた少女がチラリと私に視線を向け、
それから彩に顔を向けた。

「おはよう、アヤ」

「エマ、おはよう。どこかに行つてたの？」

「ちよつと友達のところにね。アヤたちはこれからどこかに行くの？」

「うん、モーダス・ショップに。楓ちゃんの家具を買いに行くんだよ」

ふーんと鼻を鳴らして、少女は再び私の方に視線を向けた。
青い瞳。

すっと伸びた鼻筋はハリウッド女優のようだ。

銀糸を束にしたような髪。

キラキラと陽射しを反射させて、とても綺麗だ。

(エルフだ)

先の尖った耳を見付けて、私はエマの顔を見つめ返した。
エマはくすりと笑みを漏らして、エレベーターの中からゆっくりと出でてきた。

「初めまして。私はエマ・クロサイト。

今日はあの黒い子と一緒にないのね。安心したわ。

あんまり関わらない方が貴女のですもの」

流れるようにそれだけを言つて、私の脇を通り抜けて、すたすた去つていぐ。

その後ろ姿が寮の中へと吸い込まれるまで、

私はまるで雷に打たれたかのような気分で立ち尽くしてしまった

(黒い子?)

それが誰のことであるのか分からぬはずがない。
確かに浅黒い肌をしている。

そして、黒々とした髪を持っている。

けれど、それが“黒い子”と言わなければならぬ要因にはならないだろう。

しかも、エマの口調は明らかにその黒さを蔑んだ物言いだった。

自分のことのよつて悔しへて唇を噛みしめた。

「楓ちゃん、エレベーターに乗ろうつ~」

彩に促されて私は無言で頷いた。

彩に続いて小部屋の中に入ると、最後にさやかが入って、扉が閉まつた。

静かな音を立てて上昇を始める。

「悪い子じゃないんだよ。

同じネツィアク寮の子なの。だから、嫌わないであげてね」

「嫌いになるほど、まだあの子のこと知らないから」

大丈夫、と言つて私は顔を上げた。
笑おうとしたが、無理矢理過ぎてひどく歪んだ顔になってしまつた。

「リングドはあの子に何かしたの？」

「分からぬ。」

でも、リングドちゃん、入学したその日にまっすぐ寮に来なかつた
でしょ？

おかげで寮長のオーデリーは門のところで待ちぼうつけを食いつち
やつたの」

それは先日同じように彩から聞いた話だつた。

リングブルムはチーコに連れて来られてソランティアの入り口までやつて來たが、

チーコに騙されて連れてこられたと思い、

彼を捕まえ元の世界に帰るつと一晩そこで明かしたのだ。

「オーデリーはネツァク寮のエルフたちにとってアイドル的な存在なのよ。

その彼女をリンドちゃんは粗雑に扱つちやつたわけよね？

エルフたちがリンドちゃんをよく思わないものちょっと分かる気がする」

「でも、だからって……」

私は口籠もつた。

“黒い子”の響きの暗さは、自分たちのアイドルを待ちぼしつけにしたことへの恨みだけとは、とても思えなかつた。

ふと、昨日学食で耳にした言葉を思い出した。

『嘆きのコンドブルム』

あの響きにも、さうとする嫌悪感が込められていた。

「オーデリーは必ず入寮生を案内するの？」

「ううん。それでもないわよ。本当は寮長の仕事なんだけど、副寮長のオルガに任せてしまつ」との方が多いわよ」

「じゃあ、なんでリンドの時はオルガに任せなかつたの？」

「それはリンクちゃんが響き谷の領主の姪だから敬意を払つて、響き谷の領主つて、そんなに偉い人なの？」

質問詰めにし過ぎたのか、彩はむむっと顔を顰めた。

「アルヘイムのお国事情なんて、私には分からないよ~」

アルヘイム？ と首を傾げると、
それまで黙つて一人のやり取りを聞いていたさやかがおずおずと
口を挟んできた。

「妖精界にあるエルフたちの国のことです。
妖精界にはアルヘイムとアルカウムといつづりの大きな国があり
て、

「1000年くらい昔」の両国は戦争を起こし、
両国とも大きな犠牲を生じさせたそうです。
それ以後、両国は同盟関係にあるようですが、
アルカウムの民を忌むアルヘイムの民は死きず、
またアルカウムの民を忌むアルヘイムの民も死きないと言われて
います」
「ちなみに、アルカウムっていうのは、ダークエルフの国のことだ
からね」

さやかの説明に人差し指を立てて彩が付け加えた。
私は眉を寄せた。

「ダークエルフって？ エルフとはどう違うの？」

「私にもよく分からんんだけど、ぱっと見、肌が黒いのがダーク

「エルフかなあ」

「美しい外見と高い知性を持つのがエルフで、剛健な体と高い戦闘能力を持つのがダークエルフだと、私は聞いています」

すると、リングブルムはどちらなのだろうか。

肌の色を見ると、ダークエルフなのだろうと思つ。けれど、従兄いとこであるイデアブルーとハルシオンの外見の美しさはどう考えてもエルフだ。

『混じり者』

再び不意に、学食で耳にした言葉が脳裏に過ぎつた。

「まさかハーフ?」

口にすると、彩とさやかの視線がパッと自分の方に集まつたのを感じた。

「それよー、それなら説明がつく!」

「エルフならエルフの仲間ができます。

ダークエルフならダークエルフの仲間が。

ですが、そのハーフであれば、どちらからも疎まれます」

「オードリーはそれを懸念して、

自分が率先してリンドちゃんを受け入れる姿勢を
エルフたちに示そうとしていたんじゃないかな?」

「それなのにリンドはオーデリーを待ちぼうけにした」

「翌日オーデリーが自室に籠もつてしまつたのも頷けるわね」

そして、ネック寮のエルフたちが
ますますリンドブルムを良く思わなくなつたのも当然だ。
リンドブルムの行いの悪さに呆れながら、エレベーターの天井を
仰いだ。

すると、まもなく、がこん、という小さな振動と共にエレベーター
が停止した。

14・タウン・エスペランサ

扉が開いて、わざと押し寄せてきた騒音に思わず瞼を閉ざした。
そして、次に目を開いた時、その瞳は一つの街を映していた。

(信じられない)

くれぐれも忘れてはならないことだが、
ここはアイン・ソフ・アウルと呼ばれる塔の中だ。
その中に、学校があり、寮があり、そして、街がまるで一つあ
ることになる。

彩の説明によると、授業を行う教室は低層階だが、
寮やパー、タウン・エスペランサは、塔の中層階に位置するらしい。

更に説明すると、
中層階にはベリアーとイエツィラーと呼ばれるエリアがあつて、
寮やタウン・エスペランサはイエツィラーに位置する。
対して、ベリアーと呼ばれるエリアには、講師や職員のための施
設があるらしい。

Hレベーターを出るとすぐ円形の広場になっていた。
その中心には彫刻が置かれており、
それを囲むように花壇、そしてベンチが置かれている。

広場を貫くように東西に幅の広い道が続いている。

騒音は、道のこちら側、左手から聞こえてくるよつだ。

そう思つて、そちらに目を向けると、巨大な観覧車が見えた。

「ルーテンスパークだよ。

いわゆるアミコーズメントパークで、いろんなゲーム機があるの」

「卓球やダーツ、ボウリングなどもできます」

「へえ。遊べるとこもちゃんもあるんだ」

今度遊びに行こうと言ひながら、私たちは道の向こう側に渡つた。

そこから道は三方向に分かれる。

東の道からは美味しそうなパンの匂いが漂ってきて、私は足を止めた。

「いい匂いがするね」

「レインボー・ベーカリーっていう名前のパン屋さんがあるんだよ。おでんパンやラーメンパンみたいな面白いパンが売られているの」「何それ、おでんパン？ ラーメンパン？」

中におでんの具が詰まっているパンを想像した。

百歩譲つて、ラーメンパンは有りのよつな気がする。

ラーメン味の何かといつ商品は結構あるものだからだ。

「おでん味のパンを作る意味がわからないわね。
おでんが食べたいのなら、ちゃんとおでんを食べればいいじゃない

「楓ちゃんは分かつてないね。

おでんじゃなくつて、パンが食べたいからパン屋に来るんだよ。でも、急におでんも食べたくなつて、だから、おでんパンを買つたの」

「彩さん、それも少し違うような気がします。

皆さん、物珍しさで買われていくのではないでしょうか」

レインボー・ベーカリーの隣にはカフェ・グーラーといつ飲食店がある。

大盛りランチが自慢のお店らしい。

更にその道をずっと奥に進んでいくと、
プルクラという、ヘアスタイルからネイルアート、エステやマッサージまで

いろいろなサービスが受けられるサロンスペースがあるので、彩は説明した。

「楓ちゃん、女の子としては要チェックだからね。
後で連れて行つてあげる」

「ありがとう」

そんなやり取りをしながら、一行は西の道を進んだ。
真ん中の道には何があるのかと聞くと、
いろいろあるよ、という微妙な答えが返ってきて、
私はそれ以上の追求を諦めた。

西の道の入り口すぐにアルマ・フロマがある。

「」はファッショントリ品専門店だ。

そのショーウィンドウには、綺麗に着飾ったマネキンが置かれていて、彩の皿はそれに釘付けになつた。

「ああ。いいなあ。あれ、いいなあ」

「うん、可愛いね」

「欲しいなあ。欲しいなあ。すぐ欲しいなあ。

でも、今月ピンチなの！」

「しかも今日は私の買い物だしね」

ショーウィンドウにへばり付いた彩を、
私とさやかは数分かけて、苦労しながら引きはがした。

アルマ・フロマの向かいは、スイート・スイートといふアイスクリーミングラフだ。

カラフルなアイスクリームが描かれた看板がよく目立つ。
スイート・スイートと同じ並びに、今度はさやかの歩みを止める
店が現れた。

オーランド・マーラだ。

巨大な本屋で、店頭には新刊の本がずらりと並べられている。

「すういです。新しい本が出ていますー。」

「さやかちゃん、じめーん。」

今日は本を買いに来たわけじゃないから

先程の仕返しとばかりに彩はさやかの腕を引っ張つて、
すんすん歩き、オーウォー＆マーラからさやかを引き離した。
ああ、と切なげな声がさやかの口から漏らされ、
私は笑い声を響かせながら二人の後を追つた。

そのあとも、それぞれがそれぞれの店の前で足止めを喰らい、
他の者に引っ張られるということを繰り返しながら道を進み、
ようやく目的のモーダス・ショップにたどり着いた。

モーダス・ショップは家具専門店である。

タンスや机、大きな家具に歓迎されて三人は店の中に入った。

「大きいものは手前で、小物は店の奥の方にあるからね」
「でも、絨毯なんて重い物を買つたら、今日はそれしか買えないよ
ね」

「なんで？」

「持ち帰るのが大変じゃない」

そう言ひつと、彩はケラケラと笑つた。

「やだあ。楓ちゃんつてば、自分の手で持つて帰る気まんまだつ
たの〜？」

そんな力持ちじゃないでしょ。無理無理

「ここで購入した家具は魔法で転送されて、寮の部屋まで届けられ
るんです。

なので、楓さんが部屋に戻る頃には、

購入した絨毯が床に敷かれていると思しますよ
「そうなの！？」

信じがたいが、思い返せばここの魔法学園だ。

あり得ないことはこの数日間において他にもいろいろあつたではないか。

購入した家具が魔法で転送されるくらい大したことではない……。

（いや、嘘です！ かなり大したことです！）

さやかの丁寧口調が微妙に伝染したらしく、
丁寧語で一瞬前の自分の考えを否定した。

「なんかすごくない？」

「さすがソレンティアって感じでしょ」

ふふん、と鼻で笑つて彩は絨毯が並べられているスペースに歩み寄つた。

丸められた絨毯がいくつも壁に立て掛けられている。
その手前に小さな机があつて、カタログが置かれていた。
彩はカタログを手にすると、私たちに見せるように広げた。

「絨毯もいいけど、フローリングにしてみるのもいいんじゃない？
日本人らしく畳つたたみていう手もあるよ。」

変わり物を選ぶのなら、芝生絨毯かな

「芝生絨毯？ どういづ？」

「そのまんま。芝生なの」

「は？」

「えーっと、つまり。

絨毯のように部屋一面に芝生を生えさせることができるんです。
聞いた話だと、春の芝生は柔らかく暖かだけど、
夏の芝生は固くてチクチクしているんだそうです」

「秋の芝生や冬の芝生もあるんだよ。ほら、いい。そんな感じ」

そう言つて、彩はカタログの写真を見せてくれた。

なるほど、確かに部屋の中に芝生が生えている。

他にはどんな絨毯があるのか気になり始めて、
彩からカタログを受け取り、ページを捲った。

(石畳の床？)

これは却下。今のピンクタイル以上に足が冷たそうだ

それでも、と思う。

写真の下に記載された値段があり得ないくらいに安値なのだ。

例えば一番ノーマルな感じの単色絨毯。

これは40ルーラーである。つまり、40円。

40円で絨毯が買えるなんてこと、人間界では絶対にあり得ない
ことだ。

ちなみに、と彩が人差し指を立てた。

「すでにお察しの通り、ソレンティアで購入した物はすべて人間界にお持ち帰りすることはできません」「あ。やつぱり？」

それができたら、ぼろ儲けだ。

ソレンティアで仕入れて、人間界で売りさばけばいいのだから。
けれど、悪いことつていうのは、
そう容易には、できないようにできてるらしい。

私は更にペラペラとカタログのページを捲り、
ふと、あるページで手を止めた。

「これがいいかな」
「どれどれ？」
「魔法陣の絨毯ですか？」

頷くと、彩がパアッと顔を上げた。

「私もその絨毯を選んだんだよ」
「そうなの！？」
「うん。一番、魔法学園っぽいから。
ソレンティアに来たー、って感じがする絨毯だよね。
色は、何色にする？」

彩は壁に立て掛けられたいくつかの絨毯の中から、魔法陣の絨毯を探し出して、私を手招いた。実際に目の前にすると、丸められ棒状になつた絨毯は私の背丈よりもずっと高かく大きかつた。

そつと手のひらで撫でてみると、

柔らかし

上品な手触りだ。

「黒せみやうじ」

「ハハ、お屋が暖くなつたやうもんね」「

「うん。魔法陣の柄が

「うん。魔法陣の柄が目立ち過ぎるよね。じゃあ、青か白だね！」

青と白の絨毯を見比べて、私は白い方を指差した。

「五」

す」——私は無むしをうながした。

「」

「うん、私も白い方を選んだんだよ。気が合つちゃつたね」

手を叩いて喜んでくれた彩に笑顔を浮かべ、店員を呼んだ。

にした。

まず必要な物は電気だ。

あと、可愛い「マグカップ」が欲しい。あとは…。品物を見ながら考へることにした。

ああでもない、こりうでもない、と3人で騒ぎながら、いくつか購入してモーダス・ショップ出ると、太陽は西に傾きかけていた。

「お皿、食べ損なつちやつたね」

時刻は15時を過ぎたあたり。

そう言えど、と言つて私はお腹をさすつた。

「寝坊したと思って、朝ご飯も食べていない

「え。そうだつたの？」

「うん。田舎まし時計がなかつたから、起きられなくつて。大慌てで支度して、そのままサロンに行つちやつた

「そつだつたんだ。じゃあ、お腹空いたよね？」

眉を顰めた彩に、さやかが飲食店を指差した。

「何か食べませんか？」

「うーん。そつしたいのはやまやまなんだけど、ここの時間に食べちやうと、ちょっと困ることになるんだよねえ」

そう言つて、彩は渋り顔だ。
私は小首を傾げた。

「どうかしたの？」

「実はね。みんなから口止めされていたんだけど、
今日の夕食で、楓ちゃんの歓迎会を開く予定なの」

「ええっ。那样的なの？」

「うん。今日、解放日だから。

解放日だとね、食堂の男子寮と女子寮の間の壁を取り払つて、
みんなで食事を取るの。

そして、その日までに新入生がいれば、
その新入生の歓迎会をすることになつてゐるのよ

驚かせようと思つて内緒にしてくれていたらしいのだが、
言つちやつた、と彩はぺろつと舌を出した。

「だから、歓迎会の料理をたっぷり食べられるよつて、
今ここの物を食べるわけにはいかないの！」

「めんね、ヒヒやかに両手を合わせた。
さやかは緩く頭を振る。

「それなら仕方ないです」
「といふで、さやかちゃん」

さやかがしょんぼりと謝ったので、話題を変えようと、私はつとめて明るい声を上げた。

「さやかちゃんが欲しつて言っていたものは？」

さやかは道の先にあるペットショップを指差した。

「犬用のブラシが欲しいです」

「犬用？ 犬飼っているの？」

「はい。アンズという名前のイタリアン・グレーハウンドです」

そう犬種を言われても、どういう犬なのか分からないと、さやかはカードケースに入れた写真を見せてくれた。

「可愛い！」

ほつそりとした犬だ。

すっと脚が伸び、やはり細い尻尾が生えている。

つん、と鼻が長く、くりくりした大きな瞳が印象的だ。

可愛いを連呼すると、さやかは頬を赤らめて大きく頷いた。

「つい最近飼い始めたんですけど、とても可愛いんです！」
「じゃあ、可愛くって使いやすいブラシを見付けないとね」
「はい」

ウキウキしたさやかを先頭に3人はペットショップの中に入った。
結局そのあと、彩も自分の買い物をして、
帰りのエレベーターに乗った頃には、すっかり空は赤く染まっていた。

このまま自分の寮に帰ると言つたさやかは、
ケセド寮でエレベーターが停まるとい
ふこりと頭を下げてエレベーターを降りていった。

再び扉が開き、ネツァク寮に着くと、
辺りは藍色に包まれている。

「遅くなっちゃつた？」
「大丈夫。まだ18時だから。
きっと今この食堂は、歓迎会の準備で、てんてこ舞いしているよ
「なんだか悪いね」
「ぜんぜんだよ。だつて、みんな、
何かにこじつけて自分が楽しみたいだけだから」

彩はケラケラ笑つて、片手を左右に振つた。
つられて、私も笑う。

「それならいいけど。私も嬉しいし」

「うん。私も楽しいよ」

もう一度笑い合い、ただいま、と言しながら寮の中へ入った。

リンダちゃんも連れてきてね、と彩に言われたので、私はリングブルムの部屋の扉を叩いた。

だが、扉の向こうは静まり返っていて、返事がない。もう一度ノックしてみる。やはり静がだ。

「コンピュートへ」

悪いかな、とは思つたけれど、そつと扉を開いて部屋の中を覗いてみた。

誰もいない。

ぽつりと、^{かい}空のベッドだけが所在なく置かれていた。

「 もう。エリ行ひちやつたのよー。」

不平をぶつけるよつに音を立てて扉を閉めると、自分の部屋に戻つた。

机に視線を向け、その上に置かれた鞄を手にした。鞄の中から取り出した物は、ノートだ。

ビリッと、一枚破いて、その上にペンを走らせる。

『リンドー、これを読んだら食堂に来る』と。楓

せりりと書くと、ピンを一つ握り締め、再びリンドブルムの部屋の前に戻った。

リンドブルムが部屋に戻つてきたら真っ先に門に入れるよう、ピンでメモを留め、扉に貼り付けた。

「うん。これで良し」

満足げに頷くと、人気のない廊下を進んだ。

北階段を降りると、そこからは一転して人のざわめきで溢れている。

アンティーク調の扉を押し開くと、食堂に集まっていた者たちが一同に振り返った。

パン、ヒクラッカーが鳴らされる。

「よつこや。我らが翠玉の寮、ネツァク寮へー。」「はいはい。主役はこっちやで」

赤毛の少年に腕を引かれ、配膳カウンターの前に連れて行かれた。ちやぶ台に布を被せたような、ちょっとしたステージが作られており、

その脇に立つように言われる。

ふと、視線に気付き顔を上げると、

私同様にステージを挟んで向こう側に立っている少年と田が合つ

た。

子どもっぽい大きな瞳だ。

赤い。

いや、瞳の中心に向かつて濃く、
縁ふちに向かつて薄紫にグラデーションとなつていて、
陽の光に透かせたガラス玉のようだ。

(この瞳、どこかで見たことがあるような…)

栗色の前髪はセンター分け。

そこから覗く額に花のような痣があつた。

(この子、フォウス・ヴェーダなんだ)

入学初日イデアブルーとハルシオンが説明してくれたことを思い出した。

学生課の受付をしていたリズは、ナノス・ヴェーダという機精人
だが、
そのナノス・ヴェーダを作り、支配する機精人がフォウス・ヴェーダなのだ。

『彼らの顔には刺青のよつな痣がありますから、一目で分かると思いますよ』

そのハルシオンの言葉通り一目で分かることできた。私が額の痣を凝視していると、栗色の髪の少年はペニッフと浅く頭を下げる。

慌てて私も挨拶を返す。

キーン、と赤毛の少年が手にしたマイクが悲鳴を上げる。さあて、と彼はマイクを口に当て、奇妙な関西弁で話し出した。

「新入生がまだ一人来てへんけど、

もう時間過ぎてしもうたんで、始めさせてもいいで！

今晚の司会進行役は、ネツァク寮のペテン師、紅巴ラバやー。」

イエーイ、とマイクを持った手を天井に向かって高く上げると、再びマイクが耳障りな音を立てた。

野次が飛ぶ。

「うるせえぞ、コウ！」

「自分でペテン師とか言つなー！ ペテン師！」

「ネギ食わせるぞー！」

主に男の子たちからの野次だ。

みんな好き勝手に言葉を投げ、笑い、クラッカーを鳴らしている。

紅巳は、にしそつ、と悪戯つ子の笑みを漏らすと、背中から生えた黒い羽を大きく動かした。

蝙蝠のよつな羽。

彼はノックスペンナリアンという種族の獣人なのだといつ。

「みんな、お腹がペニペニでイラ立つとんなあ。

まずは新入生からの挨拶や。これ聞かな、食わせへん。

ほな、レディーファーストつーわけで」

ほい、と紅巳からマイクを手渡された。

名前と出身世界と学科くらいの軽い自己紹介でいいから何かしゃべって、と指示される。

私は食堂を見渡した。

男子寮と女子寮の間の壁を取り払っただけあって、いつもの倍の広さになっている。

集まつた顔もたくさんだ。

ほとんど知らない顔。

けれど、一番前に彩の顔を見付け、

更に男の子たちの群れの中からラックとはるきの顔も見付け、ホツと胸を撫で下ろした。

「えーっと、秋野楓です。人間界の日本からきました。

学科は、戦闘魔法科です。

ソレンティアに来るまで、ソレンティアの存在さえ知らずに生き

てきました。

入学して3日の間にいろいろなあり得ないことがあって、驚き通じ
です。

分からぬことだらけなので、いろいろと教えてください。
よろしくお願ひします」

最後にペコリと頭を下げて、私はマイクを紅巳に返した。
拍手が湧く。

紅巳は受け取ったマイクをそのままフォウス・ヴェーダの少年に
手渡した。

「ほな、次。ソード頼むわ〜」

頷いてマイクを受け取ると、少年は口を開いた。

「俺の名前は、ソード・ライ・フィールド。

出身世界は機精界。レグナヴェーダから来た。
年は14歳。学科は戦闘魔法科。

ケセド寮に双子の弟がいる。

拳動不審な俺を見かけたら、たぶんそれは俺じゃない。
弟のカリスだから、よろしく〜」

可愛らしい外見にそぐわない元気な挨拶だった。
私は目を瞬かせてソードを見やる。

(あの子も戦闘魔法科なんだ。

同じ時期に入学してきたつてことは、同期つてことになるのかな?
きっと同じ授業を受けることになるんだろうな)

それにしても、と思う。
機精人にも双子というものがあるらしい。

“機精人”という字面から
何となく機械に魂が宿つたモノというイメージを持つていた。

実際、門兵をしていたナノス・ヴェーダはまさしくロボットのよう
だったし、
リズもどことん融通が利かなかつた。

もつともナノス・ヴェーダはフォウス・ヴェーダが“造る”らしい
ので、
私のイメージ通りなのだろう。

それでは、フォウス・ヴェーダはどういうものなのだろうか。

肉体は有機物でできていると聞いた。

だけど、心臓はなく、代わりに魔力を動力源とした“核”が
体の中心に埋め込まれているらしい。

(埋め込まれている?)

ということは、埋め込んだ者がいるということなのだろう。それにはまず埋め込むための肉体を造る必要がある。

やはりフォウス・ヴェーダも造られた生命体なのだ。

すると、人間や妖精、獣人たちのように、父親がいて、母親もいて、

母親の胎内から生まれるという誕生の仕方ではないことは確かだ。

(じゃあ、フォウス・ヴェーダの双子って何?)

同時に核を埋め込まれたということなのだろうか。

(よく分からぬなあ)

そもそもフォウス・ヴェーダの家族認識つてどうなつていいのだろうか。

フォウス・ヴェーダ自身もフォウス・ヴェーダによつて造られるのだとしたら、

フォウス・ヴェーダとして造つた子どもは自分の子で、ナノス・ヴェーダとして造つた子どもは使用人として扱つているということになる。

同じ“造つた”なのに、この差はいったい何なのだろうか。

ソードに尋ねてみたいと思つたが、

紅巳の大声が響き、気が削がれてしまった。

「みんな、グラス持つたか？　いくで。
新入生一人の前途を祝つて、かんぱ～い！」

紅巳が高々とジュースの入ったグラスを掲げると、
あちこちでガラスの高い音が響いた。

乾杯、乾杯、と言い合いながら、皆グラスをぶつけ合つ。
乾杯が終わり、グラスをテーブルに置くと、
待つてましたと男の子たちが食事に飛び付いた。
食器がガチャガチャと騒ぎ出す。

そのあまりの賑やかさに呆気に取られると、
紅巳が苦笑して、新入生2人の背中を叩いた。

「さあさあ、料理が無くならんつちこ、俺らも食いついて行くで」

言つて、紅巳は台から飛び降り、

一番近場のテーブルに歩み寄ると、私とソードを手招いた。
彩が皿を手に駆け寄つてくる。

「はい、どうぞ。適当に盛つてみたよ。嫌いなのがあつたら、ごめ
んね」

「ありがとう」

皿とフォークを受け取ると、私はソードを振り向いた。彼は彼で男の子たちに囲まれ、料理を受け取っていた。彩を呼ぶ声が聞こえて視線を向けると、背中に白い翼を生やした少女が近付いてきた。

「彩、紹介してくれ」

「うん、分かった」

彩は頷いて、少女と私の間に立つ。

「楓ちゃん、おほかわきちゃん朧木響羅ちゃんだよ。

なんと響羅ちゃんはね、人間界の日本出身なの。

大天狗一族なんだよ。天狗だよ、天狗！」

「は？ 天狗？」

予想外な彩の言葉に、私の脳裏にハテナマークが浮かんだ。
天狗。

それは大昔の日本人が、船の難破などで日本に流れ着いてしまった西洋人をして、

鬼だ、妖怪だと驚き、また恐れた結果についた呼称だ。

つまり、伝説的に語り継がれている天狗など、本当は存在しない

…はずなのだが。

響羅は涼しげな顔をして羽団扇はうちわを広げ、すつと横に引かれた瞳で私を見据えている。

「たぶん、キヨウラの祖先もシャオランの祖先のように、大昔に獣人界から人間界に移住してきたんじゃないかな？」
「どう見てもキヨウラは獣人だけど、本来、人間界には獣人はいないはずだからな」

振り返ると、いつの間にラックとはるきが近くに来ていた。

「じゃあ、もしかしたら、西洋人を見て天狗だと言い出したのではなくって、

本当に本物の天狗、響羅の先祖の誰かを見て言い出したことなかもしれないのね」

「ホント驚くよね。

私も響羅ちゃんと初めて会つたとき驚いたもん。本物だ、本物だ、

つて！

でさ、天狗が本当にいるのなら、人魚とか、ケンタウルスとかもいそうだと思わない？

まだ会つたことがないけど、獣人の中にはきっと魚の種族とか馬の種族とかいそうだもん。

その人たちが密かに人間界に移り住んできていたら、人魚とケンタウルスだよね」

夢見るよつに瞳をキラキラさせながら彩が言つと、
はるきが軽く鼻を鳴らした。

「確かに世界間を移動するなんて不可能だ。

おそらく調べれば、キヨウラの祖先もシャオランの祖先も、
世界を渡った時の明確な記録がAIN・SOF・AULに残つてい
るはずだ。

いつ、どこからどこへ、何の理由で、って。

異種族が混じり合えば、各世界の混乱が生じてしまつ。

それを防ぐために厳正な審査があり、

それに値するだけの能力を有する者だけが世界を渡るよつ、

AIN・SOF・AULによつて管理されてい

「でも、AIN・SOF・AULに内緒で、別ルートから渡つちゃう
人もいるかもよ？」

「それは絶対無理。

なぜなら、4つの世界はAIN・SOF・AULを中心に繋がつて
いるからだ。

異世界へ行くためには、必ずAIN・SOF・AULを通らなければならぬ。

獸人界から人間界に直接行くことなんてできないんだ」

はるきの説明を聞いて、そつか、と彩は力なく肩を落とした。

「楓ちゃん、夢破れちゃつたよ」

「ドンマイ、彩ちゃん」

くすくす笑いが響いた。

視線を上げると、ラックが微笑みながら、破れたわけではないよ、と言った。

「はるきの言う通り、アイン・ソフ・アウルに内緒で世界を渡るのは無理だけど、

彩ちゃんの言うように、もしかしたら人間界には、人魚やケンタウルスがいるかもしれないよ」

「え？ どういうこと？」

「アイン・ソフ・アウルに許可して貰つて、堂々と世界を渡ればいいんだから。

ただし、異種族が混じることを防ぐために、シャオランやキョウラの一族のように、

人間とは一線引いて生きなければならないだろうけど。

だから、アヤやカエデはソレンティアに来て初めて天狗が本当にいることを知つたように、

人間には知られずに密かに人間界で生きている獣人は他にもいるんじゃないかな」

ラックの言葉に彩の顔がパツと輝いた。

「そうだよね！ いるよね！ きっといるよね！」

「良かつたね、彩ちゃん。夢が壊されなくって」

「ていうか、別に人間界で獣人を見る必要なくねえ？」

ソレンティアにいれば、いくらでも見えるじゃん」

「もう！ はるきってば、夢ない！」

さつきまで輝いていた顔が一瞬にしてふくれつ面になり、それを目撃した私とラックは顔を見合させて笑った。

私は羽団扇をパタパタと扇いでいる響羅に向き直つて、首を傾げた。

「響羅は、何科なの？」

「総合魔法科だ」

「私と一緒になんだよ」

「そうだ。彩と一緒にだ」

「へえ、いいね。

総合魔法科って、総合って言つてへりだから、何でも学べるの？

一度は、いいなあ、と考えた学科なので興味がある。

リンクドブルムに勝手に決められてえいなれば、私だって総合魔法科だったかもしれない。

だが、彩は首を横に振つた。

「何でもつていうわけじゃないよ。

魔法史研究科の授業に混じつて召喚魔法を学んだり、

治癒幻惑魔法科の授業に混じつて精神回復や精神幻惑を学んだりできるけど、

魔法史研究科の子のようにガツツリ魔法史を学ぶことはできないし、

治癒幻惑魔法科の子たちのように傷を治したりはできないの。

中途半端つて感じだよ

でも、と言つて彩はくしゃりと笑顔になつた。

「いろんな学科を渡り歩けるわけじゃん？」

友達がいっぱいできるところが総合魔法科のいいところ。
ちなみに、戦闘魔法科の授業に混じることもあるんだよ」

「へえ。どの授業？」

「物理防御と変身の授業だ」

扇いでいた団扇をパタリと止めて響羅が口を開いた。

「属性魔法の授業は参加できないから、攻撃魔法は使えないがな」

「響羅も？なんか天狗って、生まれつき魔法が使えて、
人間に悪戯してそうなイメージなんだけど？」

「たとえば、風をおこしたり？」

「そうそう。団扇ひと扇ぎで、突風が…って感じ。
それって攻撃魔法の一種だよね？」

幼い頃に読んだ絵本を思い出しながら口々に言つ私と彩に、
響羅は眉を寄せながら羽団扇は差し出した。

「生まれつき魔法を使える天狗はいないが、この羽団扇は我が家の
たから
たから
宝で、

風属性の物質系攻撃魔法が掛けられている。

ひと扇ぎでヴィンテの魔法が発動し空風が起き、
ふた扇ぎで、ヴィンティードの魔法が発動し嵐を起こす

「すうー！ それ本当ーー？」

「…と言われているが、魔力のない者にとつてはただの団扇だ。
かく言つ俺もまだまだ未熟で、使いこなせない」

「残念。見てみたかったのに」

絵本に書かれていたような“天狗の団扇”が実在することは分かつたが、

絵本通りにそれは誰でも扱えるという品物ではないらしい。
彩ちゃん、と声が響いて、彩と楓は声の方に振り向いた。

「あーちゃんー！」

彩より二つ三つ年上の少女がジュースの瓶を片手に歩み寄つて来ると、
私のグラスにジュースを注いだ。

「ありがとうございます」

お礼を言つと、少女は彩に振り向いて、自分のことを紹介してくれと頼んだ。

彩は頷いて、私と少女の間に立つ。

「眞田彪ちゃん。」

私と一緒に、『あやちゃん』って言ひの。

ややこしくからネットアク寮の人は、私のことを『アヤちゃん』って呼んで、

いつの『あやちゃん』のことは、『あーちゃん』って呼ぶんだよ。ちなみに、私たちより一つ年上の18歳

そこで彩はわずかに声のトーンを下げて、口元に手をやえた。
まるで内緒話をするかのよつ。

「あーちゃんはね、いつ見えても長いんだよ

「は？ 長い？ どこが？」

「どこが……じゃなくって、ソレンティア歴が。なんだかんだ言って、ネットアク寮の人の中では、あーちゃんは古株の方なの」

「そんなに長くいるの？」

「ソレンティアには12歳からの入学が許されているからね」

ひそひそ話が聞こえたのか、彪は柔らかく微笑みながら答えた。

「もうかれこれ7年目なの。

その間にいろんな人を歓迎したし、たくさんの人を見送ったわよ。
ソレンティアでは魔法の知識を得るだけじゃなくって、
精神面でもすく成長できるから、がんばってね」

たつた一つしか変わらないのに、彪は達観した物言いをする。

何やら人生を悟つてしまつたかのような様子だ。

ひらひら片手を振りながら別の人とのところに去つていつた彪の後ろ姿を、

私は彩と一緒に見送つた。

彪の姿が人混みに紛れてしまってから、彩が、言い忘れたんだけど、と苦笑した。

「あーちゃんも日本出身だよ」

「名前を聞いてそんな気がしてた。姿も明らかに人間だつたし」「わあ。楓ちゃんつてば、だんだんソレンティア慣れしてきたね」「これって、慣れてきたつて言つの?」

ジト目で見つめてやれば、彩はへらへら笑つて誤魔化した。

キーン、ヒマイクが悲鳴を上げる。

突然過ぎるその叫びに誰もが顔を顰めて、配膳カウンターの方へと怒りの視線を向けた。

赤毛のノックスペンナリアンがマイクを手に、にしきつ、と笑っている。

「ふざけんな、口ウ！」
「耳いてえじやねーか！」「ネギ食わせんぞ！」

すかさず野次が飛ぶ。

(…でも。なんで、ネギ?)

その答えは、紅巳がネギ嫌いだからなのだが、そんなこと今の私に知る由はない。

「はいはい。やかましーぞ、男ども。

ここいらで寮長挨拶や。寮長、前に出て来てや」

紅巳に言われて姿を現せたのは、褐色肌の少年だった。
彼は男の子たちからの拍手を浴びながら颯爽と歩み出て、紅巳の隣に立つ。

逆立つた焦げ茶色の髪。

鋭い眼光。

ガツチリとした体格。

とんがつた耳はエルフと同じだが、ダークエルフと呼ばれる種族であることは、

彼が纏う空氣から判断がつく。

エルフの持つ静かで美しくも儚い雰囲氣はなく、燃えるよつた気迫を感じる。

寮長の登場に盛り上がる男子たちに対して、女子たちは奇妙な静まりを見せていた。
互いに顔を見合させ、自分たちの寮長の姿を探す。

「あれ？ オーデリーは？
…誰か、オーデリー知らへん？ 見あたらんけど？」

その時、すっと一人の少女が前に歩み出てきた。
犬のような耳を生やした物静かそうな少女だ。

「寮長は気分が優れないとのことで、部屋でお休みです」「え？ おらへんの？
てか、ずっとおらへんかった？ 最初から？」

ブーリングが起きる。
からかい口調なので本気ではないようだが、男子たちは口々に騒
き出した。

「おいおい、コウ。
新入生は一人足らねえし、女子寮の寮長もいなーいっーのは、どう
いうことだよ」「
「しつかりしるよ、ペテン師！」

あちや、と紅巳は額を抑えた。
だが、それも一瞬。
すぐにマイクを持ち直して、口元に押し当てる。
キン、とマイクが悲鳴を上げた。

「いないもんは仕方がないちゅーねん。
ほな、寮長挨拶やで。ヴィンス、頼むわ」

投げたな、と誰もが分かる寮長への振り方だつた。
紅巳はさっさとマイクを自分の脇に立つダークエルフに手渡した。
けれど、その無茶振りはあながち間違いではなかつたようで、
ダークエルフはマイクを握り締めると、
俺に任せておけ、とでも言いたげに野太い声で話しあしめた。

「俺がネツアク男子寮の寮長、ヴィンス・レイモンだ！
いいかよーく聞け。

翠玉の寮、ネツアク寮に所属した諸君に課せられた使命は、^{じょくくん}“勝利”だ！

何でもいい。とにかく勝て！
しかし、時には負けることもあるだろつ。
けれど、次は必ず勝利しろ。
自分の未熟さを思い知ることも勝利への道だ。
悔しさをバネにして勝利のための努力をしろ。
それが諸君の使命であり、義務だ！」

壊れるのではないかと心配になるくらい、ヴィンスはマイクをきつく握り締めている。

そもそも、彼にマイクは必要なのだろうか。
怒鳴つているかのように声が大きい。

「諸君、熱い志を持つていいるかーつ。
何事にも挑むこと、それが……」

その時だった。

バンツ、と食堂の扉がヴィンスの声を止めるほど大きな音を立て開いた。

現れたのは、リンドブルムだ。
寝起きらしくボサボサの髪をしている。

「腹へつたー。カエデ、リンドの飯は？」

「リンドーー？」

今までどこにいたのか、何をしていたのか、聞きたいことは山ほどあつたが、

そんなことよりもこの場が凍りついてしまったかのように静まり返っていることが、私には薄寒かつた。

リンドブルムは周囲を気にする様子もなく、
私の姿を見付けると、真っ直ぐ歩み寄ってきて、私が持つ皿の中を覗き込んだ。

「美味しそうだな。リンドも食べよつ、つと

てきてけど、テーブルの上の料理に歩み寄り、
指先で薄切り肉を摘み上げると、リンドブルムはペロリとそれを

食べてしまつた。

場はまだ凍りついたまま。

ヴィンスもマイクを握り締めたまま睡然とし、固まつてゐる。

(コンド、それじゃあくそ『空氣読めない』だよつー。)

憤りもで、コンドルムの腕を掴んだ。

「コンド、謝つて

「ん?」

「遅刻したこと、謝つて」

「遅刻? コンドは何に遅れたんだ?」

「歓迎会よ。コンドや私、ソードのために開いてくれたのに

「ソード?」

「氣に留めるといふのはしないのだが、
コンドルムはソードの名前に反応して、じてん、と首を傾げた。
とにかく、と私は眉をつり上げた。

「今までどうで向をしていたのよ」
「あっちの木の上で寝してた。わしが起きたら、真っ暗になつて
て驚いた」
「ずっと寝ていたの?」

あつち、と言つと、寮の入り口の方だ。

私と彩が買い物を済ませて寮に帰つたその時その道で、実は、あれほど探しても見つからなかつたリンドブルムが2人の頭上で寝入つていたことになる。

私はぐつたりと肩を落とした。

「もひ。何しているのよ……」

まあまあ、とラックが私の肩を優しく叩いた。

そして、リンドブルムを覗き込むと、困った子どもを見るような目付きで、優しく諭した。

「いいか、リンド。今、リンドたち新入生の歓迎会の最中なんだ。リンドが主役なんだぞ。それなのに、リンドは遅刻してしまつた。その上、寮長の挨拶中に大きな音立てて入ってきて謝りもせず、まるっきり無視して食事を始めようとした。悪いとは思わないか？」

？」

リンドブルムは眉間に皺を寄せた。

そして、ラックの鼻先に人差し指を立てた。

「まず第一に、リンドは歓迎会をやつてくれとは頼んでいない。第一に、歓迎会が行われること、また行われていることをリンドは知らなかつた。

誰もそんなこと言つていなかつたからだ。

第三に、リンドはお腹が空いたのと、楓からのメモを読んだから食堂にやって来た。

ただそれだけなのに謝れと言われるのは、腑に落ちない

「うーん、トラックは低く唸つた。

そして、ロシン、と軽くリンドブルムの額を叩く。

「一つ目の、頼んでいないのに歓迎会を開いたというのは、リンクでひとつて喜ぶべきといひであつて、そんな風に迷惑がつて言つこじじゃない。

これはリンクが悪い」

「一つ目の、知らなかつた、言われていない、つていつのせ、オレたちの連絡ミスだからリンクは悪くない」

継いでるきが言い、ラックが叩いた場所を些か乱暴に、だが彼にしては優しく撫でた。

「三つ目のは、リンクちゃんがＫＹなだけ。

コンビニやんひとつて納得がいかないかもしれないけど、謝つて損はない感じだよ」

“ＫＹ”なんて言葉、私と彩くらいいしか通じないはずなのだが、ソレンティアの自動翻訳は素晴らしく、ラックとはるきは怪訝に思つことなく、彩の言葉に大きく頷いた。

「カエ」たちがそこまで言つたな、リンド謝る。

「うんうん。偉いぞ、リンド」

「頑張つて」

彩に背を押されて、リンドブルムは前へと歩み出た。紅白とヴィンスの隣に立つと、くるりと向きを変え、食堂に集まつた顔を見渡し、ぺこりと頭を下げた。

と、その時だ。

「許さないわ。いくら謝つても無駄よー。」

大氣を切り裂くように響いた少女の声。皆一斉に声の主を振り返つた。

エマ・クロサイトだった。

私は昼間エレベーターホールで擦れ違つたことを思い出しながら、青い瞳と銀髪を持つエルフの少女がリンドブルムの方に歩み進む様子を見守つた。

蛍光灯から放たれた光が欠片となつて、エマの銀糸のよつた髪に散つている。
綺麗だ。

だが、その美しさは厳しさと冷たさを併せ持つて、
リングブルムに鋭くぶつけられている。

「謝つて済むことではないわ。

あなたはオーデリーを侮辱しただけでは飽きたらず、
ネツァク寮みんなのことを侮辱したのよ。許せるわけないわ！」

びしひ、ヒマはリングブルムに向かって指を突き立てるとい、
澄んでよく通る声で言い放つた。

そんなことはない、と口を開いたのはラックだ。だが、その声は騒ぎ始めたエルフたちによって搔き潰されてしまう。

美しいエルフたちは互いの顔を近付け合つて、ひそひそと話し出す。

やがて、そのひそひそ声は大きく大きくなつて、Hマを筆頭にリンクドブルムに言葉を投げつける。

「なんであなたみたいな子がネツァク寮なのよー。」

「他の寮に行つてくれたら良かつたのに」

「オードリーが可哀想だわ」

「混ざり者なんかにバカにされて、待ちぼつかになつたんですからね」

「嘆きのリンクドブルム」

まだだ、と思った。

『嘆きのリンクドブルム』

エルフたちは学食でもリンクドブルムのことをそう呼んだ。その意味はいったい何なのだろうか。

私は、はつとしヒーリングブルムを見た。
足に根が生えてしまつたかのよつて、ヒーリングブルムは立ちぬく
ている。

その顔は蒼白だ。

陰口には慣れている様子だったが、
さすがに正面切つて言われることには慣れていないらしい。
当然だ。

そんなものに慣れている者なんていない。

また、慣れてしまう必要なんてない。

そんな悲しいものに慣れてしまう必要なんて。

オブリークトに包まれることなく突き刺さつてくる言葉の刃が、
次々とヒーリングブルムを襲つ。

「認めないわ、あなたがネツィアク寮の寮生だってことを…」
「そうよ、認めないわよ…」

「出て行つて！」

「そうよ、出て行つて…」

「学生課に訴えて、あなたの寮を変更して貰つわ…」

私は拳を握り締めた。

憤りを感じた。

(ヒーリングのよつて)

確かに、オーデリーを待つだけにして、歓迎会に遅刻したけれど、

それが謝つても許されないくらいの大罪だとは思わない。それに、リンドブルムはまだ幼い子どもではないか。少なくとも、今この場にいる誰よりも年下だ。

年長者が寄つてたかつて年少者に言い立てる姿は、なんとも浅ましく、みつともない。

やつていて楽しいものではないだらうし、見ても心が痛む。

私はつかつかと前に進み出ると、ヴィンスが手にしているマイクを奪い取った。

キン、とマイクが悲鳴を上げて、皆の視線が一斉に私の方に集まつた。

「いい加減にしなさいよっ！」

マイクを口元に押し付けながら怒鳴り声を張り上げると、誰もが両手で自分の耳を塞ぎ、顔を顰めた。構わず続ける。

「リンドが何をしたつて言ひのよー！

遅刻？ ええ、確かに悪かつたわよ。

けど、ごめんで済まされないことじやないでしょー。オーデリーを待たせたつて？

待たされたのはオーデリー一人よね？

あなたたちみんな、雁首揃えて寮の門の前でリンクドを待っていたつて言うの？

待つてたわけじゃないんだから、怒つていいのはオーデリーだけじゃないの！」

「……うるさいわね。何にも知らない人間は黙つてなさいよー。」

「何にも知らない人間で悪かつたわね！』

だけどね、そんな人間だからこそ、

幼い子ども一人相手に寄つてたかって處めるなんてヒドイことはしないわ！』

「何ですって！？』

私の言葉に反撃し、反撃を返されたのは、Hママだ。

言葉を詰まらせて、眼を白黒させている。

一瞬、青ざめた顔がしだいに赤みを帯びてくると、Hママは私に歩み寄り、手にしているマイクを床に叩き落とした。

ゴツン、と音が響いて、マイクは耳障りな悲鳴を上げた。

「カエダ……」

いつの間にか、リンクドブルムがすぐ隣に来ていた。顔を俯かせながら、私の袖を引く。

「もういい。リンクドはまだ出て行く

「リンクド…』

「リンクドが出て行く必要はないだろ？』

「やつだよ。」ソーネツァク寮はもつこんだりやんの家なんだから

ラックと彩、そして、はるきも歩み寄ってきて、
リンドブルムの小さな肩を抱いた。

家ですって？」ヒマの細く長い眉が吊り上がった。

「私たちは認めないって言つたはずよ。

「その子がネツァク寮の寮生だとこいつ」とをね

「そうよ、そうよ。明日の朝一番で学生課に訴えに行くわ

「ひどい。リンドブルムさんは頭を下げたじゃないのー。

「これ以上びうしきついこいつのー？

「どうしたら許してくれるのー。ネツァク寮の寮生だつて認めてくれるのよー。」

この時エルフたちがすぐに条件を提示したのは、彼女たちがいくら学生課に訴えたとしても、実際にリンドブルムが寮を変更されることはないとこいつとを、彼女たちがちゃんと承知していたからだ。

ソレンティアには4つの学生寮があり、それぞれ異なった特性を持ち、

それに相応しい学生が選ばれ入寮する。

リンドブルムはネツァク寮こそ相応しいとの判断が下された。
その一度下した事を、ソレンティアはけして覆さない。

よつて、私たちもそのことに気が付いていたのなら、

この時の正しい対応は、挑発には乗らずに“どうぞ訴えていらっしゃる

なさい”と言つことだつた。

するとエルフたちは訴えても無駄であることを承知しているので、そろつて口を摘むんだはずだつたのだが、

残念なことに私たちは心から焦り、まんまと挑発に乗つてしまつた。

Hマは、そうね、と視線を漂わせ考え込むと、自分の首もとに右手を触れさせた。

胸に輝く藍色の石。

銀の鎖で首から下げられている。

「これにするわ」

Hマは首の後ろに両手を回すと、ネックレスを外した。

きりり、と藍色の石が蛍光灯の光を受けて、澄んだ光を放つ。

「誰か、弓と矢を持つてきて。

ネックレスの寮生らしく勝負で決めましょう
「勝負？」

Hマに言つられて弓と矢を取りに行つたエルフが戻つてくると、Hマに右手にネックレスを、左手に矢を持ち、私たちに見えるようにな高くと掲げた。

「弓の矢にこのネックレスを括り付けるわ。

そして、寮の裏手の森に向かって口を開く。「を引くから、
ネックレスを持って帰ってきて頂戴。

無事に帰つてこられたらあなたたちの勝ち。
帰つて来られなかつたり、手ぶらで帰つてきた私たちの勝ち。
これでどうかしら？」

売られた喧嘩は買う主義だ。

やつてやつひじやないの、と勇ましく受けた立とつとした。
ところが、その時、ラツクに腕を引かれて、私はぐつと薙葉を呑
み込んだ。

「無茶言つな、もつ夜なんだぞ。裏手の森は昼間でも危ない。
何が潜んでいるのか分かつたもんじやないからな」

「そうよ。危険だわ！」

「あら、勝負をやめてあげてもいいのよ？

その場合、当然私たちの不戦勝よね」

「何それ！ あり得ない！」

受けたやるわよ、と今度こそ誰にも妨げられることなく言つてしま
ることができた。

どんなに森が危険だらうと知ったことではない。

ここまで言われて戦わなければ、女が廢るー

私はリングブルムの枝のような細腕を掴むと、その顔を見下ろし
た。

「やるわよね？」

疑問系だが、もちろん質問をしたわけではない。
否とは言わさぬ確認だ。

リングブルムはうろんな瞳を向けてきた。

「めんべくせい」

「そう言って逃げるの？ 負けを認めたことになるのよ」

「それは嫌だ」

「じゃあ、受け立つのね？」

「へん、とリングブルムが額へのを見て、私はHマを振り返った。Hマは、にこりと不敵な笑みを浮かべると、窓に向かって歩き出した。

縦長の大きな窓の向こうには、闇のよつた森だ。

寮の裏手の森。

寮生たちが魔法の練習をしたり、秘密の実験を試みたりするものだから、

その影響で奇妙な動植物が生み出されてしまっている。

中でも特に気を付けなければならないのは、過去の学生が学園を去る際に置き去りにした召喚獣だ。すっかり野生化してしまい、人を襲うのだという。

Hマは流れのような仕草で窓を開くと、口を開いた。

「行くわよ

シユツ。

闇に向かつて矢が射られる。

矢は大きく夜空に向かつて円を描き、やがて森に呑まれていった。目で追えたのは矢がエマの手から離れた、その一瞬だけだ。どこへ飛んでいたのか、検討もつかなかつた。

けれど、今更やめるとは言えない。

エマをひと睨みすると、窓から寮の外へ出た。サクリ、と足下で草が鳴る。

続いてリンドブルムも外に出てくると、私は食堂の中を振り返つた。

心配げな顔をした彩に視線を向け、にっこり微笑んで、大丈夫だよ、と言ひ。

「すぐ戻つてくるから」

片手を振つて、私はリンドブルムと共に森の中へと入つていつた。

食堂から離れてしばらくもしないうちに辺りは暗闇に覆われ、前も後ろも分からなくなってしまった。

いつたいどこを歩いているのだろうか。

この森はどのくらい深いのだろう。

本当にちやんと戻れることができるのだろうか。

野生化した召喚獣と出会い、出会わない以前に遭難し、力尽きて死んでしまうのではないだろうか。

私は拳を胸の前に押し付けた。

先程から心臓がドクドクと、うるさい。

不安に押し潰されそうになりながら、必死に足を前に進める。後戻りはできない。

ならば、進むしかなかつた。

私はすぐ脇を歩いているリンクブルムの顔を見下ろした。手を伸ばせば届く距離にいるのに、その顔は闇に覆われていて、よく見えない。

(怖い)

どうしてこんなことになってしまったのだろうか。
今更ながら後悔する気持ちが沸いてきた。

リンダブルムに対して売られた喧嘩だつたのだから、
何も自分で森に入る必要はなかつたのではないだろうか。

そもそも、なぜ、

リンダブルムに言われた悪口に対して自分はあんなにも憤りを感じたのだろうか。

リンダブルムと出会つて以来、調子を狂わされっぱなし。
自分が自分ではないみたいだし、
大きな渦に巻き込まれているような気がしてならない。

(ううん、違う)

リンダブルムが悪いわけではない。

リンダブルムを取り巻く得体の知れない何がが悪いのだ。

『何にも知らない人間は黙つてなさいよー!』

Hマの言葉を思い出す。

(何も知らないって……。

だったら、Hマはいったいリンドの向を知つてゐる(?)

ざわざわと、木々が恐ろしげな音を立てた。

梟の声。

繁みが揺れる度に、今にもそこから獸が飛び出していくのではないかと、

胸がドキリと大きな音を立てた。

「ねえ、リンド」

「何だ？」

「あなた、Hマたちに何かしたの？」

「何も」

「それじゃあ、『嘆きのリンドブルム』って何?」

息を呑む音が小さく響いた。

嘆きのリンドブルム。

その言葉の意味するものこそ、
リンドブルムを取り巻く得体の知れないものの正体であるよつて
思えた。

リンドブルムは一度深く息を吐き出すと、
ぱつりぱつりと、言葉を零すよつて口を開いた。

「ダークエルフの国アルカウムに“嘆き谷”と呼ばれる谷がある。

風が谷を抜ける時に聞こえる音があるで女の嘆き声のよつて聞こえるから、
その名が付いたと言われている。

「リンドは響き谷で生まれたんだ」「響き谷じやなくて？」

リンドブルムは響き谷の領主の姪だと聞いた。
私がそつ尋ねると、リンドブルムは首を横に振った。

「リンドの父上は、嘆き谷の領主ドレイクの息子ブルクハルトなんだ。」

父上は、嘆き谷と響き谷の友好の証として、
響き谷の領主フリューゲルの妹イドウベルガを娶つた。
やうして、生まれたのがリンドだ」

「…うん」

「リンドの生まれたその日、嘆き谷に何かが起こつた。
突然、誰もかも地に伏して、そのまま息絶えてしまつたんだ。
生き残つたのはリンドだけ」

「なんで、そんなことが？ いつたい何が起きたの？」

「分からぬ」

嘆き谷の異変に気付いたフリューゲルが兵を率いて嘆き谷に向かうと、

「」

そこら中、死体だらけだつたらしい。

だから、フリューゲルはリンドだけを連れ帰り、リンドを自分の子のように育てた

リンドブルムの顎が、ひゅう、と音を立てた。

木々がざわめく。

「嘆きの谷でもよくコンドは“嘆きのコンドブルム”って呼ばれた。
あと“嘆きのコンドブルム”っていう意味なんだと思つてい
た。

けど、こつもわれを言われると、悲しい気持ちになつたから、
せつとそれを言つた者の心にコンドを哀れむ気持ちがあつたのだ
と思つ。

嘆きの谷の悲劇をコンドに重ねて“嘆きのコンドブルム”って言つ
てこるんだ」

だけど、トロンブルムは暗闇に向かつて言葉を続けた。

「ソレンティアに来て、ヒマたちに言われる『嘆きのリングブルム』には、
”哀れみよりも蔑みを感じる。
可哀想な子つて言われるのもつらこねび、
疎ましいといつ気持ちを全面に出されると……」

闇がリングブルムの言葉を奪い去った。

風の声。

嘆き谷を抜けていく風は女の嘆き声のように聞こえると
リングブルムは言っていたが、この森を抜けていく風はまるで、
森に入ってきた者の陰口を言っているかのように聞こえる。

ひどく不安になった。

「リングは何も悪くないじゃない」

“嘆きのリングブルム”といつ言葉に何か深い謎が含まれていて、
それが分かれば何もかも解決できると思っていた。
だが、それは見当違いだった。

リングは何も悪くない。

むしろ、両親を始めとする轟き谷の一族すべてを亡へてしまつた可哀想な子だ。

(可哀想な子)

ぱつん、と胸に浮かんだ言葉にハッとして、私は頭を左右に振つた。

(たつた今、リングが言つたばかりじゃないの。
“可哀想な子”って言われるのはつらいって)

もつともなことだと思つ。

きっとリングドブルムは、響き谷の家族から精一杯の愛情を注がれ育てられたのだろう。

それは従兄たちであるイデアブルーとハルシオンの様子からも分かる。

彼らのリングドブルムの可愛がりようは、私の目には些少度を超しているよびに見えた。

愛されて育つたリングドブルムが、自分は不幸だ、と感じる」とはなかつたのではないかと思つ。

それなのに周りから“お前は不幸だ。

お前は可哀想なのだ”と言われば、胸が苦しくなるのも当然だ。

本当に不幸であるような氣さえしてくるだろう。

ふくねり
梟が枝から飛び上がり、バサリと大きな音を立てた。
思わず、悲鳴を上げて飛び上がった。

「カエテ？」

どうしたんだ、トリンダブルムは私の袖を引いた。

「震える。……怖いのか？」

自分よりもずっと年下なトリンダブルム。

本当なら年上の自分がしっかりと守つてやるべきなのに、
逆に弱さを見せてしまったので躊躇ためらわれたが、
意地を張っていても仕方がない、私は言葉なく頷いた。

くすり、トリンダブルムが笑った。

「暗いから怖いのか？」

「今にも何かが飛び出して来そうじゃない」

「何が飛び出して来るんだ？」

「熊とか……」

出じゃないんだから、と自らシッ ハリを入れた。

野生化した召喚獣が、と言ったとコソンドブルムは少し考えて、それじゃあ、と言った。

「向こうに避けて貰おう。

きつとその召喚獣も人と関わり合いになりたくないから、森の中に隠れているんだよ。そのまま隠れて出て来ないで貰おう」「どうやって?」

「ひらだ

言つて、リングブルムは小さな口を大きく開けて、唐突に歌を唄いだした。

それは陽気な歌。

暗闇の中を歩いているとこいつと忘れてしまってなるべくいに明るく聞いてみると自然にリズムを追つて体が動いてしまってなるくらいに元気だ。

「リングも小さい頃、暗闇が怖かつた。よく泣いていたんだ。リングが泣いていると、ブルーとハルがやつて来て、歌を唄つてくれた。

響き谷の者はよく歌を唄うんだ。楽しい時も悲しい時も。だから、慰める時も励ます時も歌を唄う」

もう一曲、リングブルムは陽気に歌い出し、ほら、と頭上を指差した。

木々の隙間から覗いた夜空に、銀色の小さな雲。

キラキラと瞬いでいる。

「暗いけど、よく見ると、真っ暗じゃない」

「星、きれいだね」

「木が無ければ月も見える。」

ハルが言つてた。月はリングがどこに行つても、どこまでもどこまで歩いていて、コンドのことを見守る、って

それから、とコンドブルムは耳の横に両手をそえ、耳を澄ませる仕草をした。

「暗くて姿は見えなくとも、きっとたくさんの生き物が側にいる。
一人じゃない」

虫の声が響いてきて、リングブルムは彼らの小さな伴奏に合わせるよつに再び唄いだした。

とその時。

私とリングブルムは名前を呼ばれて振り返った。

野球ボールほどの白い光がちらちらと揺れている。

それはしだいに大きくなり、2人の名前を呼ぶ声も近付いてきた。

「楓ちゃん、リングブルムー！」

「…彩ちゃん？」

白い光がバスケットボールくらいの大きさになると、
その光に照らされて闇の中に彩の顔が浮かび上がって見えてきた。
その後ろにラックとはるきの姿もある。

「どうしたの？」

「どうしたのじゃないよ。追い掛けてきたの。
やつぱりどう考えても危険だもん」

「2人はまだ何一つ魔法を使えないじゃないか。

野生化した召喚獣に襲われたらどうするつもりだよ
「それは…」

口籠もると、それ見たことかと、はるきが鼻で笑う。

「仕方がねえから、オレたちもついて行つてやるよ
「ついて行つてあげる！」

はるきに続いて彩も言つと、持つていたカンテラを田の高さに掲げてみせた。

暗闇に包まれていた辺りがパアツと明るくなつた。
けれど、それはカンテラの明かりだけのためではない。
追い掛けてくれた彩たちのおかけで、胸に灯ともしびが宿つたからだ。

「ありがとう」

「こり微笑んで礼を言つと、ラックとはるきが同時に私の肩をバシッと叩いた。

「友達なんだから当然だ。

危ないっていう場所に2人だけで行かせるわけねえだろ」「お前たち、灯りも持たずに行つただろ？ 無謀すぎるぞ」

「えへへ」

言われてみればその通りだ。

手探りで進むには夜の森は無謀すぎる。

照れたように笑い、私は彩の隣に並んだ。

はるきがやつて来た道を振り返り、真っ直ぐと腕を伸ばした。

「食堂から真っ直ぐ矢が飛んだとして……。

Hマガ』の名手だとしても腕力を考へると、そう遠くまで飛んでいいはずだから、この近くにあるはずだ」

「風は？ 上空は風が強そうだよ？」

彩に言われてはるきは口と指先を舐め、風向きを確かめる。

「矢が風に流されたとしたら、いつちだ」

わざかに指の先を移動させると、先頭に立つてはるきは歩を出した。

その後をカンテラを持った彩が続き、私、リンドブルム、ラックと続いた。

ざわめき。

闇に潜んでいた鳥たちが一斉に飛び立った。
ぞつと身が竦むような雄叫びが響く。

私たちは歩みを止めて、辺りを注意深く見渡した。

「……な、に？」

それは獣の声。

地面を搖るがすような恐ろしげな声だ。

ハツとして後ろを振り返った。

最初に聞こえた声は正面からだったが、次に聞こえた声は背後からだった。

「氣を付ける、何がいるぞ」

ラックが拳を構えた時だった。

ジビビビビ。

地響きが鳴る。

何かが猛スピードで押し寄せて来た！

「出たーつ！」

熊だ。

繁みから、木々の後ろから、闇の奥から、飛び出してきた獸は数頭の熊だった。

いや、この生き物は本当に熊と呼べるのだろうか。

その毛並みは、焦げ茶色をベースに、赤や白、橙のぶち模様が入っている。

何と言つか、色違いのパンダという感じだ。

「ぶち熊だ！」

「何それ！？」

見たまんまのネーミングじゃないか、
という次に続く言葉は最後の熊が飛び出してきたのを田撲して、
そのショックから呑み込んでしまった。

その数は5頭で、私たちと同数である。

私たちを取り囲んで、のつそのつそと体を左右に揺らしている。

大きさは私とさほど変わらない。

リンドブルムよりは大きくて、ラックよりは小柄だ。

「戦うの？」

「こつちが戦いたくないつても、あからせんはやる気まんまんじやねえか」

えーん、ヒ彩はカントラをカタカタと揺らした。

すると、ラックが対峙した熊を睨みながら、彩に向かって声を掛けた。

「アヤに戦えなんて言わないよ。後ろに下がつて。」
「は俺とハルキで……」

「リンドもやるー。」

「え」

他に4人もいたのに、誰もリンドブルムを止めることができなかつた。

パツ、飛び出すと、リンドブルムは一番近くにいた熊に飛び掛かつた。

小さくも力強い拳を受けた熊は後ろに吹っ飛んだ。
どおーん、と大きな音が闇に響く。

「リンドー。」

驚いたのは人も熊も同じ。

だが、熊たちは仲間がやられた怒りに眼を鋭く光らせ、唸り声を上げた。

そして、怒り狂いながら一斉にリングブルムに向かっていった。

ラックの指先が空を滑り、素早く魔法式を描いた。

「ビリアル！」

呪文を唱えながら、粉のような物をリングブルムに向かつて吹き飛ばす。

続いてはるきも地面にしゃがみ込み、指先で魔法式を綴る。

「スクタム！」

一瞬、眩い光が私たちを包んだ。

「今は？」

「一定時間、攻撃力と防御力を上げる魔法だよ

再び地面が揺らいだ。

視線を向けると、リングブルムに蹴り飛ばされた熊が一頭ひつくり返っていた。

「ハルキ、行くぞ」

「ああ」

はるきは頷いて、愛用武器のトンファーを構えた。トンファーといつのは、45センチほどの棒で、2つ1組で左右の手にそれぞれ持ち扱う武器だ。棒の端の方に握って持てる短い棒が垂直に取り付けられており、はるきはその部分を握り、自分の腕から肘を覆うようにして構えている。

この状態から空手の要領で攻撃したり防御したりすることもできるが、

手首を返し棒を反転させ、棍棒のように扱い戦うこととも、鎌術の要領で戦うこともできる。

一方、ラックはリングブルムのよじて素手で熊に立ち向かうひじい。

2人はリングブルムを助けに、地面を蹴って駆け出した。

ラックの指先が空を滑る。

魔法式を描き終えると、キラキラと輝く粉を自らに振り掛けた。

「セアードー」

次の瞬間、ラックの姿が消えた。

いや、違う。

消えたように見えたほど素早く移動したのだ。

熊が地響きを立てて地に伏した。

「リング、」「おまかせ任せろ」

「ラック、ハルキ」

「前を見ろ、前を！」

2人を振り返ったリングブルムに熊の鋭い爪が迫った。

「ルメンナル！」

彩の声が響き、辺りに白く眩い光が放たれた。
光の直撃を受けた熊は小さく悲鳴を上げて、よろよろと後退した。
その隙をついて、はるきがトンファーを棍棒のように扱い熊の体
を殴り飛ばした。

「ナイス、アヤ！」

「これくらいしかできないけどね」

「今は何？」

「本当は戦いに使つ魔法じゃなくて、ランプとかに明かりを灯す魔
法なの」

「へえ。彩ちゃん、すごいね」

「楓ちゃんもこれからこうんな魔法を習つて、使えるようになるん
だよ」

そうか、と私は胸の前を押された。

魔法なんてずっと実感が持てなかつた。

けれど、今、次から次にと楓の目前で魔法が繰り広げられている。

(これが魔法なんだ……)

最後の熊がはるきによつて倒されると、リンドブルムはペタリとその場に座り込んだ。

小さな肩を震わせて、呼吸を荒くしている。

「大丈夫か？」

ラックの間に無言で頷く。

疲れ果てているという感じだ。

それははるきも同じらしく、額の汗を袖で拭いながら、重い足取りで楓と彩が待つ場所まで戻ってきた。

「どうやら、ぶち熊の巣に入り込んでしまったらしいな」

「熊つて、群れて巣を作る生き物だっけ？」

「楓ちゃん、忘れちゃダメだよ。ここはソレンティアだもん」

「そつか」

「それに、ただの熊じゃねえ。ぶち熊だ」

「そうだっけね」

もはや、何でも来い、という感じだ。
とにかく難は去ったのだから、どうでもいい。

そう思った時だった。

地に伏した熊がピクリピクリと動き出した。

「何？」

熊たちはドロリと、まるでスライムのように溶け、
氷の上を滑るように草地の上を移動すると、大きな一塊になった。
ぶよぶよと蠢くそれは次第に巨大な熊の姿を取つた。

「嘘だろ……」

「ぶち熊って、合体するつけ？」

「いや、しないだろ？」「

「……ってことは？」

「ぶち熊じゃねえーっ！」

ぐわあああーっ、と熊が大口を開けて雄叫びを上げた。

ざわざわと木々が揺れる。

熊は血走った赤い眼をギョロギョロさせて、

私、彩、はるき、ラックと順繰りに見渡すと、リンゴブルムを見下ろした。

「リンゴ、逃げて！」

どうやら熊は、一番近くにいたリンドブルムに狙いを定めたらし
い。

猛スピードでリンドブルムに向かって突進していく。
私と彩は悲鳴を上げた。

けれど、リンドブルムは動かない。
いや、疲れ切っていて動けないのだ。

19・ネックレスの行方

振り上げられた熊の太い腕。

ドン！ 半円を描くように振り下ろされ、小さな体が勢いよく吹
つ飛んだ。

「うわっ」

「リンドー！」

ガツン、と太い幹にぶつかって、リンドブルムは地面に転がる。
痛みを感じているのはリンドブルムのはずなのに、私は目頭が熱
くなつた。

幼い体を追つて、熊は跳ねるように駆けた。
そして、再び振り上げられた太い腕。

キラリと輝いたのは、その分厚い手の先についた鋭い爪だつた。

やめて、と叫んだ。

だけど、無情にも熊の爪は光の線を描いた。
誰もが瞼を閉ざして覚悟を決めた。

リンドブルム自身もギュッと手をつぶつて、体を硬くする。

だが、その顔に濃い影が落ちた時、最後の足掻きとばかりにリン
ドブルムは叫んだ。

「助けて、ブルー！」

「ヴィンクタスベンナ！」

「ペティエ・エト・グリフォン！」

眩い光の帯が巨大熊に向かつて伸び、瞬時にその体を縛めた。
そして、どこからともなく羽音が響いて来、熊の頭上に大きな影
が落ちた。

鳥のような獣のような甲高い鳴き声。
鋭い爪が熊の幅広い背を切り裂いた。

ぐわあああ。

熊が叫く。

そして、たらを踏んでリンクブルムから離れた。
どおん、とその巨体は顔面から地面に倒れた。

そして、呆気に取られた私たちの前に降り立つたのは、
獅子の体に鷲の翼を持った獣だった。

「ブルー！ ハル！」

まるで生まれたての子鹿のように、リングブルムはよろけながら立ち上がると、

木々の中から従兄たちの姿を見つけて出し、駆け寄った。

彼らは幼い子を愛おしげに抱き締めると、私たちの方へゆっくりと歩み寄ってきた。

「危なかつたな」

「大丈夫ですか？ 鮎さん、お怪我はありませんか？」

「リング、肩が痛い」

彩がカンテラをリングブルムの肩に近付けると、おそらく幹に打ち付けられた時だらけ、その小さな肩に矢のような枝が突き刺さっていた。

「きやあ。リングちゃん！」

痛い、と彩が泣きそうな顔になつた。

すぐに引き抜こうとしたイデアブルーをハルシオンが制する。

「抜けば、大量に出血してしまつ」

「このままにしろって言つのか？ 可哀想じやないか」

「それでも回復魔法が使える者のもとへ行くまで、この枝は抜けない」

ああ、と深く息を吐いて、イデアブルーはリングブルムを抱き締めた。

痛い、と身を捩つて、リングブルムは細めた眼を従兄の肩越しに巨大熊の方へと向けた。

光の帯に動きを封じられ地面に伏している熊。

彩がカンテラを近付けると、その毛並みは様々な色がマーブル模様をつくっていた。

「彩ちゃん、この光は何？」

「緊縛の呪文だよ」

「じゃあ、あれは？」

私が指差したのは、巨大熊を足蹴にしている生き物だ。

彩はカンテラの上へ持ち上げて、その翼を生やした獅子の姿に光をあてた。

「グリフォンだわ。私も初めて見る！」

すごい、と彩が黄色い声を出すと、グリフォンが不快そうに顔を背けた。

ぐるぐる、と低く唸る。

ハルシオンが柔らかく微笑みながら歩み寄ってきて、
グリフォンの首を宥めのよつて撫でた。

「貴方のおかげで大切なイトコを救うことができました。
ありがとうございます。どうぞ、今日はこれでお帰り下さい」

言つと、ハルシオンはグリフォンに向かつて深々と頭を下げた。
ギイ、と短く鳴いて、グリフォンは翼を羽ばたかせる。
ハルシオンが地面に描いた魔法陣がきらりと輝き、
その光に呼ばれたかのようにグリフォンは魔法陣に向かつて駆け
る。

グリフォンが魔法陣に飛び込み、
すっかりその大きな体が魔法陣に呑み込まれてしまつと、
ハルシオンは私たちに振り返つて、二つつと微笑んだ。

「彼はとても誇り高いのです。

他愛のないこと呼び付けるなど、叱られてしましました」

「他愛もない」と、つて……

自分たちは窮地に陥っていたのだ。

特にリンドブルムはあともう少しで巨大熊の鋭い爪で切り裂かれ
るところだった。

それを他愛もないって……
ちょっとぴりやるせない。

そう言えば、リンドブルムが怪訝な瞳を従兄たちに向かた。

「ところで……。なんで、ここに、ブルーとハルがいるんだ？」

もつともである。

イデアブルーはティファレト寮の寮生であるし、ハルシオンはケセド寮の寮生だ。

なぜネツァク寮の森にいるのだろうか。

しかも、リンドブルムの助けに応じて姿を現した。
映画や漫画ではあるまいし、そんな都合良く現れることができる
ものだらうか。

そう尋ねると、彼らは顔を見合させて苦笑した。

「ネツァク寮で新歓をやるって聞いてさ。
新入生の歓迎会ってことは、リンドが主役ってことだろ?
リンドの雄姿を見たかったのと、
リンドがこれからお世話になるネツァク寮の人たちに、ここは保
護者として、
挨拶をしておかなければと思つたんだ」

イデアブルーの言葉にリンドブルムの顔が、
いかにも“うそばり”といつよつと歪む。

これは私の想像だが、

おそらくイデアブルーは響き谷にいた頃からリンクブルムに対してこんな感じだったのだろう。

リンクブルムに友人ができる度に
“うちの可愛い子をよろしく頼むな”と言つて、挨拶をして回つたに違ひない。

人間界の友達の中にもそういう過保護な母親がいて、
その母親から両手を握られ、“うちの子と仲良くして頂戴ね。
くれぐれもよろしくお願ひね”なんてことを言われた覚えがある
が、正直、どん引きだつた。

“仲良く”だなんて、誰かに頼まれなくたつて“なる”時はなる
し、
“なれない”時はどうしようもない。

本人から言われるのならともかく
保護者から“くれぐれも”とお願いされることではないように思
う。

その点では、イデアブルーよりはハルシオンの方が自制が利くら
しく、

彼は柔らかく微笑みながら、僕はね、と口を開いた。

「ブルーが行き過ぎたことをしたら止めようと思つて、
一緒にネツァク寮に来たんだ。

でも、私たちがネツァク寮に着くと、君の姿はなかつた。
どうしたのかと人に聞くと、ネックレスを探しに森に入った、つ

て。

「血の気が引いたよ」

「それで、大慌てで追い掛けってきたってわけだ」

あ、とリンドブルムが短く声を上げた。

「ヒマのネックレスを探さないとー。」

自分から体を離し、歩こうとした幼い体を
イデアブルーは抑え付け、抱き直した。

「リンド、ネックレスならあそーだ」

「え？ どー？」

イデアブルーが指差した場所を

彩がカンテラを近付けると、巨大熊の尻に矢が突き刺さっていた。

ヒマが射た矢である。

「あつた。リンド、矢があつたぞー。」

「ヒマのネックレスもちゃんと付いている

はるきとラックが矢に手を伸ばそうとする。

だが、その度に熊が低い唸り声を上げて、なかなか近付くことができない。

どうしたものか、と頭を悩ませていると、ハルシオンが綺麗な笑みを零した。

「大丈夫ですよ。その熊は、姿こそ熊ですが、熊ではありません。真実の姿はまるで違う姿なのです。」

「真実の姿？」

「はい。その熊の正体は、エレファントキノコです」

ハルシオンが涼しげな表情で言い放った言葉に、ラックたちはなるほどと頷いた。

彼らの耳には、たちまち熊の姿が揺らぎ、キノコの姿に変わったのだと呟つ。

だが、私は一人、耳を疑つた。

(はい？ なんだって？)

キノコと聞こえたようだ。

しかも、エレファント。

もしそれが英語であるのなら、日本語訳して“象”といふことになる。

(ゾウキノコ？ ……なんだ、それは！？)

だけど、冷静になつてみよ。

「ソレンティアでは自動翻訳してくれる。

…ところによると、ハレファントは英語ではなく、それ以上訳しよつのない“ハレファント”ところの言葉なのだ。

あのう、と言つて、私はハルシオンに尋ねた。

「それはどういうキノコなんですか？

というか、本当にキノコなんですか？ とてもキノコに見えません

」

（熊だ。熊にしか見えない）

すると、答えたのは、まるきだつた。

「ハレファントキノコが、過去の学生が研究の末に生み出したキノコだ。

幻覚を見せる胞子を撒き散らす」

「幻覚？」

「そう。ですから、この熊の姿は胞子によつて見せられていく幻覚なのです。

おそらく、皆さんの中でも、熊が出てきそうだ、と考えた方がいたのではないか？

その考えを読み取ったハレファントキノコが皆さんに熊の幻覚を見せたのです」

ぎくりとして私は顔を引きつらせた。
今にも繁みから熊が飛び出しそうだと思つてしまつたのは、
他の誰でもない、私だ。

「胞子の届かない距離にいた時、俺たちにはお前たちが、
何にもないところでバタバタ暴れているよつに見えたぞ」

イデアブルーが言ひ、ハルシオンも頷いて続ける。

「私たちの田には、エレファントキノコそのものの姿が見え、
その柄に矢が刺さつている様子が見えていました。
それなのに、皆さんが魔法を発動させ、何もない場所に向かつて
戦つていらして……」

「下手に近付けば俺たちも幻覚にやられると思つて様子を見ていた
ら、

「玲子にこんな怪我を負わせてしまった。『めんな、玲子！』」

ぎゅっと玲ンドブルムの体を抱き締めるイデアブルー。
すかわず、その腕の中で苦しげな声が上がった。

恐る恐るといったように、彩は熊に近付いた。
そして、驚いた表情で私に振り返る。

「本当だ。」れ、熊じゃなくて、Hレフアントキノ「だよ。
楓ちゃんも熊のイメージを頭から追いでしょ、かやんと見てみな
よ」

「う、うん」

曖昧に頷き、私は彩がカントラを向けた方をじっと見つめた。

それは小さなゾウだった。

いや、ゾウとはほど遠いヒョロリとしたピンク色の体。
片手で握れるほどのサイズで、足は根になっており、
地面からお尻、腹、長い鼻のついた顔、そして、大きな傘を開か
せた頭が生えている。

「キモイ…」

「ええっ。可愛いよ」

「いや、キモイ…」

頑として譲らぬ、キモイと叫こ張るど、

彩は、むう、と低く唸つた。

「可愛いと思つただけどなあ」

彩はHレフアントキノの前にしゃがみ込むと、
ゾウのお尻に突き刺さった矢に手を伸ばした。

「「めんね。痛かったよね」

優しく声を掛けて、一思いに引き抜いた。
ペイ、と小鳥のような悲鳴を上げて、ゾウが身を捩った。

(キモイ…)

「ごめん、「めん」と彩は謝りながら、ゾウの尻を指先で撫でてやつている。

ゾウ…ではなく、本質はキノコなので、傷ついた場所は穴があいているだけで、血が流れ出すことはない。やがて自然治癒していくことだらう。

彩は手にした矢からエマのネックレスを取り外すと、リンドブルムの顔の前で広げた。

「リンドブルム、あつたよ。ほらー。」「うん」

リンドブルムはネックレスを受け取ると、それを物珍しげに眺め、眉を寄せた。

カンテラの光りを受けて、ネックレスについた藍色の石がキラリと輝いた。

「…リンク、エマに何か悪いことしたのかな?」

咳くような小さな問いだつた。

従兄たちは、はつと息を呑んだ。

風が吹き抜けて、ざわり、と木々が陰口を叩く。

ハルシオンは膝を着いて、

リンクブルムと視線を同じくすると、静かに口を開いた。

「君に話しておきたいことがあるんだ

「何?」

「君が生まれた日、嘆き谷に悲劇が起きた。
父上はすぐに兵を率いて嘆き谷に向かい、その惨状を目の当たり
にした。」

見渡す限りの死体の山だったと、父上は戻つてこられて後、
そう私たちにおっしゃった

何が起きたのか、誰にも分からぬ。

突然、嘆き谷で暮らしていたダークエルフたちは
地に伏し、息絶えたのだといつ。

死体の中、ただ一人命を保っていたのは、
生まれて間もないリンクブルムだけ。

イデアブルーとハルシオンの父であり、

響き谷の領主であるフリューゲルは、妹の死を悲しみながら、
リンブルムを響き谷に連れ帰ったのだという。

ハルシオンの話を引き継いで、イデアブルーが静かに口を開き、
己の左肩に額を押し当てる幼子に語り聞かせた。

「父上が嘆き谷に戻つた翌日、追つて戻ってきた兵の一人がこう報告した

『遺体が無くなりました!』

「嘆き谷には、死者を弔うために数人の兵士が残されていた。その晩、彼らは見張りを立てながら交代で眠りについたそうだ。だが、翌朝、日が昇り明るくなつた谷のどこを探しても、あれほどたくさん転がっていた死体が一つもなくなつていた。もちろん、悲劇が夢だったわけじゃない。死体は確かにあつたんだ。

そして、嘆き谷の兵士たちの気が付かぬ間に消え失せてしまった」

そんなバカな、と側で聞いていたはるきが眉間に皺を寄せた。

「見張りの兵士はどうしたんですか？」

「寝ずに辺りを警戒していたのでしょうか？」

「おい、ハルキ」

「だつて、死体が勝手に消えるなんてことあるわけがないだろ。誰かが運び出したに違いないんだ。けど、一人で運び出せるわけがない。」

軍を率いて運び出した者がいるはずだ。

それを気が付かないなんて、よほど嘆き谷の兵士は抜けているとか思えない！」

一度は制したラックだったが、はるきの言い分も確かに思ったようだ、

掴んでいたはるきの腕を放し、イデアブルーとハルシオンに向き直った。

確かに、とハルシオンが口を開く。

「何者かが軍を率いて死体を運んでいったのでしたら、いくら間抜けな兵士でも気付いたことでしょう。けれど、その何者かは軍を率いて運んでいたのではないのです

「じゃあ、どうやって死体を運んだんですか？」

死体は山のよつこあつたのでしょうか？」

「魔法だ」

短くイデアブルーは言い放った。

そして、リンドブルムを抱く腕に力を込めた。

「……魔法だと、俺たちは考えている。

そうでなければ、多くの死体を一晩で運ぶなど不可能だ。

そして、俺たちはこうとも考えている。

死体を盗んでいった奴と嘆き谷の悲劇を起こした奴は同一人物なんじゃないか、ってな

「ええ、そうです。

一瞬にして嘆き谷の人たちは息絶えました。

何か強力な魔法を掛けられたのだと考えるのが妥当なのです

しん、と静まり返った辺りに、
草の上を渡る虫の足音が小さく響いた。風が囁く。

『いつたい誰の仕業だらうか。
いつたい何が目的だらうか』

やがて風は木々を揺らして駆け抜けていった。

「それから間もなく経つて、一つの知らせが響き谷にもたらされました。

“吹雪の原”がオーク『魔物』の群れに襲われたというのです。
そのオークたちはゴブリン『醜く邪悪な小人』を大きくしたかの
ように、

人に近い姿をし、剣や斧、弓を扱うことができたそうです

「それからすぐ“桜梅の泉”と“虹の麓”が次々とオークに襲われ
た。

人に近い姿をしていたことから、

吹雪の原を襲つたオークと同じだらうということになつた

オーク『魔物』と一言で言つても、その容姿は様々で、
また知能の有無もピンキリらしい。

そして、そのオークたちは、群れをなしていたこと、

武器が使えたということから、かなり高い知能を持つていたとい

「う」とになる。

「そんな賢いオークなら一匹だって警戒するだらうし、群れをなすまでその存在に気が付かなかつたんですか？」

エルフは抜けていると聞いたげにはるきが言つて、ハルシオンは首を横に振つた。

「危険だと思われるオークは、その住み処を常に見張られ、近隣の郷に動向を報告されます。

そのオークの群れはある日突然現れたのです

「そんなわけが……」

あるんだ、トイテアブルーがはるきの言葉を遮つた。聞け、と片手を振る。

「オークの顔を間近で見た虹の麓の者が言つには、
そのオークはダークエルフではないかと」

「1000年ほど昔、アルヘイムとアルカウムの間で戦争が起つりました。

その際、アルヘイムが捕虜にしたダークエルフに禁じられた魔法を掛けたといつ記述が残っています

「禁じられた魔法？」

「オークに変身させてしまう魔法です。

エルフたちはダークエルフをオーク化させ、

オーク兵士としてアルカウムを攻めさせたのです

ひどい、と彩が自分の口を塞ぐ。

だが、こんなひどい話をハルシオンが話した真意は、彩を震えさせるためではない。

相手をオーク化させてしまう魔法が存在するということだ。

つまり、とはるきが口を開いた。

「吹雪の原や虹の麓を襲つたオークたちも、何者かの魔法によつてオーク化された何かだつてわけだな？」
「何か……つて？」

まさか、という言葉を呑み込んで、一同は一斉にリングブルムに振り返つた。

ハルシオンの静かな言葉は続く。

「オークたちは次々にエルフの郷を襲い、エルフたちを恐怖に陥れました。
しかし、ついに“眠り森”を襲つた時、そここの領主によつて殲滅させられました」
「眠り森の者たちは、古くからアルヘイム王家に仕えている尊い血統の者たちだ。」

さすがだな、オークの侵略を許さなかつたんだ」

「そして、眠り森の領主は退治したオークたちを調べ、その中に嘆き谷のブルクハルトを見つけ出しました」

「ブルクハルト……？」

「君のお父上だよ、リンゴ」

リンゴブルムは息を詰めて従兄たちの顔を見上げた。
やはりそうだったのだ、と私たちはそんなリンゴブルムを無言で見守る。

エルフたちの郷を襲つたオークたちは、オーク化した嘆き谷のダーケエルフたちだったのだ。

リンゴブルムは愕然とし、震える声を上げた。

「なんで、そんな…」

「分からぬ！ 分からぬんだ、リンゴ」

「それを調べに私たちは今ソレンティアにいる。

何かとんでもないことが妖精界に起きている。それは間違いないんだ。

そして、それらはすべて力を持つ魔法使いがやつしたことなんだと思つ

「力はあるが、その力を正しく使つていない魔法使いだ。

魔法というのは、ソレンティアでしか学ぶことができない。

また、元の世界で魔法を使うためには、ソレンティアを正しく卒業しなければならない」

だから、もし本当に彼らが言つような魔法使いがいるのだとしたら、
その魔法使いはソレンティアの卒業生だといつてになる。

「…そいつは、リンドの親の仇だ」
かたき

「まつりと、リンドブルムは零した。

「そんな奴が本当にいて、
リンドの父上の死体を辱めたのだとしたら、リンドは絶対に許さ
ない！」

ああ、と息を漏らしてイデアブルーはリンドブルムを抱き締めた。
そして、悲しげに呟つ。

「リンド、お前に分かつて貰いたかったことは、
お前に仇がいるということじゃないんだ。
嘆き谷の者たちをオークにした奴がすべて悪い。
それは確かだ。

だが、その一方で、オークとなつた嘆き谷の者たちに
郷を襲われたエルフが大勢いるということ。
それも拭い消えようのない事実だということを、お前に知つて貰
いたい」

「きっとHマも、オークに襲われたいくつかの郷の一つか
ソレンティアにやつて来たんじゃないのかな。
ううん。Hマだけじゃないよ、リンド。

オーク化した嘆き谷の者たちに襲われたエルフは大勢いるんだ」

エルフたちがリングブルムを疎ましく思うのも当然だ。それがリングブルムのせいではないと分かっていても、自分の郷が襲われ、親しい人たちが傷つけば、嘆き谷の生き残りであるリングブルムを恨みたくなる。

そつか、とリングブルムは額をイデアブルーの肩に押し付けて呴いた。

「エマたちがリングブルムを嫌うのも当然だ。リングブルムが仇に思つ者がいるように、エマたちも誰かを恨みたいんだ。

リングブルムの父上がみんなを傷付けたのなら、リングブルムがその罪を負うのも当然だな」「リングブルム！」

私は憤りを感じて、リングブルムの前に立ちになつた。リングブルムの声があまりにも悲しげで、あまりにも切なく、そして、あまりにも投げやりだつたから、言わずにはいられなかつた。

私は拳を握つて、リングブルムに向かつて叫いた。

「何よそれ！ 罪つて何よ。

リングブルムは何も悪いことしていないじゃないの！ ずっと2人の話を聞いてきたけれど、いつといいつつリングブルムが悪いことをしたっていつ話が出てきたの？ 出て来なかつたじゃないの！

だいたい、親の罪を子どもが負うつゝこと思ふ、古へれこわよ

「古いとか、そういう問題じゃ……」

「つむわーー そういう問題なのー！」

第一、リンドのお父さん、ちつとも悪くないじゃない。オーラ化だか何だか知らないけど、変な魔法に掛けられて操られちゃったわけでしょう？

エルフたちを襲つたのは、リンドのお父さんの意思じゃないじゃない。

悪いのはすべてそんな魔法を掛けた魔法使いでしょー！」

言いまぐると、すつきりして気持ちが落ち着いた。

私はすっと人差し指を立てて、リンドブルムの鼻先に突き付けた。

「今、リンドが考えていることを言い当ててあげよつか？」

エルフたちがリンドを嫌うのは当然だから、

リンドはネツァク寮を出て行こう。……違う？」

「うつ」

「ダメよ。ネックレスは見つかったんだから、リンドはネツァク寮に残るのよ。

エマにネックレスを返して言つてやらないつづりや。

リンドは悪くない、って。

ちゃんと話せば分かつてくれるはずよ」

私も一緒に話すから、と言つと、

リンドブルムは困つたように視線を漂わせた。

彩がリンドブルムに向かつて微笑む。

ラックも、はるきも、リンドに向かつて笑みを浮かべる。

「帰るよ。そして、Hマリのネックレスを返すんだ」

「帰るよ。そして、Hマリのネックレスを返すんだ」

「もうと決まれば長瀬は無用。」

「リンダブルムの肩の怪我も早く治療しなければならぬ。一回はネック寮に戻ることにした。」

「リンダブルムの小さな体をイーテアブルーが背負つて、リンダブルムの口から呻き声が漏らされた。」

「痛いの？」

心配になつて顔を覗き込めば、無言で頷かれる。

私はリンダブルムの背をさすつた。

辺りが暗くて良かつたと思つ。

とてもじゃないが、枝が肉を貫いている部分を直視することはできない。

想像しただけで、ゾッとした。

「リンダ、意識があると痛いから、眠つてしまつてことよ」「無茶だよ。寝られるものなら、寝るけど」

「リンダブルムは銀髪の従兄の言葉に眉を寄せた。

痛みで寝ていられないと言つのだ。

大丈夫だよ、と言つて微笑むと、ハルシオンは懐から小瓶を取り出した。

小瓶の中には液体が入つており、それを少し指先に垂らして、リンドブルムの額に触れた。

塗れた指が魔法式を描く。

「お休み、リンド。……シエスター！」

じてん、とリンドブルムの頭が力なくイデアブルーの首もとに沈んだ。

しばらくして、すうーすうーと規則正しい寝息が聞こえてくる。

「寝ちゃったの？」

リンドブルムの顔の前で手のひらをヒラヒラさせぐる。
反応がない。

「本当に寝ちゃったんだ」

私はその寝顔の穏やかさにホッと胸を撫で下ろした。
カントラを持つ彩と並んで、寮への帰路を歩く。

“帰路”とは言つが、森の中では道はあつて無きが如くといつやつだ。

何となく「ちがな、」という方角に向かつて突き進むしかない。

そんな不案内でも、これだけの人数がいれば、ちつとも不安を感じないから不思議だ。

怖くはない。

木々のざわめきも、梟の声も、気にならなかつた。

悪いな、と唐突にイデアブルーが言葉を放つた。
驚いて振り向くと、彼は楓のすぐ隣を歩いていた。

「リングのことでも迷惑を掛けた。」の通りだ、すまない
「私からもお詫びします。皆さん、すみません」

面食らつたのは私たちだ。

いきなり謝られても困る！

やめてください、と言つて彼らの頭を上げさせると、

ハルシオンの口からため息が漏れた。

「これからもきっとリングが『迷惑をお掛けすると思います。』
もし、『どうしても手に負えないと思われたら、リングと距離を置
いて下れ。』

リングは傷つくでしょうが、それは仕方がないことなのです、
「どうして、そんなことを言つんですか？」

腹が立つた。

“うちの子をよろしく”と頼み込んでくる母親にも呆れるが、

“うちの子とは距離を置いて下せい”と言つ従兄たちは
張り飛ばしてやりたくなつた。

「迷惑を掛けたかもしないと分かっているのなら、迷惑を掛けないように正せばいいじゃないですか」

リンンドはまだ幼い。

私だつて幼い頃は自分のことしか考えられなくつて、いろんな人を傷付けたし、迷惑を掛けたと思う。

(ううん。

今だつて、誰かに迷惑を掛けたなあと思つ時がある。
それを申し訳なく思い胸が苦しくなつたり、自分が嫌になつたりする)

けれど、それでいいのだ。

苦しくなるのも、自分が嫌になるのも、正そつとこつ気持ちがあるから。

問題なのは、他人に迷惑を掛けていることに気付いていない場合、気付いていても正そつとしない場合だ。

リンンドがもしさうであるのならば、

リンンドを正すことは、その周りにいる者たちの優しさであり、義務だと思つ。

「私たちにはリンドの育て方を間違えたのかもしません」

ぱつりと、

零すように言ったハルシオンに、私は眉を顰めた。

「どういう意味ですか？」

「許されることなら、私たちもリンドを思い、
リンドが傷つかないように、苦しまないように、
助言を『え、求められるより早く力を貸して助けてあげたい。
けれど、それは許されないことなのです。
リンドは誰よりも孤独です』

意味が分からぬ、と無言の瞳をハルシオンとイーテアブルーにぶつけた。

彩たちもじっと息を潜めている。

顔を俯かせ、ハルシオンは静かに言葉を紡いだ。

「父上が嘆き谷でリンドを見つけた時、

リンドは銀朱色の産着にくるまれていました。

銀朱という色は、嘆き谷では魔除けの色なのです。

そのためリンドは

悪しき魔法から免れることができたのではないかと、父上は考えています。

けれど、なぜリンドだけが生き残ったのかといふ原因を探るよう

も、

「 リンドだけが生き残つたところその事実の方が父上には気が掛かりでした。 」

そこに宿命的な意味があるのでありますかと」「ないかもしれない。

いや、おそらくないだらうし、ない方がいいのだと頑張つて。だが、万が一あるのだとしたら、リンドを養育するということは大変な役目を負つことになる」「父上の養育法によつて、リンドはどうよりも成長できるからです。

リンドに關わらず、子どもとこのまゝのまゝのなでしう。生まれ持つた性質といつものもありますが、育つた環境によつて影響を受け、作り上げられていく性格といつものがあります。

父上はリンドが受けたであろう響き谷の影響を恐れたのです

それに、ヒカルシオノの言葉をイデアブルーが引き継いだ。

「 リンドがくるまれていた産着には金糸でリンドの名前が刺繡されていた。 」

“ リンドブルム《翼ある者》” と。

翼。それは“自由”を意味する

「 リンドが飛ぶことができた者は、リンドが自由に生きることを望んだのです。 」

そうと知った父上は、ますますリンドの養育に頭を悩ませました。そして、決断したのです。自由に育てることを

踏み出した足の下になつた枯れ葉が、ガサリ、と身を捩つた。私はハルシオンの言葉の意味を計りかねて、首を傾げた。

「自由ひつじ…？」

「父上の思に通りに育てるといつ意味ではありません。

リンンドの自由を尊重して育てるといつ意味です。

父上は響き谷の者たちに、リンンドに対し、

指図を下さることを禁じました」

「つまり、“ああしなさい”とか“こつしる”“何々しなきやダメだ”

といったことを言つてはいけないんだ。

リンンドが一日中遊びほつけていて、まったく勉強をしないとする。

それでも、そこで“勉強しなさい”と言つてはならないんだ

「リンンドの“勉強しよう”といつ意思に任せて見守るしかありません

「

それって、と彩が人差し指を自分の頬に押し当てた。

「自主性を重んじるひつじよね？

いいんじやないの？ 素敵な教育方針だと思ひナビヘン

何が問題なの？ と小首を傾げた。

すると、まるきの口から重々しいため息が漏らされた。

「お前、よつぽんじゆ親からあれこれつるわく言われて育つたんだな

「えー。ひどい、何それ！

……むう。たしかにその通りだけどさあ」

頬を膨らませた彩に、はるきは肩を竦める。

「自主性を重んじるつてくらいのレベルならいいけど、
リンゴの場合まったく何も言われないってことだろ？
あれこれ言われないってこりこりとは、何でも自分で決めなければ
ならないってことだ。

自分で自分を律して、選択をする。それって、かなり大変なこと
なんだぞ」

「ええ、その通りです。

口うるさいと感じても、人は他人の指示を受けて動くことに
樂さを感じるものなのです」

果たしてそうだろうか、と私は考え込む。

私も彩と同じで、母親から口うるさく言われて育てられた方だ。
特に一番言われた言葉は“勉強しなさい” それから“早く寝なさい”だ。

いだ。

そんなこと言われなくとも分かつている。

だから、“これから勉強するつもりだったのに！” と言ひ返して
腹を立てたり、

“まだ眠くないもん！” と言ひて更に怒られたりするのは、日常
茶飯事だった。

それを“楽だ”と感じたことはない。

むしろ煩わしいことと思つべからんだ。

だけど、想像してみる。

母親があれこれ言わなくなり、

“どうしたらいいの？”と自分の方から尋ねてみると、

“あなたが自分で考えなさい”とそれしか言わなくなつたら…？

突き放されたような悲しい気分になつた。

小学校から中学校に上がるとき、何にも考えずに進学した。

そうすることが当然の成り行きで、何も悩むことがなかつたからだ。

そして、決められた中学校に3年間、文句を言いながらも通い続けた。

中学校から高校に上がるとき、

数多くある高校から進学したい学校を選べと言われ、途方に暮れた。

た。

けれど、母親が“私立に合格しても、授業料払えないから”と、非道なことを言つたので、だいぶ志望校が絞り込んだ。

つまり、そういうことなのだろう。

それしか道がないときは不平を言つながらも、何も考えずにそれに従う。

選ぶ自由があれば悩み、その自由が無条件であればあるほど、途方に暮れる。

そして、いざ条件を出されれば、
その制限に不満を持ちながらも、選択肢を選びやすくされたことに樂を感じる。

ならば、と思つ。

自由とは何なのだろうか。

将来、何になりたいの？

はつきり言つて、聞かれて一番答えに困る質問だ。
そんなこと分からぬ。

職業なんてそれこそ数多くあるし、

自分に何ができるのかなんてさっぱり検討が付かない。

それなのに大人は言つのだ。

『あなたにはあらゆる可能性があるのよ。
自由に職業を選べる権利があるのよ』

何にでもなれるのよ、と言われると、
何にもなれない気分になつてくる。

『自由に絵を描きなさい』

『あなたの好きな物を自由に作つてね』

『作文に思つたことを自由に書いてみましょ』

そんなことを言われても、
何をどうしていいのか分からぬ。

「… ものすくへ困る」

ぱつり、と私は零した。

声はたちまち闇に吸い込まれていった。

闇。

そう闇だ。

自由とは、上も下もない暗闇の宇宙で、
たつた一人彷徨つているようなものだ。

「孤独だ」

独り言と言い張るには些かハツキリと言はずぎたらしい。
皆、ぎょっとして私の方を振り返つた。

私は一同を見渡し、それからイデアブルーとハルシオンに視線を
向けた。

「育て方を間違えたと言つていましたよね？
まだ間に合うと思います。リンドを孤独から救つてください」

『絶対それは違う！ ブルーは優しくない！』

リングの声が私の脳裏に響いた。

それは出会つてすぐのことだ。

リングを抱き上げたイデアブルーに対しても、リングが叫んだ。

その通りだ。

彼らはちつともリングに優しくない。

一見すると、べたべたに甘やかしているように見える。

けれど、ちつとも甘やかしてはいない。

むしろ厳しく、冷たく突き放しているのだ。

「ああした方がいいと分かっていても、俺たちがリングに“ああしろ”とは言えない。

不可能なことを“不可能だ”と教えてやることもできても、

可能である限り、その誤りを先に告げることはできないんだ。

リングが自ら選ぶ様子を見守るしかな」

「リングが窮地に追いやられてもですか？」

「ひどいと言われようと、それが響き谷の領主である父上の決められたことなのです。

私たちはそれに従うしかない

けれど、ヒカルシオンは私の瞳を正面から受け止め、

彼にしては強い口調で言い放つた。

「父上は一度だけリンドに干渉された。
リンドの意思とは関係なく、リンドをソレンティアに送ったので
す」

そう言えば、リンドは書つていた。

伯父のフリューゲルに騙され、ソレンティアの招待状を読んでしまったのだ、と。

おそらくそれがリンドにとって

生涯初めて他人に指図されたことだったのだらう。

“中を開いて声を出して読んでみる”と言わされて、喜んで読んでしまったに違いない。

「リンドが嘆き谷に行きたいと言い出しつて、父上は頭を悩まされました。

嘆き谷の悲劇は未だ解明されていない謎です。

そんな危険な場所にリンドを行かせるなんてことできません」

「それで父上は、リンド宛てに招待状が届いていたのを良こじ」と、リンドをソレンティアに送り込んだというわけだ。

もつとも、リンドが本当に嘆き谷のことを調べたいと言つのなら、そのための力を蓄えられる場所はソレンティアをおいて他にない

そしてもう一つ、とハルシオンは続けた。

「響き谷の者はリンドを特別に扱います。

誰もリンドに指図を下しません。

けれど、ソレンティアにはリンドに対して遠慮無い者が大勢いることでしょう。

ええ、そうです。カエテさん、貴女がその一人です

「え？ 私？」

「はい。数日前、貴女がリンドに“謝つなさい”と言つてこの姿に、ブルーと私は驚愕しました。

そのようなことを言われたのは、貴女が初めてなのです。その瞬間、貴女はリンドにとつて特別な人となりました

「だから、カエテ。

リンドは君の側にいることを選んだんだ。

君には迷惑かもしれないが

学生課での出来事を思つ出した。

リンドが勝手に楓の学科を決めてしまつた時のことだ。

あの時もこの美しい従兄たちは黙つてリンドのやむことを見守つていた。

そして、リンドは選んだのだ。私と同じ学科を専攻することを。

「リンドが自由であることは、リンドブルム『翼ある者』の宿命です。

けれど、自由であり続けることは苦しいことなのです、

「鳥も空を飛び続けることはできない。止まり木が必要だ」

「その止まり木に、カエテさん、貴女がなつて下さいませんか？」

息を呑んだ。

そして、イデアブルーの脇中でじんじんと眠り続けるコンドブルムを見やつた。

そして、緩やかに頭を左右に振つた。

「そんな大それたものには、私、なれません」「いいえ、カエデさんならなつて下さると思ったからお話したのです。

「そうでなければ、話の初めにも言つたように、再度“リングと距離を置いて下わこ”と言つたでしょう」「でも……」

袖を引かれた。振り返ると、彩が笑みを浮かべている。ラックもはるきも私を見つめている。

「楓ちゃん、難しく考えなくつていいんだよ。だつて、それって、リングとお友達になるつていうことだもん」「そうだぞ。友達として普通のことしか頼まれてないじゃねえか」

「カエデ、俺たちもいるだろ?」

「そうか、と思う。

イデアブルーとハルシオンが楓に望んでいることは、私がリンドの心の支えとなること。誤りがあれば正すこと。それは友達であれば当然するであろうことなのだ。

私はリンドブルムの寝顔に視線を向けた。
胸の前に拳を押し付け、頷いた。

22・夜の始まり

長いこと森の中を歩いてきた者たちにとって、食堂の明かりは昼間のように眩しかった。

その明かりの中からジッと森を見つめていた者がいて、私たちの姿を暗闇から見つけ出すと、彼はマイクを片手に大声を張り上げた。

「帰ってきたでえーっ！」

どよめき。

事の結末を見届けようと、寮生たちは窓辺に駆け寄った。

その騒ぎに意識を取り戻したらしい。

リングドはパチリと瞼を開くと、イデアブルーの背中から滑り降りた。

「リングド、走っちゃダメー！」

小さい肩に枝が突き刺さっている様子が
食堂の明かりに照らされて、はっきりと見えた。

痛いはずだ。
ものすごく。

それなのに、リンクは食堂の中へと駆け込んで、辺りをキョロキョロと見回し、Hマの姿を探している。

美しい従兄たちは何も言わない。

私は慌ててリンクの背中を追った。

「うわうわしないの！」

誰か、リンクの傷を治して……

やつとの想いでリンクの体を押さえつけられると、私は自分の視野に影が落ちたのを感じた。

顔を上げると、Hマが目の前に立っていた。

「Hマー。」

見付けた、と笑顔を浮かべて、

リンクは握り締めていた彼女のネックレスを差し出した。

「これ、Hマのだろ？」

ちゃんと持つて帰つてきたぞ

「……」

Hマは顔を歪めて、小さな手のひらに乗せられた自分のネックレ

スを見下ろした。

藍色の石がキラリと光を放つ。

「…ズルだわ」

「え？」

「反則だわ！」

だつて、あなたの力で拾つてきたわけじゃないでしょ！」

意味を計りかねて、私もリンクもHマの顔を見上げて唖然とする。そうよ、と甲高い声が響いた。

Hマの背後にエルフたちがずらりと並ぶ。

「彩ちゃんやラック君、はるき君の力を借りるなんて…」

「ズルよ、ズル！」

「他の寮に所属している従兄の力まで借りるなんてずるー！」

「この勝負は無効よ！」

「いいえ、リンクブルムの反則負けだわ！」

「ネツァク寮から出て行きなさいよ！」

なんてことを言つのだろ？

私は顔を強ばらせた。

リンクの左肩がぬりと塗れている。

つう、と腕を伝つた赤いもの。

ポタリと落ちて、床を汚した。

(ひどい)

ふつふつと、怒りが込み上げてきた。
口々に言い立てるエルフたち。
出て行け、とリングに向かつて言葉を投げる。

(ちゃんとネックレスを持ち帰ってきたのにー。)

夜の森の恐ろしさや心細さ。

エレファントキノコの幻覚相手に、
くたくたになるまで戦つたことを思い出して、私は拳を握った。

(リングは、あなたたちと分かり合つたために戻ってきたのにー。)

怒りを吐き出してやうと口を開いた。

その時だった。

がちゃり、とアンティーク調の扉が音を立てた。

皆、振り返り、現れた人物に息を呑んだ。

「コツン、コツン。

靴底の固い音を響かせて小柄な体が食堂の中に入つて来た。絹のような黄金色の髪を頭の高い位置で2つに結い、

大きな黒いリボンで飾つている。

ゆつたりとした袖から覗いたブラウスにはレースが綺麗に付いており、フリルたくさんのスカートは大きく膨らんでいる。

(可愛い…)

まるで西洋人形だ。ピスクドール

生きて動いていることが奇跡であるような愛らしい少女。その姿を目にして真っ先に歩み寄つた者がいた。

長い焦げ茶色の髪に、犬のような耳を生やした少女で、寮長挨拶時にオードリーの不在を告げたあの物静かな少女だ。

女子寮の副寮長オルガ・マルシェフだと、彩が耳打ちして楓に教えてくれた。

そして、この愛らしい少女こそが、

ネツァク女子寮の寮長オードリー・エブラーーだと。

オードリーはちらりとオルガを一瞥すると、鈴の音のような声を響かせた。

「随分と賑やかなのね」
「オードリー、気分はもう良いの?」

エマを先頭にエルフたちがオーデリーの周りを取り囲んだ。

「心配したのよ。大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ。

あなたたちの甲高い声を耳にしたら、部屋でじっとなんてしていられないもの」

「オーデリー？」

オーデリーはエマたちの顔をぐるりと見渡すと、キッと瞳を鋭くさせた。

「なんて愚かな。

あなたたちはネックレスをめぐらしく勝負で事を取めようとしたのでしょうか？」

そして、リンドブルムはあなたたちが決めたとおり、エマのネックレスを探して戻ってきた。

この勝敗、誰の目にも明かだわ」

「でも、オーデリー。

リンドブルムは一人でネックレスを探してきたわけじゃないわ」

「あら、あなたたちは、

リンドブルム一人で探し出してくるよ」という条件をつけたのかしら？」

オーデリーがオルガから聞いた話だと、そんな条件ついていなかつたわよ。

それに、多くの人に助けて貰えるのは、その者の人徳だわ。良い友達がいるということも、その人の能力なのよ」

でも、と叫んで、ヒマはなおも叫び募つた。

「オーデリーだつてリングブルムが許せないと叫びでしょ」
貴女のことを見下す。

「侮辱？」

オーデリーはつて貴女たちに叫ばれることの方が“侮辱”だわ。

オーデリーを理由にみつともなことをするの、やめてくれないかしら？」

ふん、と軽く鼻を鳴らして、オーデリーはヒマを見やつた。
そして、リングを見下す。
歩み寄り、片手をその顔の前に突き出した。

「リングブルム、ネツァク女子寮はあなたを歓迎します」

リングブルムはその陶器のような白い手とオーデリーの顔を見比べた。

そして、その肩越しに、ヒマたちの歪んだ顔を見る。

ヒマはつかつかと2人の間に割つて入ると、
伸ばし掛けていたリングブルムの手を、バチンと叩き落とした。

「」の子は“嘆きのリンドブルム”なのよ！

どうして仲間として受け入れることができるの？

」の子のせいで私はとても悲しい思いをしたわ！」

「違う！… リンドのせいじゃない！」

すかさず私は叫んだ。

エマは振り返り、青く澄んだ瞳で睨んでくる。

ハッとする。

その瞳はとても悲しげだった。

「私は虹の麓の出身なの。

虹の麓がオークに襲われた時、私はまだ幼かつたから、
実を言つと、あの時のことはあんまり覚えていない。
だけど、とても怖かつたということは覚えているわ。
怖くて、怖くて、泣き叫んでやりたいんだけど、
不思議なの、本当に怖いときつて泣き方を忘れてしまつものな
よ。

お父さんが床板を外して、私をその下に隠したの。

お母さんに、静かにしていなさいって言われたから、

私、ずっと一言もしゃべらなかつたわ。

ううん、しゃべれなかつたの。

オークが去つてからもしばらくしゃべり方を忘れてしまつっていた
わ

淡々と語りしていく話に胸が締め付けられた。

リンドは声を震わせた。

「Hマ、『ごめん』

「あなたが悪いわけじゃないって、頭では分かっているの。
だけど、胸が苦しいのよ！」

だつて、オークに襲われたせいで、
美しかった虹の麓はめちゃくちゃになってしまったんですもの。
家を壊されただけじゃないの。

烟を荒らされて、その年の食べ物がなくなってしまったの。
怪我を負つたり、亡くなつた人も大勢いたわ。

オークに襲われた翌日、

烟を一つ潰して、みんなでいくつも穴を掘つたのを覚えているわ。
その穴一つひとつに遺体を埋めるの。

昨日まで元気だったのにどうして、って思ったわ

「……ごめん」

「だから、謝らないで。あなたのせいじゃないものー。」

「それでも、Hマはリンドの顔を見ると、
悲しかつたその日のことを思い出すんだろ？」

「……」

ううう、とHマの口から息が漏れた。

そして、頬を涙が伝う。

リンドは腕を伸ばして、その手を指先でそつと拭つた。

「だから、いいんだ。

Hマもみんなも気が済むまでリンドを恨むといい。
もしかしたら、リンドはそのために生き残つたのかもしれない

「……バカね。そんなわけがないじゃない。」

だいたい、その小さな体で全員分の恨みを背負い込むと思つて
いるの？

できるわけがないじゃないの。

それに、そんなことをしたら、私はますます自分が許せなくなつ
てしまうわ

「エマ？」

エマはリングに向かって右手を差し出した。

「よひーん。我らが翠玉の寮、ネツァク寮へ」

「エマ」

「私たちはあなたを歓迎するわ」

パシン、と音を立てて、リングはエマの手を握った。

いつの間にか私の頬にも涙が伝つていた。

熱い何かが胸の内を支配する。

横を見やると、彩も袖で田代元を拭つていた。

「楓ちゃん……」

「うん、よかつたね」

「よかつたあー」

よかつた、よかつた、と言いながら彩が抱きついてきた。
ラックもほるきも微笑んで、リングとエマのもとに駆け寄つてい

つた。

それから、オードリーの命令で
オルガがリンドの肩の傷に回復魔法を掛けることになったのだが、
誰が枝を引き抜くかで少しもめた。

イデアブルーが、

ここには他の誰にも任せられないから自分が抜くと言い張ったのだが、
いざとなると、痛そうだなあ、可哀想だなあ、と、
涙目になつていつまで待つても抜けたとしない。

焦れたのは彼の弟のハルシオン。

「はいはい、邪魔なブルーはどういてね。
リンク、いくよ。 - - はい、抜けた！」

彼はあっさりと枝を抜いてみせて、みんなから拍手喝采を受けた。

夜はまだ始まつたばかり。
ヴィンスが寮長挨拶をやり直すと言い出したり、
それを止めようとして乱闘が起こつたり。

食堂に響く笑い声は、

青白い光を放つ月が沈むまで絶えることがなかつた。

だが、食堂から離れた一室で、一人腰掛けに座り、物思いにふける少年がいた。やがて彼の部屋の扉が静かに開かれ、マリー・ゴールドの頭が覗いた。

「ラディー？」

名を呼ばれた少年は、くへ伸びた銀髪を僅かに揺りひいて振り返る。

「なんだ、シユナか」「なんだじやない。食堂に顔を出さないか？」「みんな、楽しんでこーろるが」「そつみみたいだな」

廊下が静まり返つてゐるといふこと、誰も自室に帰らうとしていないうまでも、歓迎会は楽しへ進んでこらへりしことだ。

「俺はいい」「混ざり者がいるから？」「ヴィンスもオーデリーモ、『嘆きのコンドブルム』を受け入れた

マリー・ホールドの髪の少年がそつと顎をすくへ、

銀髪の少年は、そうか、と短く言つて窓の外に視線を流した。すると、彼の金茶の瞳に、闇に紛れるようにして寮から抜け出す者の姿が映つた。

赤毛のノックスペンナリアン。すぐに何者であるか検討が付いたが、それきり彼は何も語らなかつた。

一方、寮から抜け出した紅巳はエレベーターに乗ると、ティファレト寮に向かう。ティファレト寮のサロンで彼を迎えたのは、波打つ豪奢な金髪を持つた美しい少女だった。

滑らかな白い肌に、エメラルドの瞳。紅巳は彼女の美貌の前で、優雅に、そして紳士的にお辞儀をしてみせた。

「眠り森のお嬢様に、」報告
「ネツァク寮のエルフたちは、まことにやつてくれたのかしら？」
「残念ながら……」

紅巳の報告を受けて、少女は口惜しそうに眉を顰めた。
少女の名前は、コリシュ・ル・クロイッセン。
眠り森の領主、ヴェルナーの一人娘だ。

彼女は手にしていた本を閉じると、すくりとソファから立ち上が

つた。

「もう少し頑張ってくれるものだと思つていたのだけビ。

「仕方がないわね」

「もう一つ仕方がないことが

「何?」

「以後、うちの寮の者はリンドブルムを“寮の家族”として接する
ようこ、元より

との寮長たちのお達しです。

つーわけで、お嬢の田や耳になるのも今回限りや

おびけた道化歸のよひに笑つと、紅口は無駄なほど一寧にお辞儀
をした。

そして、片手を振つてサロモンを去る。

しばらぐして、残されたコリシュは薄く笑みを浮かべる。
何やら滑稽に思えてきたのだ。

ふふふつ、と声を漏らすと、彼女は一人呟いた。

「嘆きのリンドブルム、会うのが楽しみだわ

自由とは、自分の意志によって自分の行動を選択できる」とである。

人はあらゆるしがらみの中で“自由”に憧れるが、
眞実“自由”である者は、自由であることによるあらゆる重荷を
背負う。

なぜなら、自分の意志によって選択した自分の行動は、
すべて自分のみに責任があるからである。

アルヘイムの哲学者ゲオルク・クニーゼル著『自由の刑』より

22・夜の始まり（後書き）

この小説は、SNG「紅炎のソレンティア」（<http://s01entia.jp/>）の一次創作小説です。オリジナル設定や独自の解釈をしている部分があります。

「紅炎のソレンティア」をプレイし始めたのは、2008年の1月。「小説家になろう」の広告バナーのイラストに惹かれたのがきっかけで、かれこれ2年以上も遊んでいます。

課金までてしまい、二次創作までして、どっぷりハマっていました。

もしこの小説を読まれまして、興味を持たれた方は、ゲームを遊んでみて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0965m/>

翼を抱く者 - 紅炎のソレンティア -

2010年10月10日16時04分発行